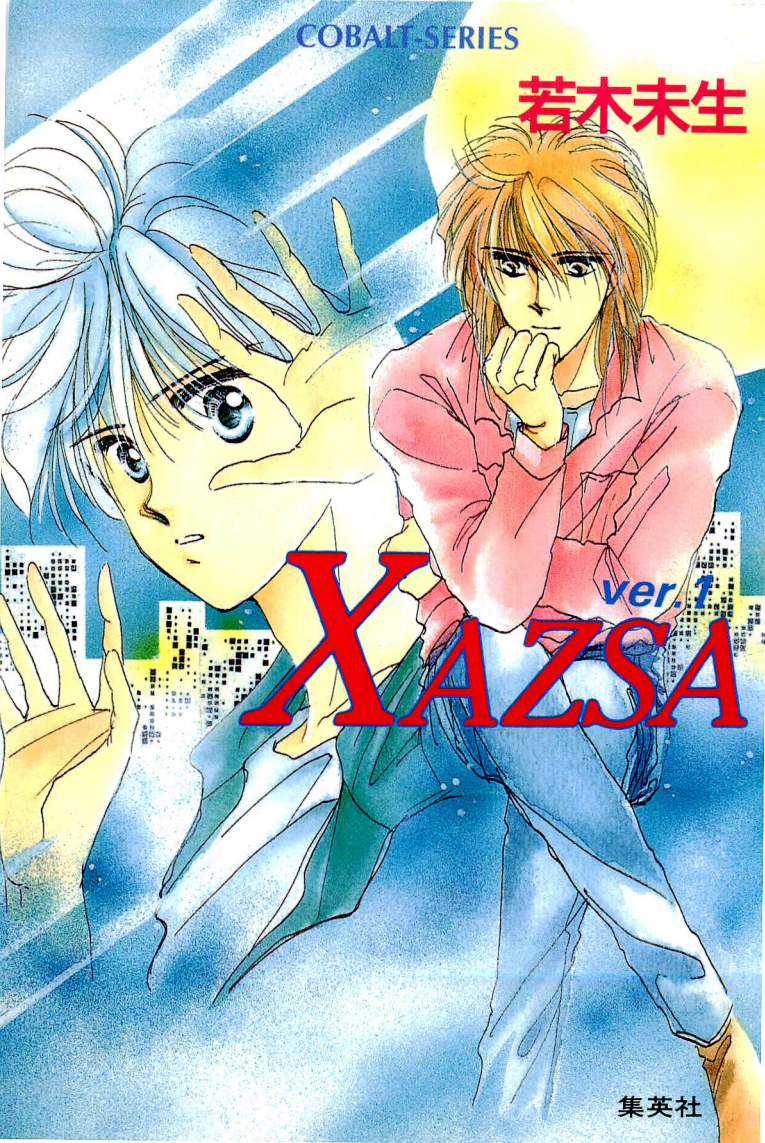

COBALT-SERIES
若木未生
ver.1
XAZSA
集英社

夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト早水京平が偶然出会った少年・ザザ。不思議な魅力を持つ彼は、天才少女浅見優亜によって作られた国家機密級の機械人間だった！　ひとつの大きな夢のため人間になろうと優亜の保護下を飛び出したザザは、必然的に京平を事件にまきこみ、現在は早水家に居候中である。様々な人々の中で日々、人間らしさ体得に励むザザだが――。シティサイバーファンタジー。

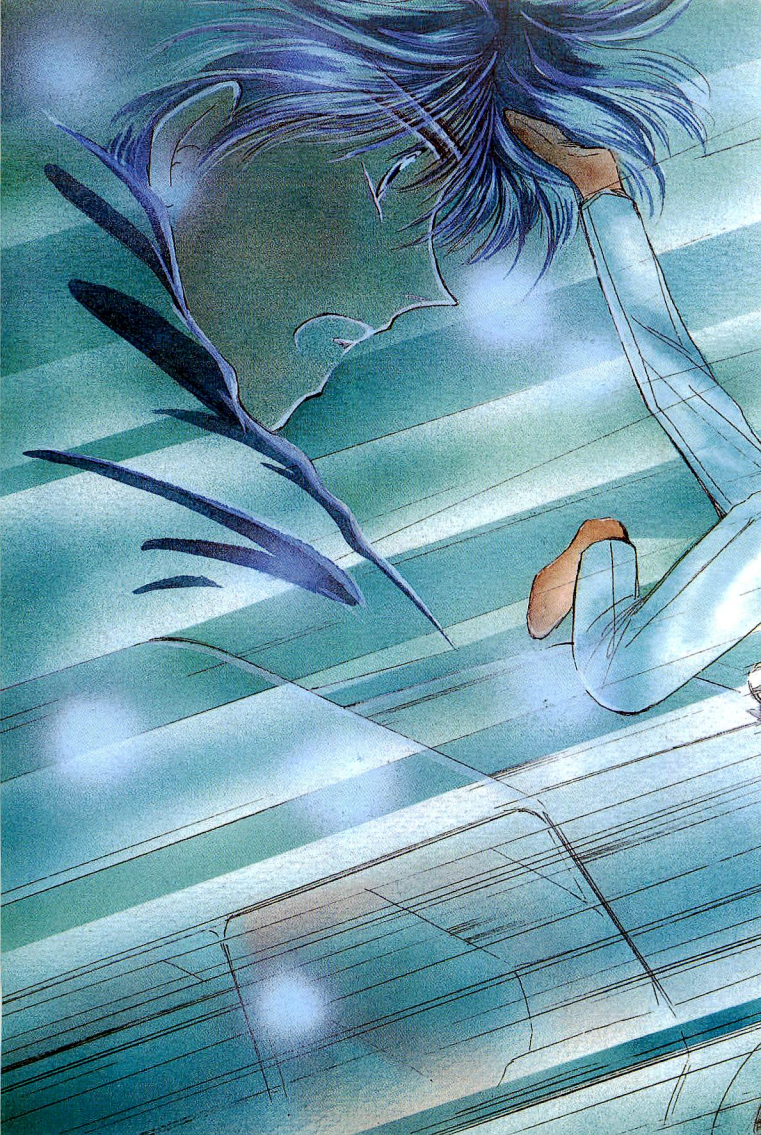
恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社


Ver.1
XAZSA
イラスト／田村純子


カリーナはベンツの左側にぴたりと並んで、
そのまま同じ速さで走りつづける。
「相楽(さがら)くん、右のドア開けて」
え、え!?
走ってる最中なのに?
「まっ……まさか」




ユア。
サビシイカオヲシナイデ。
ボクハ、ゼロノヨウニツヨクハナイケレド……。
ユアハヒトリジャナイ――



COBALT-SERIES

XAZSA ver.1

若木未生

集英社

目次

File 0 XAZSA……11

File 1 月に吠える……61

File 2 少年よ、大志を抱け……109

File 2.5 レポーティング・スペシャル……157

File 3 ピアノ・ソング……171

あとがき……224

XAZSA登場人物紹介



ザザ

天才少女・優亜によって製作された国家機密級の機械人間。優亜を愛し、彼女のために人間になりたいという途方もない夢を抱いている。

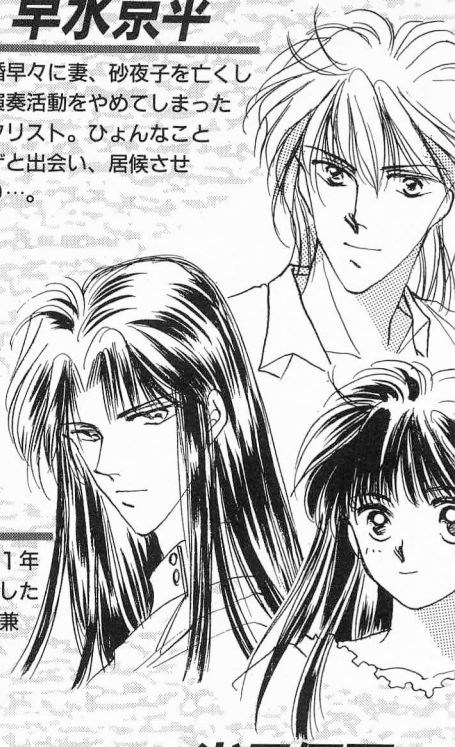


早水真砂

砂夜子の弟。高2。両親の遺産の豪華なマンションに京平と暮らしている。口は悪いが、家事全般を担当し、京平の面倒をみるケナゲな少年。

早水京平

新婚早々に妻、砂夜子を亡くし以後演奏活動をやめてしまった天才ギタリスト。ひょんなことから、ザザと出会い、居候させる破目になり…。



ゼロ

優亜がザザを作る1年前に父親と共同製作した機械人間。優亜の護衛兼お目付け役でもある。ザザの「人間になりたい」という気持ちを理解できないでいる。

浅見優亜

天才少女科学者。その頭脳を悪用されるのを恐れ、普段は国家に保護されている。だが、ザザの一大事にはどこへでも駆けつける元気のいいお嬢さま。

イラスト／田村純子

File 0

XAZSA

1

マネキン、だよな。

第一印象は、そうだった。んでもって、そいつがギコギコ、と動いてポーズを変えた時になって、おお、なんだ電動の人形だったか、なんて思い直した。にしても、よくできとるよなあ。

場所は銀座の交差点である。時間は夜の十時過ぎ。俺は東京はどこも好きだが、なかでもこの交差点は、明るいくせに下品にならなくて、賑やかなんだがうるさくなくて、夜になっても寂しくならなくて、しかもガキがうろついてないもんだから、ずいぶん気に入っているんである。

で、用もないのにぼーっと突っ立って人の流れを眺めていたわけだが。

そいつは車のショールームの前に、ヨーイドンのポーズで静止していた。ジーンズの上下。帽子を目深にかぶっているので、顔はよくわからない。あ、言い遅れたが、男だ。

いやでも、ちょっと待て。

ショールームの……中じゃなくて、前なんだよな。……あれ？
ギコギコギコ、とそいつがまたポーズを変えた。今度は深々とお辞儀をして、そのまま止まる。止まったら最後、微動だにしない。
人形だよなあ。あれえ？　でも。
奴の足元に小さい缶がある。今までゴミだと思ってたが、もしかしてもしかすると。
俺はのそのそと、その缶のところまで歩み寄った。
缶の中には百円玉が二枚。
俺はその場にしゃがみこんで、しげしげと『お辞儀くんポーズ』のそいつを見上げた。
「おい」
呼んでみたが、ちらとも動かない。
「わっ」
脅かしてみたが、効果なし。これはすごい。
「いただきます」
シーチキンの空き缶をひょいと持ち上げて、しゃがんだままカニ歩き。
「あっ、あのっ……！」
さすがに慌てた様子でそいつが顔と声を同時に上げた。意外と子供っぽい表情だ。ハイティーンかな。

「あれま」
俺は肩をすくめて奴に目をやった。は？　と奴が聞き返した。
「やっぱり人間じゃないか」
よかったよかった。よっぽどこの京平さんの目も狂っちゃったかと思ったぜ。
言われたそいつのほうは、なんだかきょとんとしている。
「いやあ、見事でさ。芸人の類いは時々見かけるけど、なかなかここまでプロフェッショナルな機械振りは見られないもんね。いやいやご立派。イカスぜ兄ちゃん。ステキーっ、ラリホーハラショーっ、泣かせるーっ」
「……あの……？」
やんやの喝采を送ってやったが、奴にはよく通じなかったらしい。マジメなお兄さんだったのね。すまんな、変な客で。なんたって俺はほら、暇だし。少しばかり……じゃないか、けっこうアルコールも入っておるしな。
俺はよれよれコートのポケットに片手を突っこんだ。小銭を探したんだが、五百円玉しかない。ちょっともったいないなあ。ま、いいか。
缶の中にコインを落として、奴の前に戻してやる。
「楽しませていただきました。では失敬」
手を振って、俺は気分よく歩き出した。

――大道芸、ってやつだ。道端でやるパフォーマンスである。この手の連中はどこにでもいるもんだが、俺はクオリティの高い芸能になら賛辞は惜しまぬたちなのだ。

「す、すみません、ちょっと待ってください」

若い男の声が追っかけてきた。およ。

パフォーマンス兄ちゃんが小走りに追いついて、俺の隣に並んだ。帽子を脱いで、ぺこりと頭を下げる。

「あ、ありがとうございました」

そんな熱心に礼を言われるとこっちが恐縮してしまう。なにもまた、五百円くらいで。

「あの、よかったら、お名前を聞かせてください」

おおおっ？　な、なにやら俺ってば、いきなり大恩人になったような。

「名乗るほどのもんじゃないが」

ちょっとカッコつけてみたりして。

「――早水京平、というヤクザな野郎さ」

「ヤクザさんなんですか？」

「ち、がーうっ！　今のは言葉のアヤだろが」

どこまでもマジメな奴である。俺の訂正にも、はあ、などと呟いてまだよくわからん様子でいる。大丈夫か、こいつ。

「いつも銀座にいるのか？」
「いえ、そんなことはありません。できるだけいろんな所に行くようにしています。たくさんの人を見て、勉強するんです」
「ほほう感心」
役者の卵かな。
「俺もあちこちフラついてる奴だから、どこかで見かけたらコール送ってやるぜ。精進したまえ。じゃあな」
「はい！」
元気な返事だ。田舎の好青年、ってとこだろう。行きかけて、俺は……何故か、本当に何故かふりむいて奴に問いかけていた。
「おい、コールは何がいい？」
「え？」
「名前」
「あ、――ザザ、です。おやすみなさい」
人なつっこい笑い方をして、奴はもう一度ぺこりとお辞儀をした。
それが、俺とザザとの最初の出会いだった。

2

「京平ーっ！　いつまで寝くさってんだてめえはーっ！」
どすばすぼす、とベッドが蹴りつけられた。俺は毛布ごと床にヘッドスライディングする。
「……おやおや真砂くん、おはよー」
「おはよー、じゃねーんだよ、もう六時なんだよとっくにっ！　言っとくけど朝のじゃないからな、夕方だからな、夜だぞ夜っ！」
「そりゃまた、ぐーっど、いぶにーんぐ」
「寝ぼけてんじゃねえっ」
口の悪い弟である。俺はよろよろと部屋を這いずり出て、ダイニングへ向かった。文句たらたら、愛すべき弟もついてくる。
「ったく俺が学校行くときも寝てて、帰ってみたらまだ寝てやがる。いいかげん頭が腐るんじゃねーの？　このどでかい家の掃除だけでも大変なんだからさ、少しは家事のひとつもやれってんだよな。毎日毎日ぐーたらしやがって誰がメシ作ってやってると思ってんだよ。この優秀な俺にこんなボケた兄がいるなんて世間に知れたら恥だぜ、ほんとにっ」
「真砂くんのご飯は美味いから好きさー」

「おだてて話そらすんじゃねえっ」

廊下の端から四枚のドアの前を通過し、階段をおりて、サンルームをつっきり、また廊下を通ってリビングの隣のダイニングルームへ到着する。我々二人だけで住むには、実際どでかいマンションである。しかも兄は職業不定、弟は高校二年生で、収入はスズメの涙より少ないくらいだ。なんでそれでもこんなに立派な所に住んでいられるのか？　……決まっている。我々が大金持ちだからである。

「今夜は仕事だろっ。さっさと食えよ、京平ハンバーグ好きだろ。味つけ和風にしてあるからな。味噌汁の具は豆腐とわかめだ」

「しやわせだなあ。僕は、君といるときが一番しやわせなんだ」

「食う気ないのか、もしかして」

「反省しました。いただきます」

やれやれ。砂夜子さん、料理の腕だけは君に似たのにねえ。

「なんだよ、その溜息」

目ざとく見つけて真砂くんが睨む。

「砂夜子のこと考えてただろ」

「滅相もない。料理の腕だけは砂夜子さんに似たなんて、全然、ちっとも、露ほども考えてないもんね」

「底が割れてんだよ、京平の発想なんか」

砂夜子さんは、俺の妻の名前である。今も妻だし、これからもずっとそうである。

そして砂夜子さんは、真砂くんの実の姉である。早くに親を亡くし、たった二人で莫大な遺産を継いでしまって、そのために親族のなかでも孤立してしまった姉弟だ。

一年前に俺達は義理の兄弟になり、その三カ月後には二人きりの兄弟になっていた。以後、今日に至るまでこの調子で暮らしている。なんとなくそうなっちゃったのである。

「さっさと食って出かけろよ、俺これからレポート書かなきゃならないんだからさ」

「へーほー」

もごもごと答えて、ほうじ茶を飲みくだす。

俺の現在の仕事は、FMの小さな深夜番組のDJであったりする。が、別にこれが定職というわけでもない。俺があまりにフラフラしているのを見かねて、昔なじみのディレクターがあてがってくれたアルバイトだ。

「おい靴下！　穴があいてるのやめろよ。ブーツのかかと直ってるからな、玄関に出してある。ほらハンカチとキーホルダーと財布と時計。ちゃんと持ったか？　じゃ行ってこい」

「さんきゅー、まいはにー。ぐっどなーいと」

至れり尽くせりの真砂くんによって、俺はほとんど自動的にドアの外へ送り出された。幼稚園児以下の扱いだな。

さしずめ着せ替え人形か、はたまたマリオネットか、ロボットか。

今の俺はそんなもんだよ、砂夜子さん。

エレベーターの扉が開く。俺は「オズ」のブリキ人形のことを思い出していた。あの、Heartを欲しがって泣いてたブリキマンを。

そしてふと、ゆうべ交差点で出会った堅物パフォーマンス兄ちゃんを連想して、なんだか懐かしいような気分になったのだ。

3

「ほい、おつかれさん」

放送が終わったのは夜中の二時半だった。俺にとっては昼間みたいなもんだけど。

「京ちゃん、飲みに行く?」

「んにゃ、帰って弟と遊びます」

ディレクターの高ちゃんはいい奴である。こんなに趣味に走った選曲を堂々と公共の電波に乗せちまうのは俺たちのコンビくらいだ。

「遊ぶって、何だよ。賭け事じゃないだろ」

「オセロ」

「おまえなあ……」
いい年の男がオセロで時間を潰してどうする、と奴が言いたいのはよくわかる。
「嘘だよ」
にっ、と口許をゆがめてみせて、俺はよれよれコートをひっかけた。まっすぐスタジオの出口に向かう。
「なあ」
局のマークが入ったトレーナー姿で、高ちゃんが寄ってきた。
高ちゃんは小柄である。ちょっと太めで、熊のプーさんのようにふんわかした奴だ。……いい奴なんだよ。
「もう……そろそろ、いいんじゃないか。また、ギター、弾いてみる気ないか」
マジメな顔しやがって。
「ありがとよ」
俺はにんまり笑ってそのままコートのすそをひるがえし、重いドアを押し開けた。
「でもまだ『そろそろ』の『そ』くらいなんだ。……悪いな」
おやすみ、と高ちゃんが残念そうな笑顔で手を振った。
高ちゃんは本当にいい奴だ。俺はばちあたりだよ、実際。
煙草が恋しくなったが、一度やめちまったもんをまた吸いはじめる気にもなれない。空しく

コートのポケットに両手を突っこんで、ありもしないキャビンを探し求める午前二時三十六分。キャンデーでも買うか。

局の裏口は寒いばっかりで誰もいなかった。がらんとした車寄せに、不必要に高い足音を響かせて俺が出て行った時。

カッ、と別の靴音がすぐ脇で鳴った。

「――失礼ですが」

突然の声に、俺も少なからずびっくりする。

影かと思った。奴が真っ黒のライダースーツ姿だったからだ。

薄暗い水銀灯が、微妙にその横顔を照らす。そこだけ白く浮き上がったようで、えらく気味が悪い。なまじそいつがまた、ミョーに冷えびえした美人だからますます怖い。……女じゃないけど、美人は美人だ。

「早水……京平さん、ですか」

「いかにも京平さんですが」

周りに人がいないのが気になった。物盗りじゃなさそうだが。

一歩、奴がこちらへ近づいた。

俺が動かなかったもんだから、お互い肩が触れそうな距離まで接近したことになる。

「何の用かな」



早水の――つまり真砂くんの財産めあての不埒な奴なら、俺は一発くらわして逃げるつもりだった。それくらいの心得と自信はある。

その男は、ふっと顔を寄せて、瞳の高さをそろえるように俺を見た。

「……ザザ、を知っていますね」

「え？」

言われた意味がわかるまでに一瞬の時差があった。相手の肩が動くのを俺は見た。同時に俺の足が地面を蹴っていた。奴の拳は空をきる……はずだった。

「！」

紙切れでも扱うように無造作な手が俺の首の後ろにまわり、ぐいと手前に引き寄せた。なんだこの馬鹿力!?　振り払おうとした俺の腕をもう一方の手があっさりと押しとどめ、次の行動に出る間もなく奴の膝蹴りが俺のみぞおちへ大命中していた。

「っ……」

脳天まで痺れてきやがる。な、内臓破裂したらどーすんだバカ……。

「急いでいるので、申し訳ありません」

沈みこむ俺の上体を支えながら、奴が全然申し訳なさそうじゃない声で言いやがるのが聞こえた。あ、謝ったってなあ……痛いもんは痛いんだっ！　バカモノっ！

追いうちで、鈍い衝撃が後頭部に降ってきた。痛みに加えて浮遊感と吐き気までがぐるぐる

身体中を踊りだし、俺は完璧に意識を失った。

——そういや昨日の夜にさ。

どこだったかな……銀座あたりで、ストリートパフォーマーの兄ちゃんに会ったんだ。どこにでもある芸なんだけど面白かった。ロボットの真似をして動くの、見たことない？それ。

考えてみると、ロボットもどきなら今の世の中、ちょっと見まわしたらいくらでも歩いてるじゃないですか。人間のフリしてるけど中身はロボットって奴。そういう奴がロボットの真似してもつまらんのだけど、昨日の兄ちゃんはロボットのフリをやめたら立派に人間だったわけ。嘘と本当がハンパに混じった芸よりは、そういう思いきり嘘の芸のほうが面白いね。

というわけで、次の曲はそのザザくんへのエールだ。受け取りたまえ。……つっても聴いてないか。「1・0・0」で「Thank a Show」……

かすかに聞こえる……ラジオの音。

なんだこりゃ、俺の放送じゃないか。テープか。どこで流してるんだ。恥ずかしいからやめてくれないだろうか……。

「……！　……っ！」
誰かが怒鳴っている。
「……京平ーっ！　起きろーっ！」
――お？
俺はのっそりと目を開けた。真上の照明が眩しくて周りがよく見えない。しかし今の声は真砂くんじゃないか。
背中にあたるふわふわの感触は、うちのリビングのソファだろう。してみると今のは夢なんだろうか。
が、直後に甦ってきた頭痛がガンガンと俺を現実に引き戻した。あ――まぎれもなくホンモノだ、こりゃ。
「大丈夫ですか」
あ、雪女。……じゃなくて。
仰向けに転がってる俺をのぞきこんだのは、先刻のクールな暴力青年であった。
リビングの電気に、だんだん目が慣れる。
「だ、大丈夫って……殴っといて言うかあ？」
「言わないよりはマシと判断しました」
真顔で言って、そいつは上半身を起こす俺に手を貸した。

時計を見ると、あれから一時間弱たっていた。つまり真夜中だ。真砂くんもさすがにパジャマ姿で椅子に……椅子に、え？

「真砂くん、何してるんですか」

「そいつに訊けよっ！」

思わず尋ねた俺に、真砂くんは噛みつくように答えた。なんと真砂くんは椅子にロープでぐるぐる巻きにされているのである。

「彼は、人質です」

クール男が、短くそう言った。は!?

「真砂っ！　セキュリティ・システムはどうなったんだ!?　なんでおまえがそんな簡単につかまってるんだ!?」

「知らねえよっ！　いきなりシステムは全部ストップしちまうし、このヤローはやたら強いし、こっちは寝起きだ、悪かったなあっ！」

……なんてこった。この超高級マンションの警備システムが全く働かないとは。

「人質？」

「あなたに言うことをきいていただくための、です」

あくまで無感動な答えが返ってくる。俺はすぐ目の前に立つバカモノの、能面みたいな顔を見上げた。

どうも、変だ。これだけ手荒な所業に及んでいるというのに、犯罪者らしく興奮していたり焦っていたりもしないし、殺気も何もありゃしない。……そもそも、俺は縛られもせずに座っているし、奴は武器ひとつ持っていない。こんな手抜きの脅迫があるか？

「なあ、おい……」

言いかけた俺の台詞を遮って、奴がキッと鋭い視線を俺へ向け、口を開いた。

「もう一度、お尋ねします。ザザに、お会いになりましたね？」

……会ったがどうした。

思わず、そう言い返しそうになっちまった。あの善良そうな田舎モンと一度きり会ったからって、それが何だというのだ。

「名前を聞いただけだ。別に友達じゃない」

「でも、ザザの顔を見ている。そうですね？」

しつこい野郎だな。

あの兄ちゃんはよほど面倒な厄介事でも背負ってたんだろうか。しかし家出人とか、それくらいじゃここまでやらんだろうし……。

「そりゃ、顔ぐらい見ましたよ。でもなあっ、あんな街中で突っ立ってりゃ誰だって見るだろうさ、そんなもの」

ほとんど投げやりに俺が答えたとたん、ぶっ飛びそうな勢いで、この部屋と隣のダイニング

をつないでいるドアが開いた。
「ザザはっ……！　ザザはどこにいたの!?」
「お嬢様！」
なんとも可憐な声と、厳しい声が交差する。クール男は制止したかったらしいが、ドアをぶち開けた当人はまっすぐに俺のほうへ走ってきた。
首をねじまげてそっちを見て、俺はちょっとばかり唖然としてしまった。
おじょーさま。……確かに。
ピンクのひらひらドレスと、白いふわふわリボンと、真っ黒なさらさらヘア。純粋無垢そのもの！　と背中に看板しょってそうな、あまりに浮世離れしてて一歩間違えるとギャグの世界に行っちまいそうな、しかし天性の気品らしきものをしっかり備えているためにかろうじてカッコがついてるという、とにかく、とにっかくっ、場違いそのもののかわいらしいおじょーさまなんである。惜しむらくは……小学生だ、どう見ても。
「ザザに、ザザに会ったんでしょ!?　あの子、どこにいたの!?　何をしてたの!?　どんな様子だったの!?　答えなさいったら！」
答えるスキもないくらいに問いかけられて、俺としてはどうしていいかわからん。
「お嬢様、話なら私がいたしますから」
「どきなさい、ゼロ！　邪魔しないで！　これは命令ですっ」

「なりません」
「あたしの命令が聞けないの!?　無礼者、控えなさい！　ゼロ！　ゼロったら！」
「聞けません」
「ゼロなんか嫌いっ!!　ゼロのばか――っ!!」
クール野郎が俺からお嬢を引きはがし、その結果、俺たちの目の前でどういうわけか修羅場が発生した。じたばたと彼女が騒ぎまわり、ゼロとかいうそのクール野郎が無表情に応対している。……なんなんだ、これは。
「……か、かわいいかもしんない」
ぽつりと真砂くんが呟いた。ほえ？　と俺はそっちに目をやった。
「おい、もしや真砂くんにはロリコンの気があったのか？」
「そうじゃなくてっ！」
真っ赤になって怒鳴られる。あ、そうですか、はいはい。ふうーん。
などと考えている余裕があるということは、つまりこの場からすっかり緊張感が失せているということなのだ。で、脅迫はどうなったんだろうか。なんだか俺のほうが相手の立場を心配してしまう。
「ザザなら元気だったぜ」
修羅場にピリオドを打つために、俺はそう声を投げてやった。お嬢が言葉を呑みこんだ。

「銀座のショールーム前で見かけた。芸が見事だったから五百円提供したら、奴のほうから俺の名前を訊いてきたんだ。なんでも人間をできるだけたくさん見て、勉強するんだとか言っていた。俺と話したことはそれくらいだ」

「……勉強？」

大きな瞳をまんまるに見開いて俺の台詞を聞いていたと思ったら、おじょーさまはぺたんと床に座りこんでしまった。

「どうしよう……！」

すっかり途方に暮れたように、両手で口許を覆って。

「やだやだ、どうしよう、ゼロ！　やっぱりあの子、本気なのよ！　本気で人間になるつもりなのよ！　信じらんないっ。なんでいきなりそんな馬鹿なこと考えるの!?　どうなっちゃってんの!?　もおおおっ、ザザのばか！　ばかばか！　大ばか！　大嘘つきっ！　ずーっと一緒にいるって言ったのにーっ!!」

「……はあ？」

なにやら聞き捨てならないことを聞いたような気がして、俺はぽかんと口を開けた。

おじょーさまは座りこんだまま、小さい拳で床を叩いてパニックしている。こっちの言うことなんざ聞こえていない。代わって、ゼロが俺のほうを振り向いた。

「……わかりましたか」

俺はぶんぶんと首を横に振った。何がわかるんだ、今ので。
しくしく泣きだしたお嬢の前に、盾になるようにゼロは立ち、改めて正面から俺を見た。
「ザザは人間ではありません。私も同じです。私たちは、この浅見優亜さまによって作られた機械人間――マシノイド、なのです」

4

めまいがした。
いくらなんでも、その……冗談にしちゃバカバカしすぎるだろが。
「京平……俺、現実逃避していい？」
「俺を置いて逃げないでくれ、真砂くん。頼む。一生のお願いだから」
ぼそぼそ言い合う俺たちにはおかまいなしで、ゼロが言葉を続ける。
「優亜さまはまだ十一歳です。が、普通の子供ではありません。この国で、いえおそらく世界でもただひとりの天才児です。生来の資質もさることながら、今は亡き父上によって英才教育を受けたことも手伝って、もはや優亜さまと匹敵する頭脳の持ち主はおりません。つまりこの方の存在は、世界の情勢を左右するどころか人類の存続にもかかわるほどの脅威なのです。わかりますか？」

ジンルイのソンゾクったって、おい……。

「優亜さまのお父上は浅見怜芳博士といって、高名な理工学者でいらっしゃいます。私は博士と優亜さまのお二人による共作ですが、これは優亜さまが六歳の時のことです」

娘も娘なら、親父も親父だ。そんなもん作るか、普通？　ついていけん。

「七歳の時にお父上が亡くなられ、優亜さまは国家によって保護されました。その一年後に優亜さまが独自に製作されたのが、ザザです。優亜さまはその頭脳を悪用されるおそれがあるため、ずっと世間から隔離されて暮らさねばなりません。ですから我々は優亜さまの護衛であり遊び相手であり、なおかつ監視者でもあるのです。――ところが、その役目を放棄してザザは我々のもとから脱走しました。三週間ほど前のことです」

「……脱走？」

「はい」

冷ややかなゼロの返事。

俺はあの、妙に人なつっこいザザの笑い方を思い出していた。――あれが逃亡者の目だろうか。逃げている奴の表情だったろうか。

それに。

あれが人間じゃないなんて、そんなことあるだろうか。

だって、俺と話したんだぜ。慌てたり、笑ったり、意気ごむように礼を言ったりして。

この、ゼロって奴だってそうだ。姿かたちはまるで人間と変わらない。声も、仕草も。ちょっと無表情なきらいはあるが、そういう性格の人間なら、いないわけじゃない。人間じゃないなんて……簡単に言えるのか。

「ザザは、なんで脱走なんかしたんだ？」

全くの作り話かもしれんという気もしたが、こうなったらつきあってみるつもりで俺はゼロに尋ねた。

と、少しだけ、ゼロの表情が変わった。変わった、ように俺には思えた。ごくかすかに、しかしきっと沈痛に……。

「……人間になるために、と、それだけ言い残していきました」

うちのマンションのセキュリティ・システムを沈黙させたのは、天才おじょーさまの手腕なのだという。そう言われてみると、やっぱり天才なのではとも思えてくる。

ザザが消えてからというもの、おじょーさまは目もあてられないほど心配して心配して、とうとう禁を破ってゼロと一緒に、この外界へ出てきちまったそうである。で、たまたま聞いてみたラジオで俺の放送にぶつかり、局とDJを調べて即座にゼロを送り出したのだ。たいした早業だよ。おかげで俺は殴られるし、真砂くんは縛られる羽目になったわけである。

が、ここに至って俺にもわかってきた。脅迫云々と言ってはいても、要するに世間知らずの

お嬢とゼロの二人きりでは、この東京でザザを捜そうにも、右も左もわからんのだ。もたもたしていると、彼女たちもまた『子供部屋』に連れ戻されてしまう。溺れる者は藁をもつかむと言うが、さしずめ俺の放送は、溺れそうになってたところへ流れてきた丸太くらいの価値があったのではなかろうか。

それでもって、ザザの顔を知っている俺に、真砂くんを人質にとってまで要求したい役目ときたら……。

「――しばらく、あなたを監視します」

あ？　監視？

「私が捜していることに気づいたら、ザザは警戒してこの街を出てしまうはずです。それに、人の大勢いる所で派手なことを起こすと、上層部に知られてしまいます。ザザのためにも、それは避けなければなりません。そこで、あなたがもう一度ザザと接触する機会を利用することにしました。あなたは自由に動いて、ザザをおびきよせてくだされればいい」

「俺が断ったら？」

「弟さんは解放しません」

明日も学校があるんだけどなあ、と真砂くんがぼやいた。

しばし俺は考えこんだ。

……なんというか、やっぱりこれは脅迫になっていないのである。だってどうせ、おじょー

さまもゼロも連れ戻されなきゃならないんだから、時間がたったら、いやでも真砂くんは解放されるんだろ？

「なあ、おまえらがザザを見つけられなかったら、どうなるんだ？」

「どうもなりません。元々いないはずの存在ですし、脱走したことも上層部には知れていませんから。ただ……ひとりだけで、生きていけるとは思えません」

ゼロが断言する。

「そうかな。現に、今は生きてるじゃないか」

「ザザが優亜さまから離れて生きていけるはずがない！」

反論してみたら、奴らしくもなく激しい調子でゼロが言いきった。さすがに俺も迫力負けしてしまった。なんだ、この確信は。

肝心のおじょーさまは、泣きやみはしたもののしょんぼりしている。

やれやれ。十一歳の少女と五歳のお守り役と三歳の家出小僧か。シャレにもならないな。

「監視するならすればいいさ。別に俺はザザを捜したりはしないからな。いつも通りにやるだけだからな。いいんだろうな、それで」

俺は溜息と一緒に、そんな台詞を吐き出していた。

5

かわいそうに、真砂くんは三日ほど学校を休まねばならなかった。

当然のようにゼロとおじょーさまは我々のマンションに居座り、真砂くんは家の中を動きまわることだけは許されて、仕方がないとばかりに家事に精を出している。ま、たまにはいいだろ。なんだかんだ言って、けっこう楽しそうにおじょーさまの相手をしとるしな。

で、俺はというと……。

ザザなんか捜さない、と言い切ったくせに、実は俺の言動はまるっきり一致していなかった。どういうわけか、俺は休む暇もなくザザの姿を捜して歩いていたのだ。

いや、捜してはいたんだけど。

いかんせん、東京は広い。

夜どおし、人が集まりそうな場所を集中してまわってみたものの、いざ意識して捜すと人ひとり見つけるのはなかなか大変な作業である。タイミングが悪いのだろうか。それともザザは、もう東京にはいないのだろうか。……その可能性も、大いにあるんだが。

二日連続の空振りにもめげず、俺は今夜も代々木から渋谷へ向かう道を足早に歩いている。なんだか俺はふと、自分自身の諦めの悪さに気づいて感動してしまった。

三日間、だ。よく考えたら、このぐーたら者の京平さんが三日間もたったひとりの相手を捜して熱心に歩きまわっているのである。よくもまあ、このクラゲみたいな男がさ……。

麻布から、六本木へ。やわらかくて優しくて、そのくせ眩しいイルミネーション。夜の光はどれも澄んでいる。ゴミ溜めのようでも、どこか底のほうで澄んでいる。汚れないと、綺麗になれない。道を行くお洒落な奴らは悪党ばかりだが、嘘を塗りたくっている善人よりはずっと綺麗だ。雑多で不健康。でも正直だ。傷のないダイヤなんてつまらない。どうせ、どんなに飾っても裏側は真っ黒なんだ。

——ザザ。

この街で、『機械のフリをする人間のフリ』をして、本当は何になりたいんだ？

飽きもせず俺は歩いている。それは多分、あのお嬢やゼロが放っておけないからというより、俺自身がおまえに尋ねてみたいからだ。

どうしてザザはあの時、俺を追いかけて礼なんか言ったんだろう。どうして俺はあの時、おまえの名前を知りたいなんて思っちまったんだろう。

どうして俺は、おまえを捜したいなんて思うのだろう。

どうしておまえは人間になりたいなんて。

俺はガラス張りのファッションビルを見上げた。ゴジラが来たらひとたまりもないだろう。ぼかした照明がガラスに映って赤や青に乱反射し、やたらとカッコいい。長い髪をかきあげる

女の爪は銀色。イヤリングは金。

でも、ほんの少し向こう側に目をやれば、そこはビジネス街で、派手なライトの代わりに、タクシーの真っ赤なテイルランプがかっとんでいくのだ。

いつも自分勝手に、街は生きている。眠りもせずに、ここは生きている。機械人形の一匹や二匹まぎれこんでも。

砂夜子が死んでも。

いつも同じ顔をして、すべてを呑みこんで、おかまいなしに生きている。俺はそんなこと、とうの昔に知っていたはずなのに……。

——ザザ。

本当は、おまえはこのまま見つからないほうがいいのかもしれないな。

早くタイムリミットが来ればいい。で、俺はまたクラゲ男に戻るわけだ。別に何も変わらない。元通りの生活が始まるだけだ。

よれよれコートをひきずって青山のマンションへ戻ってきたのは、夜も更けきった四時過ぎだったろうか。

くどいようだが我が家は高級マンションだから、住んでいる人間もハイソサエティなわけ

で、こんな時間に帰ってくる不良青年はあんまりいない。マンション前の小道もすっかり無人で、門についてる蛍光灯が、空しくアスファルトを照らしていた。

が。

門の脇の植えこみに寄りかかるようにして、細い影が立っているのに俺は気がついた。

まさか、と思った。

「――あ」

俺の靴音を耳にしたらしく、奴が顔を上げた。俺はその場に立ち止まった。

「こんばんは」

邪気のかけらもない声。

「よお」

コートのポケットに両手を突っこみ、俺はのんびりと答えていた。

ザザ、だった。確かにザザだった。間違いなく奴だった。

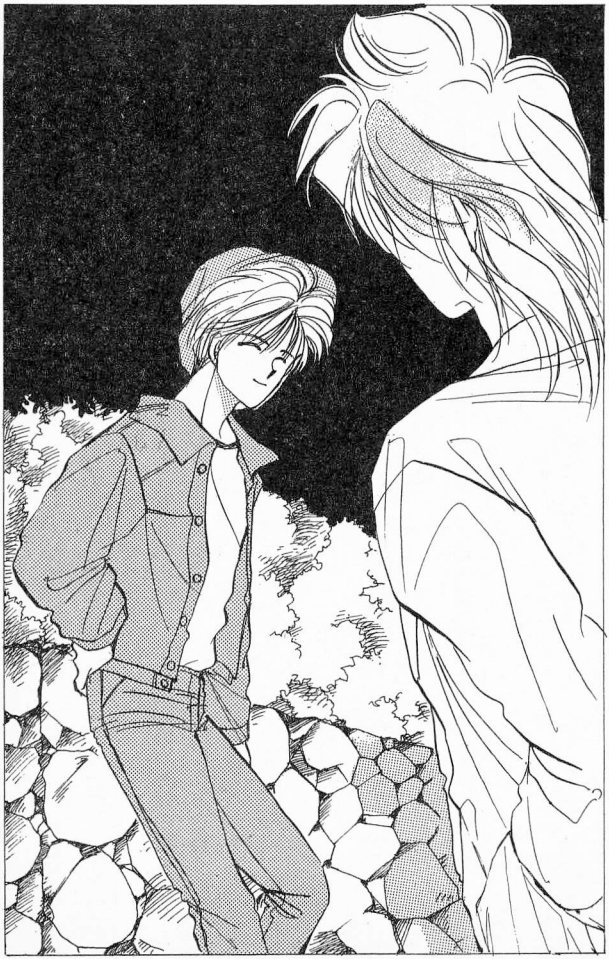
よりによってマンションの真ん前で。

なんで……こんな、人通りも何もない所に。

「ラジオ、聴きました」

にっこりと笑って、ザザが言った。前に会った時と全く変わらない人なつっこさで。

「へえ、すごいな」



これは本心だ。

「実は、三週間くらい前にポケットラジオ、拾ったんです。それでよく聴いていたから、京平さんの声には覚えがあったんです。お名前を聞いてやっぱりそうだと思って、次の日の放送は忘れずにチェックしました。そしたら……嬉しかったです」

一、二度聴いたくらいのDJの声を憶えてるあたりが凄いが、その記憶力も奴の正体を知っていると納得できる。俺はあくまでポーカーフェイスを保っていた。本当のことを言うのは、ザザに気の毒なように思えた。

「で、なんだかとても会いたくなって、でも住所がわからないし、仕方がないから、この三日くらい東京をずっと捜しました」

……え?

「ようやくついさっき、それらしい人を見つけて、だから先まわりしたんです」

まっすぐな瞳で、ザザが言う。

三日間。似たようなことをして。お互い東京中をぐるぐるまわって。それじゃ俺たちは何度もすれちがっていたのか、もしかして。

バカではないか、ほとんど。

「そうか」

……本当に、バカだ、お前は。ザザ。

おまえと同じようにラジオを聴いて、追っかけてきた奴がいることくらい、少しは想像しろよ。

「実は、俺もおまえのことを捜してたんだ」

「僕をですか？」

きょとんとしてザザが問い返す。

かすかに笑って、俺は別のことを尋ねた。

「なあ、そういえばさ……あのパフォーマンスって、どうして思いついたんだ？」

「あ、あれは真似なんです。やっている人を、見たんです。それで……まずは、お金を稼ごうと思って。でも本当に、自分でお金を稼ぐのって、面白いですね！」

ご褒美を貰った子供のようにザザは目を輝かせた。

そうだ、この笑顔なんだ……。こいつは、逃げてる奴のする顔じゃない。ただひたむきに前だけ見てる目だ。だから妙なんだ。

本当に、これがザザなんだろうか。

本当におまえが、逃げてきたザザなのか？　こいつをこのまま力ずくで連れ戻していいのか？　それとも、そんな風に迷う俺のほうが変なのか？　――ただ、何か、絶対にこのままではいけない何かがある。

ひとつだけ、大切なことを忘れている。

「独断で……忠告してやる」
俺の口が勝手に動いて、言葉を発した。
「おまえの後ろ、左手の、四十五度の所にいる。――ゼロだ」
「！」
閃光のようにザザが振り向いた。

6

ザザも速かったが、ゼロの動きのほうがさらに速かった。すさまじい勢いでザザの身が門柱に吹っとび、その首をぎりぎりとゼロの両手が絞めあげて押さえこんだ。
「馬鹿が！」
ゼロの嘲り声。冷酷そのものの表情をザザの顔へ近づけて、奴はもう一度吐き出すように言った。
「貴様は馬鹿だ。あまりにも愚かだ。くだらぬ幻想にとりつかれただけの子供だ。貴様が逃げたことでお嬢様がどれほど悲しまれたと思っているんだ。どうせそんなことも考えなかったんだろう、貴様は！」
普通の人間ならとっくに首がへし折れているほどの怪力で門柱に押さえつけられ、ザザはも

がいたようだった。
「ちが……違、う……」
ゼロの腕をねじりながら、ザザが呻く。
「逃げてなんかいない！　ただ……」
「ただ？」
「――――」
言いかけて、ザザは答えなかった。一瞬だけライトにきらめいた奴の瞳はひどく真摯なものだった。
あいつは狂ってなんかいない。何かがある。狂気じゃない。幻想でもない。もしかしたらもっと危険な――。
「あなたには言えない」
低く、ザザが呟くように言った。
「あなたが信じるはずがない。僕自身が、自分でも、呆れるほどなんだから！」
ふたつの影が分離した。力まかせにザザがゼロを突き放したのだ。
ゼロはごくわずかに体勢を崩したものの、ふっと力を溜めるように膝を落とし、次の瞬間ダッシュした。その方向から逃れてザザもまた地面を蹴った。アスファルトに靴底を擦る音だけが残る。

ゼロがかざした右の手首から白いかたまりが発射された。みるみる放散してザザを包むのはクモの糸に似た網だ。

が、ザザの四股をからめとることはできなかった。唇を噛みしめたザザがその場で一回転したと思ったら、合金らしき網の糸はぶつ切りにされて宙に乱舞していた。光？　ザザの両腕？　上着の袖口から、手の甲を覆うかたちでまっすぐに三十センチばかり伸びた白光があった。刃物だ。サーベル？

がしゃり、と二枚の刃を顔の前に組み合わせ、ザザが動きを止めた。

二刀流か。

ゼロは目を瞠っていたが、それは驚愕の表情じゃなかった。

「……あくまで抵抗する気か」

ぽつりと確認する。

「ならばいい。私も――多少傷つけようが、連れて戻る」

ゼロが微笑するのを、俺は初めて見た。

どうやらザザは奴を本気にさせちまったらしい。俺が何を言う間もなく、ザザの足元を狙って無数の衝撃が走った。ぎりぎりで避けたところへ、すかさず第二波、第三波が襲う。

「あなたと……！」

ザザのサーベルがはじきとばしたものを見て、ようやく衝撃波の正体がわかった。針のよう

に細いナイフの群れだ。
「あなたと戦いたくなんかないのに！」
「虫のいいことを言う！」
ブーツの側面から抜き取ったナイフを指の間にはさんだと思ったら、ゼロの腕がまた風を切った。ザザが身をひるがえす。ゼロが追う。奴がザザを地下の駐車場へ誘導しているのに俺は気がついた。
駐車場のシャッターはオートマチックだ。マンションの住人にしか開けられない。ゼロはザザをシャッター前へ追いつめたいのだろう。
「おい！」
二人の動きに続いて走り、俺は怒鳴った。
「危険です、来ないで！」
ザザの声。バカ、こっちのこと心配してる場合か。
どういうことなんだか、俺にはやっぱり全然わからない。おまえが何を考えてるのか。ゼロが頭に来るのだって当然だ。何も知らされずにいたら。
逃げていないと言いきりながら、説得力がなさすぎる。抵抗するだけで、ひとりで自己完結しやがって。それじゃただの駄々っ子と変わらない。
駐車場へのスロープに戦闘はもつれこんだ。奴らの動作のひとつひとつが、俺の目にはとら

えることのできない速度で展開する。白刃が躍り、銀針が降り、そのきらめきを見るので精一杯だ。ザザは防戦一手にまわっている。

「おい、ゼロ！　ちょっと待て！」

スロープの上から呼んでみた。ザザみたいなバカを力だけで押さえこんでも、駄目な気がする。

「聞けません」

ぞっとするような声でゼロが言い捨てる。

「このような裏切り者を許すことは私にはできません。優亜さまのことを思うと……」

あのお嬢の名が出たとたん、ザザの顔にも悲痛な色が走った。

「ゼロ、僕は……」

「弁解は無用」

ゼロが跳躍した。くっと息をつめてザザもサーベルを構え、時間差でくりだされるナイフをかいくぐり、ゼロの影を勢いよく薙ぎはらう。かすりもせずにゼロが着地するのと、ザザの左腕が力なくがくんと落ちてしまうのが同時だった。

「！」

左肩に突き立ったナイフを即座にザザは自分の手で引きぬき、地面へ投げ捨てた。血は流れない。ただ、それきり左腕は微動だにしなくなった。奴には痛みはあるんだろうか？

「……裏切ったと思われても仕方がない」
左半身をかばう角度で身構えながら、ザザが口を開く。
「優亜が……僕のことを嫌いになっても仕方がない。だけど！　そんなこと望んだわけじゃない！　優亜が大切だ、優亜だけ大切だ、嘘じゃない！」
ゼロは黙っている。
くいいるような瞳で、ザザはゼロを見つめている。
優亜が……何だって？
息づまる沈黙が奴らの間を支配した。
まさか……もしかしたら……ザザは。
「でも……」
ふと、自嘲的にザザが声のトーンを抑えた。
「もう、遅いね……」
「……」
「優亜は、許してくれないだろうね……」
それが、ひどく明るい言葉のように響いて、俺は奴が本当に絶望していることを知った。
お嬢が許さない？　違う、あの子は……。
「ゼロ。僕はきっとすっかり狂ってしまっているんだよ」

挑発めいた仕草でサーベルの刃先をゼロへ向け、明るい口調のままでザザは言った。
「人間になりたかったけど……駄目なら、あなたに殺されてもいいよ。このまま戻るくらいなら、そのほうがずっといい」
「……バラバラにして、人格を再調整してやろう。それが望みなら」
いとも冷ややかにゼロが答える。こ、の――バカ野郎どもが！
奴らが間合いをはかるように沈黙した。その空白の一瞬に、何も考えず俺は飛びこんでいた。
「――え!?」
ザザの声。交錯。熱っ！
「何っ……！」
ゼロが呟くのが背後で聞こえた。
俺はそれどころじゃなかった。熱い。背中が大火傷したみたいにじりじり痛んでいる。肩から斜めに一文字、ゼロのナイフにやられたらしい。文句のひとつも言いたかったが、その前にやることがあった。
「阿呆っ！」
痛みの八つ当たりも手伝って、俺は目の前のザザの頬を思いきり張りとばしていた。けっこういい音がした。

「京平さんっ……！」
　両の目を見開いて、ザザが叫んだ。
「傷がっ！」
「うるせえ、こっちの話のほうが先だ！」
　もう一発殴りたかったが、痛くて腕がそこまで上がらない。代わりに奴の胸ぐらをつかんで俺は正面から怒鳴りつけた。
「てめえは！　馬鹿だ！　大馬鹿だ！　てめえの狭い了見だけで物事ぜんぶ決めつけて浸ってんじゃねえ！　一番言わなきゃならないことを言わずに逃げちまって、何が『人間になりたい』だ！　そんなのは臆病なだけだ！　――肝心なのは、なんで人間になりたいか、の、そっちのほうだろうが、ええ!?」
「――――」
　ザザは絶句している。俺はゼロをふりむいた。首をまわしただけで傷口にビリビリくる。
「ゼロ！　真砂たたき起こして、おじょーさん連れて来いっ！　早くしろっ！」
　無言のまま、反問もせずにゼロは身を翻した。素直でよろしい。それでもって、俺はまたザザに向き直った。
「おい、てめえ俺がなんでこんなに怒ってるかわかるか？」
「あ、あの、京平さん、せめて止血しないと」

「訊いてんだよっ！　答えろ間抜けっ！」

サーベルをシュッと音をたてて収納して、ザザは自由な右腕で俺の身体を支えた。本気で戸惑っているようだった。

「――わ、わかりません」

「阿呆っ！　だからてめえは馬鹿なんだっ！」

「――す、すみません」

ったく……やっぱりこいつは三歳だ。どんなテクノロジーの結晶だろうと、ガキだっ。

「俺はなあっ、こないだ会った時からけっこうてめえが気に入ってんだよ！　てめえみたいに真っ正直な奴は好きなんだよ！　そのてめえが、ろくに努力もしないでカッコよく死のうとなんかするから怒ってんだよ！　少しは周りの迷惑も考えろ！　死ぬって意味もよくわからないくせに生意気言うんじゃねえっ」

「……」

「だいたいてめえは自分勝手だ。ひとりで突っ走るほうは気楽だよ。てめえは自分のことだけで頭一杯にして世の中に出て行って、それで残されたゼロやお嬢がどう思ったか、それを許す許さないの問題だけに片付けちまうから馬鹿なんだ。あいつらは、その前に、何よりもてめえのことを心配してたんだろうが！　なんでだかわかるか!?　今度わからないなんて言ったら、もうてめえとは絶交だっ！」

大声でここまで一気に喋ったら、くらくらと世界が揺れてきた。深呼吸して酸素をとりいれる。ザザは答えようがない様子で立ち尽くしている。

こんなに馬鹿だ馬鹿だと言われまくる奴もおらんだろう。気の毒な奴だと、ちらっと思ったりもしたが、バカってことはそれだけ可能性背負ってるってことでもあるわけで……。

「ザザっ！」

スロープの上から、小さな影がそう呼んだ。

叱るような声にも、泣くような声にも聞こえた。俺はなんだかモーローとしはじめていたので、ちょっと判断がつかない。

「何ドジってんだよっ！」

これは真砂くんの声だ。へろへろしている俺をザザから引き受けて、肩を貸す。いやあ、いつも心配かけてすまんの。

「ザザのばかっ！　どうして何も言わないでいなくなっちゃうの!?　どうしていなくなっちゃったの!?」

……あ、やっぱり泣いてるんだ、これは。

「……優亜のこと嫌いになっちゃったの!?」

俺は顔を上げた。

ザザの前にまっすぐ立ったまま、お嬢は踏んばって踏んばって、それでも踏んばりきれずに

ぽろぽろと涙を落としていた。
それはひどく綺麗だった。なぜか俺にはそう思えた。幼いけれど、綺麗だった、のだ。
「あ、あ……」
ザザが崩れるように彼女の前に膝をついた。
「優亜、泣かないで、優亜……ごめんなさい」
下を向いて泣いているお嬢と、ちょうど目を合わせるように。
「ごめんなさい、優亜……あなたが好きです」
「――――」
きょん、とお嬢が目をまるくした。
「あなたが好きです」
ザザがくりかえした。
必死に見上げて、それから彼女の足元へ視線を落として。
「だから僕は……優亜と同じ……人間に、なろうと思って……」
「……」
「無理だと思いますか？　本当は僕も怖いです。でも、僕はもう……苦しくて、優亜を見ても声を聞いても苦しくて、このままじゃ一緒にいられない。せめて試したいんです。無理でも。幻想でも。教えられるんじゃなくて、僕は僕自身で試したい。駄目ですか？」

「……」

「ごめんなさい。でも好きです。優亜だけが大好きです」

俺はゼロを見た。明らかに信じられないといった顔をしている。そりゃそうだろう。

「だ、駄目じゃない、駄目じゃないけど……」

とぎれとぎれに答えて、お嬢がかぶりを振った。そして、そのまま破裂するように泣き出した。よかったあ、なんて言って。

「優亜？」

今度はザザが茫然としてお嬢を見つめる番だった。

そらみろ、言ってみるもんだよ。やってらんないよなあ。すっかり力が抜けてしまって、俺はその後のことは憶えていない。

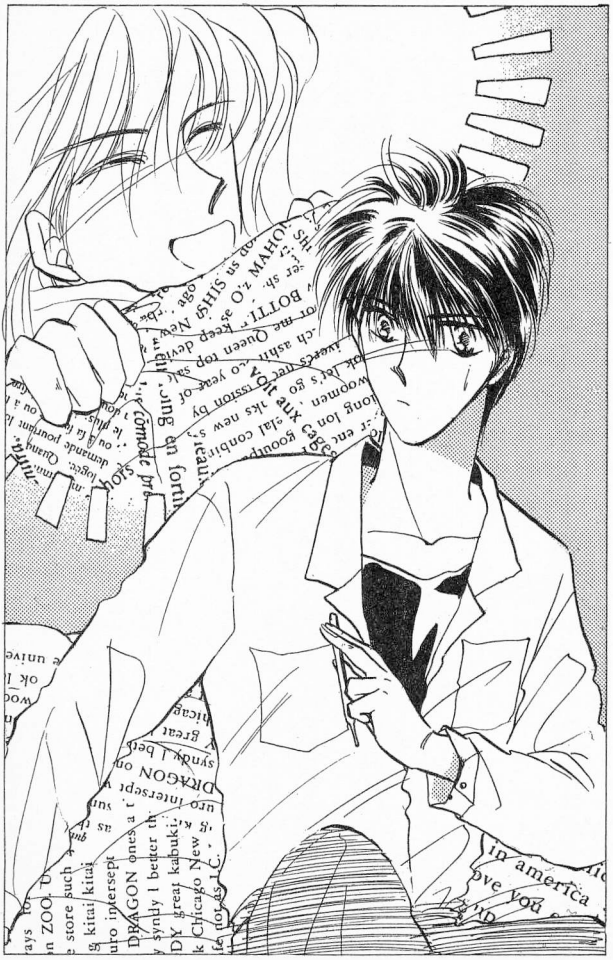
7

「すっげえ不可解」

体温計を振って目盛りを下げながら、真砂くんがぼやいた。

「人間と機械だろ？　製作者と作品だろ？　子供と大人だろ？　どういう意識で本人たちが言ってんだか謎だよな、あの『好き』は」

「この際、そういうこと考えると袋小路にはまるよ、真砂くん」
俺はベッドの中から、そう答える。
「だいたい真砂くんもロリコンだから他人事じゃないよねえ」
「ちぃがぁうぅ――っ！」
「強敵出現で困ったねえ。ま、頑張りたまえ」
本当、世の中そうそうセオリー通りのことばかりじゃないからなあ。
やっぱり、一番ご苦労さまだったのはゼロだろう。奴も結局おじょーさま至上主義だから、ザザがお嬢を裏切ったわけじゃない、とわかったら一応は納得して、無理にザザを連れ戻すとは言わなくなった。で、どこまでザザがやれるか見てみよう、ということで、お嬢と一緒に帰って行ったんだが、しかしあれは本心からザザの発想を理解してたとはどうも思えない。悩むタイプだなあ、あいつも。
お嬢はお嬢で、またぬけだして遊びに来ると強調してたし……。いいんだろか、国家機密があんなに気楽に動きまわってて。
「京平だってさー、人のこと言えないよなー」
嫌味たらしく真砂くんが反撃してきた。
「何がですか」
「聞いたぜ、『自分のことだけで頭一杯にして』とかって説教。言えないよなー、自分だって


in america

全っ然っ、他人の心配なんか気にしないくせになー。いつまでもそんなんでクラゲ男やってたら、それこそ砂夜子だって安心してられないと思うけどなー、俺は。ま、どおーせ、俺なんか義理の弟だからね、どおーせね」

あら、ららら。

「ま、真砂くんってかわいい奴……」

「今頃わかったかっ」

「うん、今まで知らんかった」

「……てめえって本当サイテーな男だな」

真砂くんがしみじみおっしゃったところに、ドアが開いて我が家の居候が顔を見せた。

「あの、すみませんっ。また鍋が焦げちゃったんですけどっ」

「まーたーかーよー。なあ、どうして粥なんか作ってて鍋が焦げるわけ？　米なんか煮詰めて何が楽しいの？」

「楽しくないです」

「だよな。そーだよな。ええい、とっととついてこいっ、教えてやるっ」

ずかずかと、先に立って真砂くんが部屋を出て行く。ザザは——そう、なんだかんだ言って、うちで預かることになってしまったのである——俺にぺこりと頭をさげて、その後に続いた。俺はひらひらと手を振ってやった。

奴が人間になれるかどうかなんて、俺は知らない。
が、いやでも時間は流れていくし、変わるものもあれば変わらないものもあるさ。
俺は布団にもぐりこんで、目を閉じた。傷が癒えたら、熊のプーさんのようにいい奴である高ちゃんに電話をしよう。もうすぐ『そろそろ』の『そろ』ぐらいにはなるかもしれん、などと大口たたいてやるのだ。ふふふ。
もう一度、部屋のドアが開いた。
「京平さん」
「おー？」
頭出すのが面倒なので、声だけで返事。
「あの、もし、お粥作るの成功したら、食べてくれますか？」
「おー」
「ありがとうございますっ。それじゃ」
ぱたり、とドアが閉まり、足音が去る。
ザザ。案外おまえ、見込みあるかもしれないぜ。
で、俺は布団をかぶったまま、ひとりでぐふぐふと不気味に笑っていたんである。

File 1
月に吠える

1

それはやたら晴れまくった日の、やたら暑苦しい午後のことだった。
そしてあたしは何故か、でっかい建物の入り口ホールで大音声をはりあげていたのだった。
「だぁからさあっ、中に入れるくらいいいじゃんよっ！　京平いないならいないで、あたし待つって言ってんでしょお!?　別に茶菓子もなんにも出さなくていいからさあーっ」
『大変心苦しくはございますが、自分も留守番を任された者にすぎませんので、木咲様とおおせられてもどちらの木咲様ともわかりかねます。よって軽々しくお入れするわけにも参りません。どうぞお引き取りを』
「木咲っつったら木咲瞳だよっ！　ねえちょっと、本当に京平いないんだろうね、あの男がこんなお日様あがってるうちから動きまわってるはずないんだけどっ」
『いかにもそのとおり、京平は日に当たると溶けてしまいますので、現在冷凍庫で冬眠中でございます。涼しくなった頃にまたお越しくださいませ』
大嘘こいてんじゃないっ。

「真砂っ！　その声はあんたでしょっ!!　ふざけんじゃないよ、さっさと入れてよ、あたし京平に話があるんだから！　こら聞いてんのか、くそガキっ。高校生は学校行ってクラブ活動でもやってろよーっ！」

『くそガキ、などと口走られるようなご婦人に心当たりはございません。失敬』

ぷつり、とインターホンが切られて、それきりだった。ひとしきりチャイムをがんがん鳴らしてやったけど、もはや応答のかけらもなし。あのガキ、回線をカットでもしたんだろうか。

「ばかやろうっ、そっちこそ何様だよっ。汚いぞ真砂、堂々と勝負しろーっ！」

目の前のドアを思いっきり蹴とばそうとして、ギリギリであたしは踏みとどまった。前に一回それやったら、オートロックに衝撃与えたってんで警報鳴っちゃって、ガードマンは来るわシャッターは降りるわの大騒ぎになってしまったのである。

「大金持ちなんて大嫌いだ……」

普通の家だったら、それこそ大声で怒鳴りまくって外から呼ぶんだけど、この青山のマンションは警備システムがものすごくて、建物の入り口ですでに厳重にカメラチェック受けて、インターホン越しに相手と話して、それでOK出ないとエレベーターにすら乗れない。せめて玄関先まで行けたら座りこんで粘ってやるのにっ。

許すまじ、早水真砂。

あたしが拳を握りしめ、決意を新たにした時のことだった。

「あの……」

おそるおそる、って感じで、うしろから呼びかけた奴がいた。

「どうかしたんですか？」

「だあーっ、ばかばか大まぬけっ！　おまえ買い物行ったんじゃなかったのかよっ！　よりによってこんな女拾ってきてどーすんだよ、おまえはーっ！」

ドアが開いたとたんに、くそガキ真砂ががなりたててくださった。あたしの隣で、その親切なおにーさんはきょとんと目を丸くした。

「どうするんだと言われても……えーと……だって、この人が困っていたんです」

「困ってたら誰でも連れてくんのかよ、おまえはっ」

「だって真砂くん、困ってるときは助け合いって言ってるでしょう、いつも」

「相手によるんだ、相手にっ」

大マジメなおにーさんは釈然としない様子である。そりゃそうだね、罪もない女の子を閉めだしといてガタガタ言ってる真砂のほうが悪い。

「観念しな、くそガキっ。お天道様はね、常にかわいい女の子の味方なんだよ。とにかく入れてよ、京平に用があんだからっ！」

「京平はいないっつっただろ!?　聞こえなかったのかよ、てめえのバカ声で耳がおかしくなっ

てんじゃねえか!?」

「バカ声で悪かったねえっ！　商売道具けなしてタダで済むと思うんじゃないよっ！」

あたしら二人は玄関先で睨み合いに突入した。ほんっとにこのガキは、あたしの存在そのものが気に入らないらしい。

正体不明のおにーさんは、しばらくあたしらをぽけっと見守っていた。

それから、ふと思いついたようにドアの奥へ向けて声をはりあげる。

「あ、京平さんっ。トランプありましたよ、これで三人でポーカーできますねっ」

べしゃっ、と真砂がその場へ膝をついた。

「……真砂くん、どうかしたんですか？」

「……いや……そーだよな、わかってたんだよな、てめえってそういう奴だよなああっ」

「ほぉら、やっぱし京平いるんじゃん。京平ーっ！　あたしだよ、瞳が来たんだよーっ！」

ところであたしの名は木咲瞳、年の頃は十九、肩書きは……今んところフリーターである。

現在、ものっすごく不機嫌な顔してコーヒーいれてるのが早水真砂というくそガキで、こいつはたしか高校二年生のはずである。あっ、そうか、高校生はもう夏休みだったりするのか。

だからこいつ性懲りもなく妨害工作してくれたわけだよね、まったくさあっ。

そんで、天の助けのごとくオートロックをカードで開けて、あたしを京平んちまで連れてき

てくれたのは謎のおにーさんである。
隣人とか友達かと思ったら、どうもそうじゃないらしい。まさか一緒に住んでるとか。あたしは二年くらい前から京平のこと知ってるけど、こんな奴をこの家で見るのは初めてだった。
なんかやたら行儀よく、椅子に座って膝に手なんか揃えて。
人懐っこい、というか……警戒心のないヒトだなあ。
「京平ーっ、そこでまたクラゲやってんじゃねえっ」
がしゃん、とダイニングテーブルにポットを置いて、真砂が怒鳴りつけた。
とにかくこのマンションてば広すぎるんだよ。二階層のつくりになってて、上に五部屋、下にサンルームとリビングとダイニングだもん。で、ずるずる這いずって下までおりてきてリビングの途中まで来たところで、力尽きてまた爆睡してるのが、問題の京平だった。
「ザザっ。あいつ運んでこい、ここまでっ」
「えっ……本人の自主性を育てるために手助けしないんでしょう?」
「今は特例。俺のコーヒーが冷める」
「はあ……」
真砂に言われて、おにーさん——ザザ? ——が、椅子から立ち上がる。
「京平さん京平さん、床で寝ると……」
「ひやっこくて気持ちいーんだ、これが」

もごもごと床の物体が答えた。ほんっとクラゲだなあ、こいつーっ。
「でも、あの、お客さんと、真砂くんのコーヒーが」
「ぐー」
ピキッ、と真砂のまわりの空気が凍りついた。はたとそれに気づいて、ザザがいきなし片腕で京平をまるまる抱えあげた。
大の男を、片腕だけで。
で、すとん、と京平を椅子の上に到着させる。
「ほら飲めっ」
どろどろに濃いコーヒーを、真砂がその真ん前に差し出した。
「あれえ?」
低血圧の権化は、こっちのほうを見て呑気に口を開く。
「瞳ちゃんじゃありませんか」
「あたしさっきから何っ回もそのセリフ聞いてんだけど」
「あ、そう?　すまんのお」
ずずず、と京平は特製ブレンドをすすって、一息つく。
むかいの席に座って、あたしはしばらくそのさまを見守っていた。
「あれ?」

も一度、京平がびっくりしてこっちを見る。
「瞳じゃん。いつ来たんだ？」
「……そーゆー奴だって知ってたけどさ……」
慣れたけどね。あたしはしみじみと、この時ばかりは真砂にも同情した。
早水京平。旧姓相原。一年前までは、こいつもたいしたギター弾きだった。
ステージの上じゃひいき目なしにカッコ良くって……あの頃は、まさかこんなに本性ボケた男だとは思わなかったよ。昔のファンが見たら泣くぞ。
ま、あたしもその、ファンの一人だったんだけどさ……。
「あのねえ、あたしちょっと、京平に相談があって……」
「あ、真砂くん、朝刊とって」
「人の話くらい聞いてよっ！」
「聞いてます、聞いてますってば、お嬢さん。いや、瞳ちゃんの顔を見たら急に台風の様子が気になってきてねえ……」
なんであたしの顔見ると台風を連想するんだよお。
こんな奴に相談しにきたのが、そもそも大間違いだったのかもしれない。べったりとテーブルにひじをついて、あたしは深々とため息をついた。だいたい真砂の奴、ほんとに、お茶菓子どころか水すら出さないんだぜっ。

「けど、そういや、おととい渋谷でばったり社長に会ったりしてねえ」
新聞を広げたまま、のんびりと京平が切り出した。
「なんでも瞳ちゃんは、今度はじめて、大仕事が決まりそうだというではありませんか」
げげげっ。
し、知ってんなら知ってると……先に言ってほしい。
「大仕事っつっても……バックコーラスだよ、アイドルの」
「立派に大仕事。コーラスはねえ、主役以上に実力が要求されんですよ。一条麻矢のバックやってたってだけでハクがつくし、勉強にもなるし。ま、頑張ってきたまえ」
なぁんだよお、もう全部知ってんじゃないかーっ。やだな、こういう時だけ余裕でこっちの先回りしてさ……。
相談、しに来たのに、困ってしまう。
なんかその……一条麻矢ってのがすっごいワガママ娘だとか、バンドもみんな大物揃いで怖いとか、やな噂ばっかり聞こえてくるから、それでね……。
「実際にリハ参加するのって、もうすぐでしょ、瞳ちゃん」
「あ、あ……うん、明後日……」
「そしたら譜面たたきこむだけでも大変だねえ。バイトどうするの？」
「え、あ……店は、急だから休めないし、仕方ないからレッスンは徹夜でやるしか……」

「だめだめ。若いからってムリすると声にくるもんです」
あくまでのんびりと京平が言う。
心なしか偉そう。ちょっとキャリアあると思って。年上だと思って。むかむか。
そうやって、もうバックやるの当然って風に話もってっちゃってるし……。
「あのね、だからあたしっ……」
「ザザ。おまえさん、暇？」
新聞をたたみながら、また京平は話をそらす。こっちの言うこと聞けよーっ。
「とっても暇です、はい」
なんだか嬉しそうに、そのザザ君とやらが答えた。
「んじゃこの可愛い後輩のために、ちょっとばかし協力してやってね」
「僕でいいんですか？」
ますます嬉しそうな彼。……流れが見えないなあ。
「ということで瞳ちゃん、君のバイトはうちの居候が代わりに行ってくれるそうだから。しっかりレッスンに専念しなさいね。じゃあね、おやすみー」
「おやすみ、じゃないでしょー!?」
「こら京平っ、俺のコーヒー飲んどいて寝るんじゃねえっ」
「あのっ、京平さんっ、紹介がまだなんですけどっ」

三人の声が一度に交差して、三つ目のセリフで京平が反応した。
「あ、そうか」
立ち上がりかけてた椅子に、また座りなおして。
「瞳ちゃん、こいつはうちの新しい家族ね。その名をザザ野ザザ太郎というのだよ」
「嘘です、嘘!!　ザザ、だけでいいんですっ」
やたら必死にザザが割りこむ。あだ名にしても、変わってるような気がする。
「そいから、こっちはね、俺がいた事務所の後輩で、瞳ちゃん。ロック歌手の卵なの。よろしく面倒みてやってね」
「うわ、すごいですね。僕、なんでも手伝いますから」
そんな盛りあがることかな、と思うくらい笑顔いっぱいで、ザザがそう言った。
本当、子供みたいなヒトだなあ。
「……京平、うちの事務所にいたんじゃないよ。まだいるんだよ」
少し腹が立って、あたしはわざと訂正してやった。
京平はにんまりと、笑ってみせただけだった。

2

バイト先は小さいレストランなんだけど、ザザの評判はすこぶるよろしくて、なんだかあたしは複雑な心境であった。店のおばちゃんが、このままずーっとカレがいるといいわねー、なんて言うしさ。

けっこうドジな印象あるんだけど、実は記憶力がものすごく良いらしい。あと、計算が早くて、なかなか手先が器用で、反射神経もバッチリというやつで、ウェイターにはうってつけなんだとか。

なんであの京平が、こんなおいしい人材を居候なんかさせてんのかなあ。

意外とこいつもミュージシャン志望だったりして。……違うか。

「あれっ、瞳さん？」

ザザの仕事が終わる時間を見越して、あたしは店まで足をのばした。まあ、ありがたいことに変わりはないから……少しはおごらねば。

「晩メシ食べるんだけど、つきあわない？」

「あ、行きます」

子犬みたいにひょこひょこザザがついてくる。晩メシと言っても、あたしの場合、ハンバー

ガーとポテトだけどね。
　夜中のバーガーショップに入って、お茶くらいおごるよ、と言ったら、ザザはほんとにウーロン茶しか頼まなかった。控えめな奴である。
「晩ごはん、これだけですか？」
「ん。忙しいし、貧しいしさ。一人暮らしで、どうしてもこんなんばっかりになるよね」
「だったらうちに来ればいいのに……。真砂くん、料理すごく上手なんですよ」
「真砂があたしなんかにご飯つくってくれるわけないでしょっ！」
　頭痛もんの名前を出されてしまって、あたしは唸り声をあげた。ザザが、一瞬だけ黙りこむ。
「……でも、真砂くん、あたりはキツいけど、いい人なんですけど」
「んー、そりゃ、相手によるんでしょ？　あたしらはダメだよ、京平のこと取り合っちゃってるもん」
「……」
　ちょっと驚いたように、ザザがこっちを見た。こいつ気がついてなかったのかなあ。
　なんだか愚痴りたい気持ちも手伝って、あたしは少しちゃんと説明してみることにした。
「だからさ、真砂って京平の奥さんの弟じゃん。とにかく真砂はその奥さんの——砂夜子さんの味方なの。つまり京平に近づく女はことごとくあいつの敵なの。でなきゃあいつ、あそこまで妨害しないってば」

そう、あれはシスコンの裏返しのブラコンだよね。これだからガキは困る。
「砂夜子さんって、見たことある？」
「……いえ、ないです」
「そっかあ。いや、キレイな人だったんだ、本当に。あたしもそれはマジで思うけど……」
けど。
砂夜子さんは確かにキレイだった。しかも大金持ちの令嬢で。皆にうらやまれて、財産めあてじゃないかなんて陰口たたかれたりしながら、それでも京平は幸せそうだった。京平のギターが、幸せそうだった。
だから、別によかったんだ、あたしは。
京平がギターさえ、やめてしまわなければ。
「でも結婚して三カ月で奥さんが……死んじゃってさ、そんで京平がぱったりギター弾かなくなって、もう一年だよ。京平のこと知ってる人は、みんなすごい悪口言ってさ、あいつのギターへの気持ちはその程度だったんだとか言ってさ……すごいくやしいじゃん、そういうの！」
「それは」
ぽつりと、ザザが口を開いた。
「それは……『その程度』だったんじゃなくて、『それくらい』砂夜子さんが、好き、だったんですよね……きっと」



大切そうにゆっくり言われて、あたしは少し考えこんだ。
そりゃ……そうなんだけどさ。
「ただ、才能あるからさ、京平は」
そうだ、京平より上手い奴は何人もいるけど、京平みたいに弾ける奴はどこにもいない。
あんなカッコ良いギターは、もう二度と聴けない。
「才能あるのに、あっさり捨てちゃえるのって……見るのはやだよ。だってこっちはあのステージの上に行きたいって、目指してる最中なのにさ」
「ああ、目標、ですね」
そう呟いて、ザザはすごく嬉しそうな笑顔になった。
なんでこいつは、ことあるごとに幸せな笑い方をするんだろう。あたし今、そんなに笑えることを言ったんだろうか。
「目標のある人は、好きです」
しっかりした口調で、そんなこと言って。
「ただの夢かもしんないよ。ぜんっぜんムリなことだったりしてさ」
ザザみたいな相手って、ちょっといじめてみたくなる。
「あこがれで、その気になってるだけかもしんないじゃん」
「……そうなんですか？」

「だって、高校出てからさ、バイトしてレッスンしてバイトしてレッスンして、たまーに小さいコーラスの仕事とかがあってさ、ようやく来たチャンスは女の子アイドルのバックだよ。そんなもんだよ。もう十九だってのにさ、オバサンになっちゃったらデビューなんかできないよ。ヨメに行くしかないんだよ」

けっこう自虐的。まあほんと、運とコネの世界だからね……。

「クライ・フォー・ザ・ムーンって歌があんのよ。子供がね、お月様に手が届かないっつって泣くの。絶対ムリなもの欲しがってさ。自分がそうじゃないって保証はどこにもないもんね」

「お月様、ですか……」

ザザはふと、窓ガラスの向こうに目をやった。

今日は、お月様はどこにも見えない。空は曇っちゃって真っ暗。

「ああ……でも、たしかに、今夜みたいな空は、誰かがお月様をこっそり隠してるみたいですよね。誰が持ってるのかなあって、思ったりして」

へ。

あんまり素直に言われちゃって、あたしのほうが困った。そこでまたメルヘンに走るあたりが。

「瞳さんは、どうして、歌をやりたいんですか？」

いきなりザザが、そんな問いを向けてくる。

京平、と同じステージに立ちたかった……ってのは、ちょっと言えない。今となっては。
まあ確かにそれがきっかけだけど、それだけでもないし。
「そうだねえ……」
ひとつひとつ指を折りながら、あたしは数えあげてみた。
「やりたいから。それしか取りえがないから。それがいちばん得意だから。始めちゃった以上、あとには引けないから。他にやることないから。あとは……」
あと、何かありそうな気がして、あたしはしばらく黙りこんだ。
行儀よく座った姿勢を崩さずに、ザザが待っている。
「あ、そうか」
妙に素直なザザを見ていたら、ポンと出てきた言葉があった。
「好きだから……」
そんでもってやっぱりザザは、それを聞いて惜しげもなく幸せな笑顔になっていた。
どうしてなんだろう……。

3

『一条麻矢サマーツアー・キラリ☆フレッシュハリケーン』の皮切りは東京・渋谷の公会堂だ

そうで。（いつも思うけどアイドルのツアータイトルってどうしてこう恥ずかしいんだろ）

リハーサルがあるから見に行け、という電話が来て、ちょっと引っかかりつつもあたしは公会堂まで足を運んだ。いつの間にか私設マネージャーと化したザザと二人だったんで、まあ気は楽だったんだけど。

「違うっ！　違うよ、そこで余計なソロ入れないでよ、キーボード！　うるさい！」

いきなり罵声がステージからぶっとんできた。なんなんだっ。

「ここでわたしとギターが前出てアオるでしょ!?　うしろでガチャガチャやられたら緊張感ぶちこわし！」

怒鳴りまくっているのは、細っこい体の、地味な感じの女の子。Tシャツにジーパンってカッコで。

えっ、あれ、一条麻矢？　化粧してないから、まるっきりそのへんの高校生みたいな。

「でもマヤちゃん、盛りあがるよ、ここでバリバリのシンセ入ると」

「時と場合くらいわきまえてよ。音たくさん出てりゃいいってもんじゃない！」

ひえええ、あのキーボードやってんの、ものすごいベテランの大御所だよ。

客席でぼけっと突っ立ってしまったあたしの所に、ばたばたと眼鏡のおっさんが走りよってきた。

「君、木咲さん？」

「あ、はいっ、おはようございます、Tプロから来ました木咲です」
「ども。ボク、マヤのマネージャーの伊藤といいます」
おっさんがくれた名刺には、麻矢の事務所の名前がでかでかと入ってた。そうなんだよな、ここの事務所めちゃくちゃ金持ちだから、金にあかせてバックに大物そろえて、それでアイドルにカッコつけさせようとするんだ。
「ちょっとね、もう少しかかるんで、ここで見ててね。もしかしたら、君にお願いするかもしんないからね」
もしかしたら？
「いやー、あのとおり、ほんとマヤって気が強くて仕方なくてね。アイドルなんだからねえ、バックのことは事務所にまかしときゃいいものをねー……」
ぶつぶつ言って、伊藤マネはまた舞台裏に戻っていく。
マネージャーにまで愚痴られるってのは、なかなかスゴいかもしれない。
「座りましょうか、瞳さん」
あっさりと、ザザが横から声をかけた。客席のシートをおろして。
「おっ……落ち着いてらんないっ。んな場所でっ」
「え、面白くないですか？　こういうの見てると」
そりゃ、あんたはそうだろうけどさあ。

「一条さんって、すごい人気なんでしょう？　タダでその人のステージ見られるんだから、せっかくだから見ましょうっ。ねっ」

む、無邪気な笑顔で強引に迫らないでくれーっ。

なにやらなしくずしに腕ひっぱられて、あたしはザザと並んで前から三列目、特等席におさまってしまった。

そういえば伊藤マネが、名刺といっしょに宣伝用のパンフを置いていったんだ。ごそごそ開いて、読んでみた。

ステージでは、気をとりなおしてもう一度、って感じで、勢いよくイントロが始まるところだった。がぁん！　としょっぱなからギター。ロック系の曲が多いんだ、この子は。

「へえ、十七歳だよ、マヤって」

デビュー三年目にしてすでにトップの座に輝いた超大型アーティスト、世界は目の前だ！　なーんて、書いてある。天才的ボーカル、とか言いつつ、実際は『アイドルなんだからバックは事務所にまかしとけ』が本音なあたり……この業界もなー、ほんとになー。なんたって『キラリ☆フレッシュハリケーン』だもんなー。

などと思ってたら。

〈shout!〉

噛みつくみたいな声に、スピーカーが震えた。

〈shout, only shout!〉

マヤ、だ。

ちっちゃい体から、ものすごくのびる声。

わ……若いというかなんというか。勢いがありあまってるというか。

はっきり言って、そんなに上手くない。けっこう音程はずしてるし。息継ぎの位置もよくない。うーん……迫力はあるけど。

やっぱりアイドルってことかな。

「あれ?」

隣で、ザザが小さく呟いた。

「コーラスの人、いるんですね」

「へ?」

マヤの声ばっかし聴いてて、気がつかなかった。

なんだ、コーラスいるじゃん、しっかり。しかも……しかも上手いじゃん、すっごく! げーっ。

あ、あれ、中西啓子さんだ。キャリア十年のベテラン。あたしでさえ知ってる。ロック系の大物——SSとかZ-アウトとかのツアーに参加してた人じゃないっけ? やっばいよ、それはー……。

ズシズシ来るドラム。カチッとはまったベース。さすがに派手なギター。流行（はやり）のワザどんどんかますキーボード。で、中西さんのコーラス。

完璧（かんぺき）なバックじゃん。ロックファンが泣いて喜ぶ面子（メンツ）だよ、これって。

「あああ、違う、違うっ！」

悲鳴があがって、またステージが中断した。

「啓子っ！　もういいよ、あなた駄目！　ぜんぜん合わない！」

え!?

一段高くなった場所で、中西さんは肩をすくめる。困ったわねえ、って感じの余裕のしぐさ。女らしくて、美人で、大人で、自信たっぷりで……マヤのことなんか全然相手にしてないのがわかる。

「マヤちゃん、またそういうことを……」

まわりのスタッフが、いろいろなだめてる。

「啓子使うんだったら、わたしやらないよ！　絶対やらないからねっ！」

「マヤちゃんっ」

「ねえ伊藤さんっ、代役呼んであるんでしょ!?　呼んでって言ったよね、わたしっ！」

あっ……えっ……？

スタッフ連中の視線が、いきなりこっちに集中した。

「社長ー、どうするの？」
ステージの上で、中西さんが偉そうな人に声を投げる。
しばらく何事か相談してたと思ったら。
「……じゃあ、そういうことでね」
気楽に言って、中西さんはすたすたステージを下りてきた。
わざわざ客席の、あたしたちのすぐ横まで来て。
「苦労するわねえ、あなたも」
にっこりとルージュの唇に笑われて、あたしは何を答えていいかわかんなかった。
そのまま中西さんは行ってしまう。……ってことは。ということは。
えー!?　なんなんだ、これって!?

4

「要するにさ、ヒステリーなんだよ、アイドルの！　スタッフなんか、みんなして渋い顔してさ、こんなガキに中西啓子の代わりがつとまるかよって思ってんの見え見えでさ！」
「ふうーん……」
がさごそと新聞広げて、京平は生返事をする。

「聞いてよっ、ちゃんとっ!!」
「聞いてますってば。あ、ほら、台風が北上してるんだって。このぶんだと上陸はしないかな。でも明日は雨だねえ」
「雨が降ったらステージが中止になるとでも言いたいわけ?」
「そんなことはないでしょ。野外じゃないんだし」
「わかってんなら話そらさないでよっ!!」
だーっ。どうしてあたしは、こんな男に相談もちかけようなんて思ったりするのだろうか。我ながら謎だっ。
「しかし、雨が降ると……」
のんびりと京平が続けた。
「会場までのみちのりがつらいでしょ」
「……関係ないでしょ、京平にっ」
「んー? だけど社長にチケットもらっちゃったからねえ……」
へ?
どかん、と例によって不機嫌に、真砂が湯のみをテーブルへ置いた。
「茶が入った」
「おお、真砂くんのこぶ茶は絶品だから好きさー」

こ、このガキ無理やり話をずらさせやがったな。こっちにはまだ水も出さないくせにっ。
あたしの殺気を感知でもしたのか、くるりと真砂がこっちをふりむいた。
「言っとくけど！」
なんだよっ。
「俺が行くのは、おまえなんかのためじゃないからなっ。俺、一条麻矢ならけっこう好きだし」
「へ？」
「ザザの頼みじゃ仕方ないしっ」
またもやくるりと背を向けて、真砂は台所方面へ消える。な、なんだ？
「うん、やっぱり晴れの舞台は応援に行かねばねえ。雨でも」
ずずず、とこぶ茶をすすって、京平が言う。
あっ……あ、あたしのことだろうか。
もしかして、その、京平が真砂ひきつれて、ステージ……見に来てくれるわけだろうか。
イナカの両親だって、来やしないのにさ。
なんか……なんか、それって……。
「で、でもさ、あたし、おろされちゃうかもしんないよ。マヤの気まぐれで、またダメとか言われたりとか」
つい、しどろもどろになって、あたしはそんなことを言い返していた。

「ザザがね、言ってたぜ」
京平がこっち見て、ちょっとだけ笑った。
「絶対、大丈夫だってさ。私設マネージャーの言うことは信じたまえよ」
……そんな。
そんな、京平が、よりによって京平が、は、励まして（ちがうかもしんないけど）くれたりするのって。
そういうのって。
ううう。
「瞳ちゃん、息なんか止めて楽しいですか」
「楽しいわけないだろ、ばかっ！」
……う、嬉しいかもしんなくて。
でも言えない。んな恥ずかしいこと言えるかよっ。
ザザ、だったら、思ったとおり全部素直に言っちゃうんだろうな。
彼は今、あたしの代わりにバイトに行ってくれてんだけど。（そのくせここにいるあたしというのも……）
「だっ……だから、あのヒトはねえ、性格よすぎて」
口走ったのは、照れかくしもあって。

「絶対、なんて、言っちゃうのは、無責任だよねっ」
「……ふうん」
しまった。
なにも京平に、彼の悪口言うことはないわけで。
新聞たたんで、京平が立ち上がる。何を考えてんのかわかんない。わかんないけど。
こいつの無表情はつまり。
「ま、それでも我々はアリーナ席に陣取る予定ですから」
そう言って、京平はダイニングを出て行ってしまう。……怒ってんだよ、これは……。
テーブルに沈没したあたしの所に、真砂が冷たい麦茶を運んで、一言。
「てめえって、肝っ心な時にバカだな」
「……知ってるよ、んなこと」
だって京平が。
ちくしょおおっ、なんであたし、あんなムズかしい男が好きなんだようっ。

5

当日はやっぱり大雨だった。

開場の一時間前まで綿密に最終リハーサルがあって、とにかく歌うだけ歌ってみたけど。曲は憶えてても、声なんてフラフラしちゃって聞けたもんじゃなかった。ライトが熱いし。空っぽの公会堂がおそろしく広いし。

しかもステージのソデで中西さんが控えてんだもん、ずっと……。これはつらい。ものすごくつらい。本番でなんかあったらすぐとっかえるってことだよね。

だけどマヤは、なんにも言わなかった。

下手っくそなコーラスだって、自分でわかってる。わかってるのに、誰も下手だって言わない状況ってのも……。

皆でステージにのってるのに、そのまわりには大勢のスタッフがいるのに、その誰も信じられないような、そんな世界。

ひとりぼっちだ。ひとりぼっちで、二千人の客を相手にするのか。

高校の学園祭でステージ立ったときは、こんな不安どこにもなかったのに。ただワクワクして楽しかったのに。

リハが全部終わったところで、一度だけマヤがこっちに来た。

「期待してるから」

無愛想なまんまで、そんなこと言って。

あたしは、その背中を見送ることしかできなかった。

「瞳さん」
気がついたら、ザザが後ろに立ってた。
「お弁当、もらってきました。お茶もね、真砂くんがポットに詰めてくれたのがあるんですよ」
「食えないよ、今っ！」
ずかずかとあたしはソデの奥に引っこんだ。楽屋はバンドの皆さんと一緒だから行きたくない。しかたないから舞台裏に、どっか適当な隙間みつけるしかない。
「瞳さん」
ザザが追っかけてくる。あーっ、うるさいっ。
一言文句つけてやろうと、ふりむいた瞬間。
「瞳さんっ！」
がしっ、と両腕つかまれて、そんでもって目の前に——本当にすぐ目の前に、ものすごく真剣な男の子の顔が出現した。
え？
ザザ、だよね……。
なんでなんでなんでこんなマジメな顔して。腕をつかむ強い力。
ど、どうなってんだよ。なんか喋ってよ、なんかっ。

「はいっ」
思わずあたしが返事なんかしちゃって。
「いいですか、瞳さん」
至近距離はそのまんまで、おもむろにザザが口を開く。
「は、はいっ」
あと十センチでいい、いや五センチでいいからもう少し顔を離してくれ、うわああっ。
「お腹すかしたりしてたら、本番で声がでませんよ。お茶だって、真砂くんのお茶は本っ当においしいんです。このチャンスを逃したら、いつまた飲めるかわかりませんよっ」
「はっ……え？」
「ねっ。だから一緒に食べましょうっ」
突然にっこりと笑ったと思ったら、強引に腕をひっぱってザザは歩きだす。
お……お弁当の話だったわけだね。もしやまさかあっち方向の話かと。うわー、びっくりした。
こいつっていつもにこにこしてるけど、本性ってそれだけじゃなかったのかな、ひょっとして……。
その時だった。
音もなく、まわりじゅうが真っ暗になった。何も見えなくなった。

舞台裏を動きまわってたスタッフ連中がざわめいた。どこかで物が落ちる音。なんだ、これ!?

「――停電ですっ！」

叫び声が届いた。

「原因を調べますので、皆さんそのまま待機してくださいっ……」

そんなっ……もうすぐ開場なのに！

じりじりと時間だけが経っていく。非常灯だけがところどころに点いて、スタッフもバンドの面々も舞台のソデに集まって待ってる。

あたしの腕をつかんだまま、ザザも天井のあたりを見上げて、ずっと黙っていた。

「故障じゃないんだ、落雷が……」

「だけどもう客は目一杯並んで待ってんだよ、この雨の中。これ以上遅らせたら」

「そんなこと言っても、いつ復旧するかわからないって……」

偉そうな人達の会話。

どうなっちゃうんだろう。このままじゃ、ステージなんて。

「瞳さん……」

ザザが尋ねてくる。

「電気、って、どれくらい必要なんでしょう」
「どれくらいったって……」
細かい数字のことなんてわかんない。
「とにかく客席と照明と楽器とマイクと……全部だよ、全部っ。電気なかったらコンサートなんかできっこないんだってば！」
言ってる最中に、足が震えてきた。
駄目だ、もう……やっぱり駄目だ！　こんな仕事、はじめっからあたし受けるべきじゃなかったんだ。
いろんなプレッシャーが、ここに来て一度に集中した感じだった。もういいっ。もう、これでステージ中止になっちゃえっ！
今さら……電気通ったって歌えない。歌えっこないっ!!　もう中西さんでいいっ!!
「瞳さん、ちょっと！」
いきなり腕を引っぱられた。ザザが走りだす。
「なっ……どこ行くのっ!?」
「いいからついてきて！」
暗い中を、迷いもせずにザザは進んでいく。あたしは転ばずについていくだけで精一杯だった。

たどりついたのは、使われてない小さな控え室。
あたしをひきずりこんで、ザザは扉を閉めた。廊下の非常灯すらさえぎられて、完全に真っ暗になってしまう。おいおいおいっ。
と。
何も明かりはないはずなのに……。
「ザザ……？」
はっきりと、ザザの姿は闇の中に浮かびあがっていた。
なんで？
光ってる？　ザザの体が？　ぼんやりと……光に包まれて。
「僕のバッテリーで、なんとか支えてみます。だから瞳さんはこの部屋の鍵かけて、かまわずステージに行ってください」
バッテリーって。
訊きかえそうとして、あたしは我が目を疑った。
壁の配電盤のパネルをはずしたと思ったら、ザザがその中に片腕をつっこんだ。次の瞬間——。
「ザザっ！」
バチバチバチッ、とザザの全身に火花が散った。青白い光が足元から髪の先まで走って。



「触らないで!!」
うっかり手をのばそうとしたあたしを、ザザが叱りつける。だって、だってこれって、感電してんじゃないの!?
「行ってください、早くっ……!」
必死にこっちを見て、ザザが叫ぶ。
「でもっ……」
「歌いたいでしょう!?」
はっ、とあたしの息が止まった。
ザザ。
「歌いたいんでしょう!?」
たたみかけるように、ザザが言った。ばりばりと電流がその身から——。
ザザから出てるんだ。
ゆらりと、天井の照明が動いたように見えた。淡い光が、復活する。だんだん明るくなる……。
「瞳さん」
立ちすくむあたしへ向けて、ザザはにっこりと笑ってみせた。
「僕はね、人間じゃないんです」

え、えっ？

なんて言った、今？

「機械なんです、全部。機械人間（マシノイド）って、呼び名があるそうです」

「あっ……あんた、そんな……そんなこと笑って言っちゃって……」

ああ、混乱して自分が何言ってるかわかんないっ。

ザザは答えなかった。

黙って笑ってたけど……でも、それはいつもの嬉（うれ）しそうな笑い方じゃなくて。

部屋の中がすっかり明るくなる。ザザをとりまく火花も激しくなった。外のほうが、ざわざわと騒がしくなってきた。

「瞳さん」

ザザが言った。

「行ってください。夢なんか、夢って呼ぶのが恥ずかしいくらいホントにしちゃってください」

6

ドラムの音。

それだけで、もう客席からは歓声の嵐が来る。
ギターがかぶさる。躍って、からむリズム。じりじりと痺れてくる。
ドキドキする。
みんな待ってる。みんなずっと待ってる。
長いイントロ。じらされてる。
熱気だ。熱が足元に溜まってる。早く。
——早く。
ガガガッ、と三連のショックの後、一瞬だけの空白。
〈shout!〉
一声吠えて、ステージに現れたのは黒ずくめの影だった。ものすごい歓声が彼女に迫った。
スポットが追う。一歩ごとに激化する。
嵐だ。暴風。
頭に巻いたバンダナを麻矢はかなぐり捨てる。髪が広がる。
どこまでも挑む目をして。
〈shout, only shout !〉
ドッ、と空間が揺らいだ。
そうか。

マヤ、あんたは戦っているんだ。いつもこんな嵐と。
小さな体で、マヤが踊る。指先の動きひとつで、客席に波が起きる。
リハの時と比べものになんない。信じられない勢いでマヤがとばす。
ハスキーな声はぐんぐんのびて、止まらない。リズムの轟音は客席に呑みこまれてしまいそうだ。
学園祭の、お友達ムードなんかとは全然違う。真剣勝負。真剣で切りつけて、切りかえされて、それで血みどろになってもきっとマヤは倒れない。
十七のガキなのに。
あんた綺麗だよ、マヤ。
あたしはなんだか泣きそうになっていた。なんでだかわかんないけど。
ドラムのおっさんもベースのおっさんも、震えがきそうにイイ音きざんでるけど、でも……まだ足りない。マヤには足りない。
お決まりのテクニックだけじゃ、箱庭みたいで。
〈狂っても踊っても十六夜に〉
大きくターンした間際、ちらりとマヤがこっちを見た。目が合った。
次からだ。次から。
そのことしか、もう考えなかった。手加減なしに、そう、自分がバックコーラスだなんてこ

とも忘れて、あたしは目の前のマイクに思いきり声をたたきつけてた。

〈月に〉

「夜に」

〈命に〉

「炎に」

〈眠れない地球に〉

「一人きり恋人に」

《shout, shout for planets!》

ハマった!?

階段を転げ落ちるみたいな掛けあい。うまくいったかどうか知らない。でもいいや、もう気持ちいいからっ。

《shout!》

マヤが叫ぶ。

《shout!》

客席を指さして。

《shout!》

あたしたちの声がぶつかりあって振動する。

《shout, only shout.》

あんたになんか負けてやるもんかっ。

ほとんどケンカする感じで、あたしたちは声をはりあげ合っていた。

音程なんて、少しくらいはずしてもかまわない。タイミングなんて、少しくらいずらしてもかまわない。時には、そっちのほうがカッコいいこともある。いやってほど気持ち伝わるなら、そっちのほうが大切だから。

オバサンにゃわかんないよっ。

マヤが、そう言った気がした。

じゃじゃ馬って、こんな子のこと言うんだろう。しょーがねーな、つきあってやるよっ。

《shout.》

最後のフレーズ。

《shout, shout for planets.》

曲の終わりと同時にすごく高いジャンプを決めて、マヤが着地した。

一曲だけでこんなに体力使ったの、初めてだった。息つく間もなく次の曲が始まっちゃう。

どひゃーっ、と思ってたら。

片腕の拳(こぶし)ふりあげて、マヤは全開で笑っていた。元気な奴……。

ここで先にダウンしてなるものか、と意地になった瞬間、その後のあたしの運命は決まった

と言えよう。二時間後、あたしは完璧に声ガラガラ状態になっていた……。

7

ステージが終わって頭がボーッとしてる時に、汗だくのマヤが近づいてきて、
「なかなか良かった」
と宣われた。ぶっきらぼうに。
「テープ聴いて、センスある人だとわかってたから。でも今度からはもう少し、テクと声量つけてね」
「……善処させていただくけどね」
いやー、ほんとにこの子は。
「あんたはさ、こんな事務所でアイドルやってないで、もっとちゃんとロックらしい売り方してくれる会社に行ったほうがいいと思うな」
どう考えても今日のステージが『キラリ☆フレッシュハリケーン』だとは思えなかったんで、あたしはそう忠告してみた。
「今のロック業界、甘やかされててつまんない。わたしはアイドル業界たてなおすまでは、ここにいる予定なの」

いとも簡単に、マヤはそんなことをおっしゃる。
しかも、さらに。
「だいたい、アイドルって、顔が良くないとなれないのよ」
……凄い。凄すぎる。何ってその、とんでもない自信が。
「プロだなあ……」
彼女を見送って、心底、そう実感してたら。
「プロのなかでも大物でしょう、彼女は」
のんびりと後ろから声がして、あたしは心臓止めそうになった。
「きっ京平っ!?　なんでんな所にっ」
ステージの裏だよ、ここはっ。
「顔パス」
にんまり笑って京平が答える。ちっ、やな奴っ。
「元気にかましてたじゃありませんか。いいよねえ、若さって」
「あの子の若さには負けるよ、さすがに」
「しかし見事にはりあってたけどなあ。ほら、彼女の声ってすごく個性的で、他の声消しちゃうんだよね。で、不協和なイメージだけ残って。その点、瞳ちゃんとは相性よかったぞ、確かに」

……こいつ意外と一条麻矢に詳しい気が。アイドルおたくだったのか？

でも、まあ。

「サンキュ。そう言ってもらえると、嬉しい」

たまには素直に、これくらい言わなきゃね。

そしたら京平は、どういうわけか黙ってしまった。あれ。

「ところで」

周囲に目をやりつつ、京平が話を変える。

「うちの居候の姿が見えないんだけど」

「あ、しまったっ！」

「派手にやったなあ……」

京平がため息をついた。

「すみません……」

恐縮して、ザザが答える。

配電盤はボロボロになっちゃってて、ザザ自身も床に座りこんだきり動けない様子だった。

オーバーヒートしちゃったんだそうで。

ステージが始まって三十分くらいで電気のほうは元どおり流れだして、その後はザザはずっ

とここに座って、ステージの音を聴いてたんだという。
「カッコ良かったですよ」
相変わらずの笑顔で、ザザがそう言ってくれた。
「あんたもね」
こいつのどこが人間じゃないのかよくわかんないけど、あたしはとりあえずその話題には触れずにおいた。
「しょーがねえな、おまえ。これってお嬢さんに直してもらうしかないだろ」
ザザの脇にしゃがみこんで、真砂がぼやく。
「えっ」
いきなりザザは幸せな顔になっちゃって。んー？
「あっ、おまえ今、おかげでお嬢さんに会えるなんて不埒なことを」
「ふっ、不埒なことなんてのは別にっ……」
真砂のつっこみに、ザザはますます真っ赤になる。なんなんだ？
ガタガタ言い合ってる二人はおいといて、京平がこっそりあたしの肩をたたいた。
「瞳ちゃん、あいつはね、ちょっと訳あって預かってる国家機密なんだけど」
はあ!?
「見てなさいね、もうあと何分かすれば、あいつの故障をかぎつけて世界一の天才児が現れる

から」

京平が言い終わるか終わらないかってところで、控え室のドアが勢いよくぶち開けられた。

「ザザっ！」

「あ、あ、あ……」

とびこんできたのは、小学校高学年くらいの女の子。うわ、なんか嘘のように可愛い。で、なぜかザザがうろたえまくってる。

「どういうことなの、これはっ！　あれだけ無茶はダメって言ったのにっ!!」

「ゆ、ゆ、優亜……は、早かったですね……」

「あたりまえよ!!　ザザに少しでも傷がついたら、センサーのアラームが最大ボリュームで鳴るようにしてあるんだからっ!!」

「ってことはまたゼロが運転手？　あいつって気の毒な奴……」

真砂がぶつぶつ呟いている。いかん、話が見えない。

「まあ、瞳ちゃん、ここは彼らにまかせて」

京平が手まねきした。ドアの外に出る。

人通りのない廊下で、京平は肩をすくめた。

「とにかく、そういうことなんだな」

「そういうことって、言われても全然わかんないよっ」

「うん。あいつはね、人間になりたいんだってさ」
さらりと、京平が答えた。
に、人間になりたい？　機械が!?
「あのお嬢さんのために、ってことらしいが。それで修行中なわけだ、あいつは」
そう言ったときの京平は、初めて見るってくらいに……優しくて。
ああ。
それは、きっと——好きだから。
今なら、あたしにもわかる。ザザの発想。
とてもとても好きな人がいる。大切な人がいる。心で一番の。
だから、あいつは。
「そっか」
京平があいつを放っとけない気持ちも、そしたら、なんとなく納得できるかな。
それを京平に教えてやるのは、けっこうシャクだから、今は言わないけど。
「なれるかな、人間……」
「さあ？」
尋ねたら、京平はどっちともつかない返事をした。
ふん。ホントは、信じたがってるくせにさ。

大人になると、みんな素直じゃなくなって困る。
「セリフが老けてるよ、京平」
「……余計なお世話なんですけど」
「ごめんね、あたしってば若くてさ。若さっていいよね、ほんとにっ」
わざと意地悪に言って、あたしはぽんぽんと京平の背中をたたいてやった。
絶対、なんて言葉は使いようだね。お月様は手に入らなくても。願っただけですぐに手に入ったら、そんなのは嘘だし。
それはそれで。
「京平、闇夜のお月様は誰が持ってるか知ってる?」
「は?」
とりあえず、目下の問題は、誰も見てないこの機会に、すぐそこの腕にじゃれついてみるか否か、なのだった……。

File 2
少年よ、大志を抱け

1

どこのクラスにも必ず、何をしてもカッコいい、何をやらせてもキレイにこなす人種というのが一人くらいはいるものだけど。

彼はそんな『スター』とは、ちょっとだけ違っていた。

……そのことに気づいたのは僕だけだったから。

彼が実はこのクラスでいちばん速く走れることとか、数学の成績がずばぬけていいこととか、カワサキのすごく高価そうなバイクでこっそり（もちろん校則違反だから）バイク通学してることとか、図書室の貸し出しカードが三枚目になってる（しかも科学の本から料理の本まで手広く読んでる）こととか、サッカーが大得意で休み時間に誘われると必ず（でもあんまり嬉しそうな顔はしないで）校庭に出ていくこととか、春の球技大会では左ウィングで活躍してシュート二本にアシスト四つ決めたこととか、それでもなぜかどこのクラブにも入らないで放課後はさっさと帰ってしまうこととか……。

彼は目立たない——いや、違うな、本当は目立つのに、目立とうとしてない、誰とも波風た

てないかわりに誰とも仲よくしてない、そういう奴だった。そして、僕たちの学校はいわゆるエリート進学校と呼ばれているくせに中身は奇人変人大集合っぽい側面なきにしもあらず、ってところだったりしたから、個性的な『スター』ならほかにいくらでもいたし、だから彼は誰にも気づかれずにいることを、ちゃんと成功させていた。

早水真砂。

彼は僕にとって——たぶん、僕だけの——誰も知らない英雄だった。

2

私立祥英高校は、東京都心から少しはずれた立川にある。伝統にのっとった、古風ゆかしき男子校である——かどうかはよくわからないけど、とにかくどういうわけか昔から男子校である。

金持ち学校のくせに、いまいち校舎がボロいのは、その伝統とやらを重んじたせいだとかなんとか……。

せめてこの、昇降口の狭さと下駄箱の古さはなんとかしてほしい。

特にその日は雨だったりしたものだから、急な冷えこみで「弘明ちゃん」が風邪をひいたり喘息の発作をおこしたりしたら大変じゃないの、と心配した母親が車で学校まで送ってくれ

て、つまりはいつもの電車に乗れなくて、おかげで僕は駅の裏の通りにバイクを放りだして走っていく早水真砂の姿を見そこねてしまって、けっこう落ちこんだ気分だったのだ。

「雨くらい大丈夫だっていうのに……」

なんてのは、言ってみるだけの愚痴である。こんな雨の日にラッシュの電車に乗ったりしたら、湿気と酸欠と温度差で、学校につく前にダウンしてしまう。情けないけど、僕は大昔から体が弱くて色が白くて、とりえといったら勉強くらいしかない軟弱野郎なのだ。

せめて、もう少し身長があって、もう少し体力があって、もう少し男らしかったら。

——早水真砂みたいに。

「おはよう」

ぼそっ、と真うしろから声が届いた。僕はとびあがりそうになってしまった。

彼。

二年二組、相楽弘明の下駄箱は、五十音順の都合で、たまたま早水真砂の下駄箱と、ひとつおいて隣同士に位置する。要するに、同じ高さなんだ。なんだけど。

こっちがかなり苦労して頭の高さより上まで手をのばしてるのに、真砂は何かのついでみたいに無造作に靴を投げこんで、そのままさっさと行って——あああ、そのまま行かれたら困る！

「あっ、あの……」

まだ馬鹿みたいに下駄箱のフタを上げたまんま、僕が口走る。と、行きかけた真砂が、身体半分だけふりむいた。

「あ、おはよう……今日は、早いね」

バイクじゃなかったんだね、と言いたいとこだけど。

「ああ……雨だからさ」

愛想なんてあったもんじゃない。全然ちゃんとした説明になってないことを真砂は言って、そして今度こそ階段を上っていく。

でも、僕は知ってるからわかるんだ。真砂がそういう奴だってことも、雨だから彼がバイクじゃなくて電車で来たんだってことも。

「狭い昇降口も、捨てたもんじゃないか……」

さっきまで考えてたことがストンとひっくりかえったりして、実際、僕っていう人間は単純すぎるくらい現金な奴だと思う……。

「代表選手？」

真砂はすごく怪訝な顔をした。

「十月になったら、すぐ体育祭だろ。その、四色対抗リレーの、二百メートルで」

休み時間のざわめき。

「で……なんで、相楽が俺にそれを言ってくるわけ？」
「僕、体育委員だから」
「……そうだっけ」
そうなんだよ。それくらい知っててほしかったけど。
僕みたいに体育が全然ダメで百メートル走っても二十秒近くかかっちゃうような奴は、せめて役職について先生とお近づきにならないと成績最下位はまぬがれない。
なんてね……体育委員でもやったら少しは苦手意識が消えるんじゃないかと思ったりもしたけど、世の中そんなに甘くなかったというのが本音で。
「早水って、二百メートルの記録だとクラスで一番だったし」
「……ふうん、そうだったんだ」
そうだったんだって、前に記録とった時にちゃんと言っただろうに。
そんな、記録なんかにはまったく興味ありませんっていう感じも……いかにも彼らしいとは言えるけどさ。
「考えとくけど……」
真砂は少し首をかしげて、そして呟く。
「でも……まあ、いいと思うけど……」
ちょっと目をそらした風の答え方も、彼の癖。へへへ。僕はなんだかへらへらしてしまっ



て、けど、彼の席の前でにたにたしてたら大まぬけだから、一生懸命口元をひきしめてみたり、した。

きっかけはとても小さなことで。

四月のクラス替えの直後、体育の時間にやったスポーツテスト。

百メートル走を測るとき、スタートのピストルを鳴らすのが僕の役目で、クラスの連中が僕の大嫌いなクラウチングスタートで（どうやってバランスをとるんだ、あれで!?　突き指しちゃうよ！）次から次へと流れてゆくのを僕はただ空しく見送っているだけで。

だけど。

みんなが『さあ走るぞ』って感じでスタートラインにつく中で、ひとりだけ、『さて歩くか』ってノリで、ものすごく自然に僕の目の前に現れた奴がいたんだ。あんまり自然すぎてヤル気がどこにもなさそうで、よっぽど遅いんじゃないかなって思ったくらいの。

なのに走りだしたそいつは、おそろしく速かった。風みたいに軽かった。ああ、あれは『歩くか』どこじゃなくて『飛んじゃおうかな』だったんだ！　とこっちが勝手に思いこんだくらい、すさまじく速かった。

『君……速いね。百メートル、クラスで二番だったよ』

とにかく何か話したくて、それだけ言いに行ったら。

『いや、前にボールがないと、どこまで追っかけていいかつかめないから、つい際限なく走っちゃうんだよな』

ぼそりと、ひとりごとみたいに言ってから、あっ、それじゃ初対面のこいつにゃ通じねえやって顔をして、ちょっと困ったみたいに黙って、それからそっぽ向いたまんま言い訳するみたいに『競争じゃないし』なんてつけ加えた——それが早水真砂だった。

あの一瞬だけで、僕は本当に、この人物のことを尊敬してもいいんじゃないかと思いはじめたのだ。

だって、そうだ、あのとき、クラスの連中の顔は『さあ勝たなきゃ』だったのに、真砂は、真砂だけが違ってた。ひとりだけ、違っていたんだ——。

3

早水真砂の走りは、ぜひとも全校生徒の注目する、体育祭最後の目玉イベントこと四色対抗リレーでばばばんと劇的に披露されてしかるべきだ、というのが、僕のささやかな野望だった。

が、ところが、である。

それは翌日の放課後、ホームルームの直後に起こった。

「代表選手？　そんな話、聞いてない」
大まじめに、早水真砂はそう言ってのけたのである。
「え……？」
昨日、休み時間にちゃんと話したじゃないかっ。
「体育委員だからって、勝手に決めることないだろ」
「か……」
か、勝手じゃないっ。
「そういう大きい舞台なら、もっと他に出たがってる奴がいるし。俺はパスするから」
「な……」
な、なんでだよっ。走れるんだから、走ればいいじゃないかっ。
昨日の今日だっていうのに、この急変は何なんだろう。ちょっと——ちょっと待って。待ってほしい。
胸の中ではいろいろ声がする。けど、口に出して言えることといったら。
「え……そう……？」
なーんて、ああバカバカバカ僕のバカ！　そうじゃないだろ、ちゃんと確かめなきゃ駄目だろ!!
なんだかいきなり昨日と別人みたいなことを言って。だけどいつもどおりの顔。

「だいたい俺、体育祭の当日、学校に来れてるかどうかもわからないし」
「ど……」
どうして。
「だから、他の奴にしとけよ」
やっぱりとても無造作に言って、真砂は鞄を持ちあげる。
これじゃまるで記憶喪失か二重人格じゃないか。
言えよ、真砂。説明しろよ、しっかり！
「じゃ、お先」
あっさり彼が教室を出て行く。
「あ……バイバイ」
だあああー っ、僕って奴はほんとにっ……。

というわけで……笑いたければ笑っていいけど、僕は尾行を決行した。
尾行と言っても、彼はどうせバイク通学だし、真砂の家は青山にある（ちゃんと知ってる）し、僕は反対方向の日野市の住人だし、だから彼を追っかけられるのは学校から駅までの徒歩十三分間だけだ。別にこんなの尾行のうちに入らないと思う。
ただ、僕は単に、未練がましく彼の背中についていっただけなんだ。

私立祥英高校の制服は、昔から変わらずに黒の詰襟で、うちの校章がついてるってだけで地元の人たちの見る目もちょっとばかり違う。

アタマいいんじゃないの、あのコ、という目が真砂に向くのを見ながらこっそり後をつけるのは、なかなか気持ちがいい。すらっと背が高くて、それなりに日に焼けて、すっきりした髪の早水真砂なら、ガリベン小僧って印象どこにもないし、だからこそ祥英の制服なんか着てるとカッコいい。

僕なんて、まず中学生にしか見られないしなあ……。

駅の裏の、不法駐輪ばりばりって感じの細道に、いつもどおり真砂は足を踏みいれていく。ど、どうしようかな。ここまで来ちゃってから、僕としてはかなり困ってしまった。

早水真砂は記憶喪失なのかそれとも二重人格なのかって、それだけを確かめたいと思ってはいたけれど。

バイクをひっぱりだしてくるのは多分こっち方向だから、ここでさりげなーく立っていたら、現れた真砂が、

『あれ、相楽、偶然だな。どうせだから少しお茶でも飲んでいこうか』

なんて……なーんてあるわけないだろバカバカ!! 二十年前の少女マンガじゃないだろ!!

でもでも、

『あれ、相楽、偶然だな。あ、さっきの体育祭の話だけど、あれって実はさ……』

くらいは……くらいは……あってもいいような……やっぱりないような……。
ああああ、僕ってどーしょーもない奴だなあ……。
裏道の入り口でため息ついてる祥英高生徒というのも、あんまり道徳的じゃない気がする。
真砂は出てこないし。きっとこれは向こう側から帰っちゃったんだ。
しーん。
「帰ろ……」
情けないったらありゃしない。僕がくるりと方向転換した時だった。
「何だよ、おまえら」
え？
真砂の声？
「何の用だよ。物騒なもん出してんじゃねえよ」
え、え、え!?
僕は同極にはじかれた磁石みたいにびしゅんっと裏道に入る角まで舞い戻って、おそるおそるカレー屋の看板のかげから声のしたほうをうかがった。
真砂。
カワサキＺＸＲのまわりをとりかこんでるのは、く、黒服の、やたらめったらヤバそうな、ももももしかしたら……もしかしなくても、ヤクザじゃないかっ!?

五人の男が真砂ひとりに。光ってるのは刃物？　ナイフ!?　あいつらいったい真砂に何するつもりなんだっ!?

こ、こーゆー時に呼ぶのは……救急車じゃなくて、赤帽じゃなくて、だっ駄目だっ思考が混乱して肝心な行動に結びつかないっ。

「どうせ殺せやしないんだろ。殺したら同意書がとれないもんな」

とりかこんだ面々を見渡しながら、ひどく簡単に真砂が言う。落ちつきはらって。

殺すとか同意書とか……どういう世界の話をしてるんだ。

「脚の一本や二本、折るくらいならいいと言われているんですが、坊ちゃん」

「へえ、誰に？　聞きたいなあ」

「依頼人の秘密は守るのが常識でしょうが」

黒服のなかでも特に偉そうな奴がそう言って——言ったと思ったら！　う、わ、危ないっ。

思わず僕は目を閉じてしまったので、黒服男の膝蹴りがどこへ飛んだかを見届けることはできなかった。ばきっ、と人間の身体が殴られる音。

真砂……!!

わかっているのに、何もできない。足が、膝が震えてる。なんて弱虫なんだ、僕は！

べきっ、めしっ、どすっ、と鈍い音が続いた。に、人間って、殴られたら本当にこんな音するんだ。ドラマの中だけじゃなかったんだ。どうしよう、どうしたらっ——。

がしゃんがしゃん、と自転車が連続して倒れた。ぐええ、と呻く男たちの声。
……え？
誰の声だって？
僕はようやく目を開き、そろそろと現実を確認した。
「ぬおお……」
もがく黒服男。そして。
「誰に頼まれた？」
後ろから腕で襟首しめあげて、冷ややかに尋ねるのは。
「言えよ、どこの家に頼まれた？」
うわ……カッコいいかもしれない……。
なんて言ってる場合じゃないっ。そう、それは間違いなく早水真砂だった。
四人の黒服は地面にへばってしまっていて、残った一人に真砂はさらに問いかける。
「千石か、東郷か、山城か？」
「言えませんな」
ふてぶてしく黒服が答える。
「そうか」
シュッ、と風を切る音がした。

真砂は動いてない。姿勢を変えずに。——袖口からのびたのは白い刃？

何だ、あれ？　隠し道具ってことか？

手首からのびたサーベルを相手の喉元につきつけて。

「なんだったら、皮一枚ずつぶった切っていってやろうか？」

「う……ぬ……」

いや、ちょっと真砂それは……殺人はよくない！

「真っ……」

しまった。

つい呼んじゃった僕のほうを、ハッと真砂が見返った。その隙に黒服が……腕すりぬけて！

な……なんでそれでこっちに来るんだ!?

「ちっ」

舌打ちして真砂が地面を蹴り、間一髪で男より早く僕の身を——だああーっ、人間ひとりを小わきに抱えてジャンプしてカレー屋の屋根まで跳んじゃったなんて、そんなのあるわけないっ。あるわけないじゃないかあっ。

これは夢だっ！　どう考えても夢だ!!　さっさと寝よう、寝てしまえ!!

「おいっ、おまえっ」

どこかで知ってる声が呼んでるようだったけど、僕はそのまんま幸せな暗闇へとダッシュで

逃げこんでいった……。

4

「それで結局、黒幕はわからずじまいってわけか」
「あの……もひとつ言うと、バイクが置きっぱなしだったりして……」
「だーっ！　ま、いいけどさあ。どーせおまえ、責任とって取りに行ってくれるんだろ？」
「え？　そうなんですか？」
「そうなんだよ！　そういうもんなの、人の世は！」
……誰？
すぐ近くで誰かが話してる。
知ってる声……いや、知ってるんだけど……二人分の会話が……ひとつの声？
はた、と目をあけたら天井が見えた。
「あら。おはようございます」
視界のはしっこでひらひらと手を振る……のは、そっちも起きぬけって感じのパジャマ姿の男性一名。
え？　何だ、これ？

いつの間に僕はこんな、他人の家になんてっ。
がばっとソファの上に起きあがって、僕はさらに信じられないものを見てしまった。
「ま、まま、真砂が二人いるっ!?」
テーブルに向かいあわせに座ってポテチなんか食べてるのは、二人が二人とも早水真砂だったのである。
「相楽おまえ、そこでまた倒れんじゃねえぞ！　いいな！　わかったな、ほら！」
「あ、あのっ、大丈夫でしたか、変なとこ打ちませんでしたか?」
二人の真砂が同時に口をひらいて全然ちがうことを言うーっ。
これはまだ夢だったのか!?　これじゃすっかり不思議の国の相楽弘明……。
「待て待て」
コーヒーすすりながら、のんびりとパジャマ男が脇から割りこんだ。
「ザザ。この場ではなんたっておまえさんが混乱を招いてる気がするんだけど」
「あっ、そうか、そうですねっ。なんだかすっかり慣れちゃって、このカッコに」
「俺は慣れたくないっ、慣れたくないぞっ」
左の真砂がポンと手を打ち、右の真砂がぶつぶつぼやく。
と、次の瞬間。
ハラリ、と何か薄い膜みたいなものが、左の真砂の顔から落ちたように見えた。

げっ。ち、違うっ。顔が落ちたんだっ。

そこに残ったのは、真砂とは似ても似つかない、やたら素直そうな（と言うと真砂が素直に見えないみたいだけど）人のよさそうな（と言うと真砂が……以下略）もしかすると少しくらい年上の、でもやっぱり高校生くらいの、男の人、だった。

くしゃくしゃと前髪を指でかきあげて、元に戻した髪形も真砂とはちょっと違う。

「どうもすみませんでした、弘明くん。ザザ、です」

にっこり笑って、彼が言った。ザ・ザ？

声まで変わってる。何者？

「びっくりさせるつもりはなかったんですけど……」

「びっくりするだろ、そりゃ。当然の帰結だろ？」

「つもりはなかったんです！」

「俺はねえ、結果を言ってんの、結果を！　なーにが悲しくて相楽まで家にひっぱりこんで……」

ザザに突っこんだほうが本物の、真砂、か。

でも、なんだか、本物のはずの真砂が……真砂じゃないみたいだ。

「まあ、せっかくですから……四人でお茶でも飲みましょーか？」

わざわざコーヒーカップを空にしてから、そう場をまとめたのがパジャマ男――いや、すぐ

後でわかったんだけど、真砂のお兄さんこと早水京平氏だったらしい。

「真砂くん、京平はキミのロイヤルミルクティーを切望している。この目を見てっ。京平の願いをたたえた湖のよーに澄んだこの目を見てちょうだいっ」

「わーかった！　わかったからやめろっ、気色悪かろーがっ!!　京平がロイヤルだろっ、パッケージはF&Mかトワイニングか!?」

「生協のエコノミーが好きっ」

「はいはいっ。で、ザザはミルク系が駄目なんだろっ」

「すみません……。えーと……ウーロン茶ください」

「んな怯えなくてもいいだろが……。で、相楽は?」

「はっ……え?」

いきなりこっちに水を向けられても、まるっきり話が把握できてない。

それに……こ、こんなに喋りまくる早水真砂っていったい……。

「だから。コーヒー、紅茶、ウーロン茶、プーアル茶、煎茶、緑茶、ほうじ茶、こぶ茶、玄米茶、ジュース、ミルク、ただの水、なんでも出るぞ。銘柄指定でさっさと言え、ほら」

……ええええっ、早水真砂がお茶いれたりするのか!?　そんなっ……そんな馬鹿なっ。

「ほんっと決断力に欠ける奴だな。コーヒーでいいか?　コロンビアのストレート、砂糖二つにミルクってとこだろ」

ああっ、でも真砂がほんとに目の前で訊いてるし。
「……砂糖、三つにして」
「あ、そ……」
真砂はキッチンに消えてゆく。だー、なに言ってんだか僕は……。

よく見ると、この家はおそろしく高級な二階層のマンションだった。かつて住所を見たとき、そんな予感はしてたんだけど。
住んでいるのは早水兄弟と、本名のよくわからない『ザザ』との三人きりで、話を聞いてみたら京平さんと真砂の間にも血のつながりはないらしい。他人同士が三人寄りあつまって……それでどうしてお茶をいれるのが真砂じゃなきゃいけないんだ!?　僕はひそかに憤っていたりする。
「すみません……」
おずおずと、『ザザ』が切りだした。
「実は、ここ一週間くらい、僕と真砂くんって何度も入れ替わってたんです」
入れ替わるなんて、そんな簡単にできるんだろうか？
「人の行動パターンをコピーするのって、けっこう得意なんで……真砂くんなら、よく知っている相手だからますますいいかと思って……」

「っていうか……バラしちゃっていいよ、こいつ口はカタい奴だから」
横から不機嫌に真砂が言う。――『こいつ』って、それ、僕のことなんじゃ……。
「えっと……」
少し困りながら、ザザが続けた。
「つまりそれって、真砂くんのボディガードなんです」
「なっ……」
そ、そうだ、真砂はヤクザに狙われてたんだ、そういえば。
「じゃ、じゃあ、殺すとか同意書とかって……あ、あれも僕の夢じゃなくて」
「夢なもんかよ」
と真砂。
「あのなあ、うちはこのとおり大金持ちなんだよ。で、親戚一同、虎視眈々と我が家の財産ねらってるわけだよ。特に来週はでっかい法事もあって分家筋みんなが集まる。そういう行事が近づくたんびに、どっかしら手え出してくんのが恒例になってんだ、これが。例えば俺を人質にとってさ、俺の後見役をそっちに譲りますって、京平に一筆書かせて、それを親族一同の前で公表してみろよ。一攫千金ってやつだぜ」
一気に喋ったと思ったら、真砂はついとそっぽを向く。
財産相続争い……なんて……親戚じゅう敵にまわすような財産って想像つかない。

京平さんは、こんな凄い話をしてる最中だっていうのに、あくまでのんびりとロイヤルミルクティーをすすっている。……よくわかんない人だ。

「で……真砂くんを誘拐しようとする気配が何度か感じられたんで、じゃあ僕が真砂くんのフリをして相手の黒幕をつきとめようってことになったんですけど……真砂くんが全然学校に行けなくなっちゃうのも嫌だし……僕がずっと近くに控えてて、危なそうだったら入れ替わることにしたんです。だから、昨日学校に行ったのが僕で、今日は真砂くんで、だけど帰り道からはまた僕がすりかわって、本物の真砂くんはあとで京平さんが迎えに行くって段取りで……」

「まあでも、ナイフで脅したってとこが穏便そうでいいよな、今回は。銃やら爆弾やらクスリやら、手段選ばない奴のほうが多いもんなあ」

ザザの説明と真砂の独白。頭ん中ぐちゃぐちゃになりそう。

でも——待てよ、そしたら。

昨日の朝おはようって言った真砂も、代表選手やってもいいって言った真砂も、黒服男しめあげた真砂も、実はザザだったってことじゃないか。

本物の真砂は……代表選手なんか知らないって言った、その真砂だったわけか。

なんだか力がぬける……。

「体育祭のことはさ、ついさっきザザから聞いたけど」

顔しかめながら、真砂がポツリと言った。

「勝手に決めたとか言って悪かったけど、だけどおまえ、どうしてそこで変だと思わないわけ？」

「へ……」

変だと思ったよ！　思ったからずっと……。

「……って、そこで言いかけてやめるなよ」

うっ。

真砂が。真砂がこっち見てる。だ……だから緊張してっ。

「おまえっていっつもそうだな」

目をそらして、真砂が呟いた。

……ずしっときた。

そ、そんな、そんな風に言えるほど僕のこと見てるわけじゃないだろうに。

「い、いつもじゃない……」

気がついたら、低く、声を押し出してる自分がいた。

「ちゃんと話したかった時には、本物の君が学校に来てなかっただけだっ」

「――――」

あ。

その時、すごく驚いたような目で真砂がこっちをふりむいた。



一瞬だけ。

そうだ、今……僕はとても冷たいことを言った。真砂のせいじゃないのに、真砂のせいにした。

駄目だ。これじゃ傷つける。駄目だ。ごめん。ごめんなさい。

胸の中のぐるぐる。言葉にならないまんまで。こんなんじゃ伝わるわけない。

「ち、違……」

声にしないと。しっかり。

「違う……今のは、嘘で……」

「簡単に嘘つくしさ」

氷の針みたいな真砂の一言。真砂くん、とザザが呼んだようだった。

嘘なんかお互い様だよ。真砂だって、学校じゃ、この家にいるときと別人の顔してるじゃないか。

「だから……！　今のはごめんって……君の、家の事情は大変なんだろうし、だったら僕にどうこう言う資格ないし……」

ばしっ、と大きな音がした。

平手でテーブルたたいて、真砂が立ちあがるところだった。

「哀れんでんじゃねえよ！」

言うなり、真砂は身をひるがえして部屋を出ていってしまった。
別に——かわいそうだなんて思ったわけじゃない。
怒鳴られる覚えなんかない……。
だけどっ……こんなのは情けなくて、よくわからないけど情けなくて、僕はもうどうしたらいいかわからなくなって、でも人目もあるし泣けないし、間がもたないし、しょーがなくて、真砂のいれたコーヒーを一口、飲んでみた。
「美味いでしょ？」
軽く笑って、でもなんだか真顔で、京平さんがそれだけ言った。

5

きんこん、と壁のむこうでチャイムが鳴った。
「えっ」
ぎょっとしたようにザザが顔を上げた。何だ？
「ま、真砂くんっ!?」
「ザザ、モニター見てみろっ」
すかさず京平さんが鋭い声を投げた。ザザが席を立つ。

インターホンの脇についてるテレビモニター。建物(マンション)のどこか（入り口じゃないかな）が映るらしい。

「あ……！　真砂くん、ひとりで!?」

カメラの下をするりと走りぬけた影。

「あのバカっ」

京平さんがすごく微(かす)かに呟(つぶや)くのが聞こえた。

「大丈夫、僕が追っかけます。見つけたら連絡入れます。じゃ、行ってきますっ」

突風(とっぷう)のようにザザがリビングから駆け出していく。後には、京平さんと僕だけが残された。

真砂が……出ていっちゃったのか？　ひとりで？

狙(ねら)われてるのに!?

「えーと……」

ぼそりと京平さんが口をひらく。

「つっても我々としてはあんまりやることないんで、ひきつづきお茶でも飲むしかないんじゃないかと」

そ……それは確かに。けど。

「さっきのチャイムって……」

「あ、あれは我(わ)が家のドアロックが外(はず)れたら自動的に鳴るようにしてあるの。防犯用なんだけ

どね」

しかしまさかここで役立つとはねえ、と京平さんはのんびり続けて、だけどティーカップをソーサーに戻すのを忘れてるかもしれない……。

なんだかいきなり大変なことになってしまったみたいで。よくわからない。頭ついていかない。

……僕のせいなんだろうか。

あんなことくらいで真砂がそんなバカな真似するとは思えない。

だいたい僕はなんで、大変そうな人たちの所にお邪魔してコーヒーなんか飲んでるんだ？

「あの……僕、邪魔だったら……」

「冗談じゃない。こんな所で一人にされたら京平は寂しさのあまり乱心するぞよ」

大まじめに京平さんは妙なことを答えて、帰してくれそうにない。僕だって本当は、帰りたくなんかない。

窓の外は、いつの間にか夕暮れ。

どうにも形容できない沈黙が十五秒くらいあった。京平さんって、感情がものすごくつかみにくい人だってことに僕は気がついた。何を考えてるのか、わかりそうで、やっぱり全然わからない。

「ちなみに」

ティーカップをもてあそびながら、京平さんが切りだした。
「学校で真砂くんって、どんな人ですか？」
「え？　……あ」
そんなの決まってる——というか、決まってたはずなんだけど。
「え、と……カッコいい、です」
「おお。そりゃ感動的」
カッコいい……と、僕はずっと……。
だけど、わかってたつもりのことが全部崩れたら、英雄だと思ってた彼はどこに行くんだろう？
「真砂くんの同級生と会うのって、初めてなんだよねえ……」
しみじみと京平さんが言う。
「若さを痛感するなあ……あーあ」
「京平さんだって」
嘆くような年には見えない。
「でもほら、俺は『兄』ですから」
京平さんは肩をすくめた。
「友達とは、ちょっと次元が違うでしょ。残念ながら。ザザだって『家族』だし。真砂くんは

ねえ、ずーっと『家族』ばっかり相手にしてきてるからなあ……」

トモダチ？

友達って。誰と誰のことを。

「あの……」

言いかけた時。

りんごん、と再び、さっきとは別のチャイムが鳴った。

立って行った京平さんは、インターホンの横にかかった、小さな受話器をとる。携帯電話みたいだ。

「はいはい。……え？」

僕は反射的に聴覚へ神経を集中していた。そうするまでもなく、かなりの大ボリュームで、ザザの声がここまで伝わってきた。

『すみません京平さん！　真砂くん、もう捕まっちゃってました！』

なっ……なんなんだ、その展開はっ!?

6

「おっかしいなあ、俺ってばただのしがないギター弾きなのに……」

そんなことを呑気に呟きつつ、京平さんはとんでもない角度でハンドルを切る。ぎぎぎぎ、と分解しそうな軋みをあげつつ、カリーナのタイヤは無理やり方向転換する。

東京都心の交通事情なんてまるきりおかまいなし、一方通行なんのその、車線変更めちゃくちゃ、後部座席に乗ってる僕はジェットコースターに乗ったときよりも蒼白な顔をしていただろうと思われる。この人ほんとに免許もってるのか!?

『白のベンツです』

携帯電話から、ザザの言葉。どこにいるんだろう。

『港に行くみたいです』

「んじゃ、そろそろまわりの車も減ってきただろ」

『ですね』

「ぶっ壊しちゃっていいよ」

『ぶっ……壊しちゃっていいんですか?』

「びっくりするんじゃないかなあ」

携帯電話で喋っている間、左手がふさがってる京平さんは一度もギアチェンジしてない。高速道路でもないのに百キロ近く出してる。怖い。怖すぎる。

ザザからの連絡が来た直後、パジャマの上にコートひっかけただけでカリーナの運転席におさまって、有無を言わせず公道のまんなか突っ走ってるんだから……ただものじゃない。

「あ。ほら、追いついた」
は!?
道幅は広くなってるのに、車の数はちらほらとしかない。大きな倉庫がいくつも見えてきた。東京湾が近づいてる。
二台先を走ってるのは白のベンツ。
で……屋根の上に人影があるなんてのは……僕の錯覚じゃないとしたら……！
「ど、どうやってっ……」
疾走する車の上に乗ってて、しかも気づかれないなんて。
あれが――ザザ!?
ベンツのなかには真砂がいるってことだろうか？
だからってザザのは無茶だ……。あのベンツだって六十キロは出てるんだ、落ちたら小さな怪我じゃすまない。
「ドア、はがしちゃうとか……」
その場で思いついた様子で、京平さんが呟いた。
『はあ……あの、京平さん、よけてくださいね』
ザザの声が返ったと思ったら。
遠目ではっきりしなかったけど……いや、どう見ても確実に、ザザがベンツの後部扉を上か

らめりめりと引きはがした。
何も使わないで。自分の片手だけで。
左のドアがきれいに外れて、風に乗ってこっちへ吹っ飛んでくる。京平さんはふわりとハンドルを切る——けど、後から来る車のこと考えてないんじゃないか!?
案の定、後ろでは急ブレーキとクラクションと金属の接触音。あああ……。
大事故には至ってないようだけど。こんなこと続けていたら次こそ。
「京平さん、あのっ！」
「大丈夫大丈夫」
なにが大丈夫なんだか。
ザザは右のドアにも手をかけてる。あ？　助手席から黒服男がひとり身をのりだして……車体の上のザザをひきずりおろそうとしている!?
え。
最初、今ザザが何をしたのか、よくわからなかった。
でもあれ、要するに、助手席の黒服の首ねっこつかまえて逆にひっぱりあげちゃって、野菜でも放るみたいに軽々と、対向車線のトラックの荷台まで投げちゃったんだ!?
的を外れることなく荷台に落ちた黒服は、手足をばたつかせながら僕たちのはるか後方までものすごい速度で遠ざかっていく。

と……特撮アクション映画じゃないんだからっ。

「あの、京平さん!?　ザザっていったい……何なんですか!?」

何者なんだ、あれって!?　やっぱり、あのサーベルとかジャンプとかも夢じゃなかったんだ！

「何って、うちの家族ですってば」

き、京平さーんっ！

人間じゃない。あんな動き。

真砂って、どういう連中にかこまれて暮らしてるんだ。京平さんはのんびりしながら過激な人だし、ザザはおとなしそうな顔してあそこまでぶっとんでるし。

もしかして真砂って、この三人のなかで最後の砦ってやつなんじゃ……。

ザザは右のドアを素手で引きはがしたら、今度はさっきみたいな混乱を起こさないようにとでも思ったんだろうか、後ろに放ることはしなかった。その代わりといっちゃ何だけど。

「うわ……」

ぐしゃん、という音がはっきり聞こえた。

フロントガラスを覆うかたちで、右のドアはベンツのボンネットに突き立てられていた。そっ……それじゃ前が見えないじゃないかっ。

カリーナはベンツの真うしろまで近づく。

リアウィンドウに影は二つ。こっちをふりむく。あ。

——真砂!?

元気そうだ。大丈夫。よかった。待ってる。行かなきゃ。早く助けに行かないと！

「京平さん、真砂が！」

「今、ザザが行くからね」

京平さんの台詞と同時に、ドアのなくなった後部座席にザザがすべりこむのが見えた。

ベンツのなかには、真砂と見張りと運転手の三人だ。狭い車内での乱闘は、二秒くらいで決着がついてしまった。そりゃ、度肝ぬかれてたんだろうな、黒服男たちも……。

直線道路がそろそろ終わって、正面には夕刻のがらんとした倉庫街が迫ってくる。後から来る車はなかった。さっきの接触事故で流れが止まっちゃってるんだろう。

『京平さんっ……』

ザザが呼びかけてきた。

『真砂くん、無事です！　それから悪の手先二人、つかまえて助手席につめこんでありますから！』

「おー」

さ……さすが。

『それから、あの……』

突然、ザザの声が弱くなった。え？
『すみません京平さん！　ブレーキ壊しちゃいました！』
「……あのなー」
だーっ、どうしてこう次から次へと……！

ボンネットに突き刺さってたドアに、ザザが運転席から手をのばした。横に押しのける。がらんごろん、と鳴りながらドアは地面にころがった。
「ハンドブレーキがあるだろ？　無理やりロックしちゃえ！」
『さっき蹴とばして折っちゃったんです……』
「……せめてハンドルは無事でいてね」
『あ、あんまり無事じゃないかも……』
京平さんとザザの会話。ベンツは慣性のまんま倉庫街のなかへ走りこんでいく。
「海沿いにまっすぐ走らせておきなさい。どっかの荷物に乗りあげりゃ止まる」
『京平ーっ、俺はムチウチになりたくないぞっ』
真砂の声！
『おい、相楽ー、おまえちょっと手え貸せ！』
え、僕!?

『今からそっち行くから！　こら京平、もたもたしてんじゃねえよっ』
「真砂くんって、どーしてそう短気なのかしら」
ぼやくように言って、京平さんがアクセルを踏みこんだ。
カリーナはベンツの左側にぴたりと並んで、そのまま同じ速さで走りつづける。
「相楽くん、右のドア開けて」
え、え!?
走ってる最中なのに？
「まっ……まさか」
「うん、そのまさかで、真砂くんがこっちに乗り移りますから、相楽くんはしっかり手を貸してやってね」
「だ、駄目ですよ僕っ！　握力(あくりょく)ぜんぜんなくて背筋(はいきん)力も弱くてっ」
「ザザ、ハンドル動かさずにね」
きょ、京平さん聞いてないっ。
「相楽っ！」
あ、もう電話ごしにじゃなく、生で真砂の声が届く。
ドアのなくなった後部座席から。
強く吹きぬける風で真砂の髪があおられる。運転席の背に手をついて、身をのりだして、こ

っちを見てる。
いやだな。
思いきりがよくて、強引で、大胆で、無謀。
そんな早水真砂のことは、実のところ僕はちゃんと知っていた気がして、そして、その早水真砂は僕に『手を貸せ』というんだ。
世界なんか違うと思った。次元なんか違うと思った。手なんか、触れるどころでなくすりぬけちゃうくらいの。
超然と、ひとりだけ別のところ見てた早水真砂。
けど、今、手を貸せるのは僕ひとりだけで。それが、僕はいやで。
いやなくせに、それでも。
「！」
風にさからって僕の手が右のドアを押しあける。
全開はしない。距離がひらきすぎるから。肩でドアを支えて。
地面がすごい速さで動いてる。落ちたら大ケガ。——いや、落ちたときのことなんか考えない。
「真砂！」
神様。たとえ僕が彼にまったく及ばなくても僕は彼を助けたい。

僕は怖がりの弱虫だけれど。

「来い！」

叫んだとき、まるで僕はヒーローだった。地球の命運を背負った戦士のようにドキドキしていた。

とても崇高な気分で。バカみたいだけど、本気で。

「そっちこそ、しっかりつかまってろよっ」

のばした手を、真砂が無造作に摑んだと思ったら。

浮遊。

何も考える暇はなかった。カリーナの後部座席に、二人して僕たちはころがりこんでいた。京平さんがブレーキをかける。

走りつづけるベンツはどうするのか。真砂と先を争う感じで顔を上げると、二人の黒服男を肩にかついで、ザザがとびおりるところだった。

バランスに苦労しながら、それでもなんとかザザが着地する。

そして——ボロボロになった白いベンツは、ちゃちなフェンスを見事に破って東京湾へと突進していった……。



7

「最後の砦どころじゃないよね……」
僕はため息をついた。この家の人間って、三人が三人ともどこかスペクタクルなんだもんな。
「京平さーん、この悪の手先の人たちはどうしますか？」
のされて粗大荷物と化している黒服男ふたりをひきずって、ザザがやってくる。
「そーだねー、うちのカリーナが定員オーバーになっちゃうし、連れてくわけにはいかんよなあ」
のんびり答えて京平さんも運転席を出てゆく。コートの下、パジャマのはずなんだけどな……。
車内に残ったのは、僕と、真砂。
なんだか話しづらい空気が漂ってるのは……仕方ない。
「おまえさあ……」
ぽつりと、隣の真砂が口をひらいた。
「前から俺のこと、名前で呼んでたっけ？」

「え？」
げ……げげげっ。
そういえば無意識に真砂真砂と連発していた気がする。だー、化けの皮はがれまくりっ。
「きょ、今日からだよ」
これはかなり、ヤケ。あれだけ騒いどいて、今さらどうしろというのか。
「……ふうん」
頬杖ついて目をそらして、真砂はそれしか言わない。
そうか、やめろとは言わないわけだな。んじゃ、これからも馴れなれしかろうがなんだろうが、続けても文句はないわけだな。いつになく強気だぞ、僕は。
「僕、はっきり言って、今までは君のこと、たいてい知ってるつもりでいたんだ」
ほら、こんなことまで話せちゃうし。
「でも、ところどころ当たってたり、けっこう大違いだったりして……思ったよりバカだし、君は」
「悪かったなあ、バカで」
「ああ、バカだね！　狙われてるのに一人で外、出たりしてさ！　考えなしだよね！　こんな大騒ぎして、家の人にすごく一生懸命に追っかけてもらってさ、そういうことになるってわかってるくせにやるんだもんね！　しっかり捕まっちゃってるしさ！　バカだよ、大バカ！　大

まぬけだよねっ!?」

「あ、あれはっ、わざと捕まったんだよっ、そうすりゃさっさとケリがつくと思ってっ」

かっと赤くなって真砂が言い返す。ケリがつくって……。

「なんでそんなに急ぐ必要……」

「学校に行けるだろっ、そしたらっ！」

……は？

学校に行けるって……それは、あの……。

「それって、あの……本物の君が学校にって……」

真砂は答えずに、またもやそっぽを向いて黙りこんでる。……照れてるみたいで。

こ、こいつって……こいつって……まさか。たった、あの、僕の一言のために。

「あは……あははははっ」

笑えるっ。これは笑えてしまうっ。

「なに笑ってんだよ！」

「だ、だって、かわいい……真砂って実はかわいい……」

「るっせーなっ、そっちこそ猫かぶってたな、実は！　だいたいおまえ、俺のこと避けてたんじゃないのかよ！　いつもいつも、俺にだけなんか言いたそうで言わねえでさっ」

さ、避けて……。そういう解釈の仕方ってありか？

「違うよ、ぜんっぜん違うよ、バカだなあ……そっか、そうやって気にしてたわけだ、君は……」

ああ、なんか、とことんハイだなあ、僕。狂騒状態に近いなあ、これは。

「かわいいし、バカだし、いやな奴だし、うらやましいし、カッコいいし、コーヒーいれるの上手だし、君のことなんか全然わからないよ。全然わからないから、また初めからやりなおすよ。別に学校じゃなくてもいいよ、もっともっと、いろんな所で、いろんなこと、君と話したら、そのうち、うん、百五十年後くらいにはきっと君のことが二割くらいはわかる自信があるから、僕は」

大笑いしながら、本当、呼吸困難おこしそうなほどバカ笑いしながら、僕はかなり長い時間をかけて、そんな言葉を彼に告げていたのだった。

例の黒服さんたちから依頼人の名を聞き出した（どうやって聞き出したのかは、京平さんが『ひ・み・つ』としか言わないんでわからない……）おかげで、とりあえずしばらくは、真砂の身も安泰だろうということになった。誘拐が日常茶飯事じゃ、どういう状態を安泰と呼ぶのか今いち不明だけど。

ザザの正体も教えてもらった。これは……なかなかびっくりしたんで……ここでは伏せておこう。うん。

で、問題の体育祭なんだけど――実は、あのベンツからカリーナへ乗り移った時、あの瞬間に、早水真砂は左足をくじいていたことが後になって判明した。

「おおばかもの!!　としか言えないね！　どうしてそういう致命的な怪我ができるんだ、この大切なときにっ」

「うるさいっ。誰のせいでこんな怪我したと思ってんだよっ」

「真砂だ」

「てめえだろっ！　てめえだよ、てめぇッ」

なんというか、互いに本性がバレた後は、遠慮というものが吹っとぶらしくて、近ごろの僕たちはこのよーな会話に走っている。こうなってくると、かえって昔がなつかしい……。

「なんだったら僕、また真砂くんの代理やってもいいですけど……」

おそるおそる、ザザがそんなことを申し出てくれたこともあったけど。（きっと僕たちの舌戦があまりにキレていたんだ）

「治す治す。体育祭までに治すから安心しろって」

と、早水真砂は断言していた。……トラウマってるなあ。

ザザが真砂の格好をして走ったら、それはもちろん文句なしの一位をとるだろうけど、でもその一位じゃ意味がないってことだと思う。

「真砂くんのマネすると解放感あって楽しいんだけどな……」

学校に行くのも面白くて好きだし、とザザは残念がっていた。まあ、こればかりは仕方ないから。

「でも、うん、ザザの化ける真砂のほうが、実物よりカッコいいんだよね、これが……」

「あ、そう、なんだか僕も、自分じゃないと思うとついクールになりきっちゃって……やみつきになりますよねー、あれは」

何なんだそれはっ、と真砂が愚痴るのはおいといて、僕とザザはしみじみと頷きあったりしていた。

でも本当は。

捜してたヒーローは、いつも自分の中にある。

僕たちは忘れない。絶対に忘れない。きっと——ずっと……いつまでも。

File 2.5

レポーティング・スペシャル

ちゃーんかちゃーんかちゃんかちゃんかちゃん！（以下ミュージック続行）

やあやあ諸君グッドアフタヌーンアンドアイラビューン、大人気超天才ＤＪこと早水京平さんだあっ。なんと我々は本日あの！　あの!!　全世界でも屈指の名門校と呼ばれる私立祥英高校に潜入取材を決行したのであったっ！　我らの行手に待ちかまえるのは謎のインカ文明大遺跡か、はたまたピラニアの棲息する驚異の底なし沼か、そして現れいでたるはＵＦＯの変身光線を浴びた半魚人なのか、我々の冒険はいやがうえにも盛りあがりまくるのであったあっ!!

え、何？

やかましいっ、神聖なマイクは私のものであるっ。多少テンションが高いからというてそれが何だというのだっ。ええい寄るな触れるな、何人たりとも私のマイクを奪うことは許さんっ。

「あ、あの、違うんです、違うんですっ。今日はだから体育祭……あっ……」

そう、そうだよザザ1号、よいところに気がついたではありませんか。そうなのだよ、今日はなんとあの、

体育祭！

が行われる当日なのだよ。素晴らしい発見だねザザ1号。ええい頭が高い。

というわけで我々は現在、祥英『金持ち』高校のグラウンドに来ているんですねー。中継は早水でーす。さすが祥英『金食い虫』高校だけあってグラウンドは巨大ですねー。宇宙戦艦ヤマトが三匹くらいは収まりそうですねー。

え、今どきのガキどもは宇宙戦艦ヤマトを知らない？　やかましい、俺はこれでも二十代だぞ。そういや誰も京平さんの本当の歳を聞いたことがない？　ふふふん、教えてやらないよーん。

それにしても凄じいグラウンドですねー。地平線が見えますねー。ああ地球はやっぱり丸かったんだなあという感慨が胸にひしひしと迫ってまいります――なんてことを本気で信じたあなたは馬鹿ですねー。（「京平さんっ、なんてことを言うんですかっ」ガタガタガタ）

なにか聞こえましたか？　聞こえませんでしたね。それではひきつづき早水京平が案内役を務めさせていただきます。せわしない日常にふと息をつくひととき、心の安らぎのひとときに、いつも奥様のくつろぎをエスコートする男でありたい、違いのわかるＤＪ早水京平でございます。

おおお、奥様奥様、言い遅れましたがこちら祥英『奇人変人』高校はなんと六年制の、男子校！

でございます。当然のことながら、栄光の体育祭ともなれば、中学一年生から高校三年生ま

での男がまあゴキブリのように這いまわり溢れかえりこれはもうむさくるしいなんて世界じゃ……あ、いえいえ、奥様の心のロマンを誰よりも大切にする耽美至上主義DJといえば何を隠そうこの私。そう……こうして純粋な心をもって見つめれば、さわやかな汗、燃えあがる熱血、澄んだ涙、通いあう友情、ああなんだか美少年もゾロゾロ歩いているような気がしてまいりました。これぞロマン……これこそが夕日に輝くロマンなのでございます。まだ昼だけどさ。

はあ。京平さんちょっと喋りっぱなしで疲れちゃったぞ。おーいザザ1号。こらザザ1号。ザザちゃんやーい。

「ひっ……ひどいですよ京平さん、あんまりですよ！　え、あの、京平さん、どこ行っちゃうんですか!?　京平さん!?　マイクどうするんですか!?

あ、えーと、仕方ないから代理で喋ります。ザザです。えっと、その……ゆ、優亜、聞いてますか……じゃなくてええっ！　うわあ、すみませんすみませんすみません!!　今のなしです!!　は、恥ずかしいっ……。

あの、今、京平さんがいろいろ言ってましたけども……」

京平さん大復活ーっ!!　はい、アシスタントさんご苦労さまでしたー。

解説しよう！　祥英の体育祭は紅白対抗歌合戦、なわけなくって、その実態は四色対抗で戦いぬかれるバトル!!　ここで我らがマスコットボーイ、相楽弘明くんに、さらさらさらっとそ

の仕組みを紹介していただこうっ。

「え!?　何？　何なの？　あ、これに喋ればいいんですか？　あのー、京平さん、僕、体育委員だからすごく忙しいんですよっ。早く点数の記録とらないとっ。ああっ次のクラブリレーの整列がっ。え、そんなことわかりきってる？　全部真砂におしつけてきた？　あのねえ……いいけどね、いいですけどね、僕は……僕のせいじゃないし。

　要するに四色対抗リレーのことを説明すればいいんでしょ？　ええとね、うちの体育祭は全学年たて割りで一組が白、二組が青、三組が赤、四組が緑、とまあそういうふうに四つのチームにわかれて点数を競うことになってます。点数板みればわかるでしょ、四色でしょ？　え、うちのチーム？　僕と真砂は二年二組だから青。なんで一位になってないんだって……そんなこと僕に言われても。えっ実行委員？　執行部のこと？　うちの執行部は体育委員会と生徒会が合同でやってます。あれっ、どこ行くの？　京平さん？　えええっ、そっち行ったら……」

「あっ、こちらは執行部ですので、父兄の方の出入りは遠慮していただきたいんですが。……え、初代生徒会長？　そういうことでしたら……はいっ、どうぞおはいりくださいっ」

「あのね、京平さん、うちの初代生徒会長っつったら、今はもうすごーいおじさんだと思うな、僕……」

　現在の一位は白組だそーです。青組二位！　むむむうっ、恐るべし白組！

「人の話きいてないんだからっ」

でもさー、白組が一位って変じゃないかなあ。さっきから徒競走で勝ってるのは青組ばっかりなんだけどなあ。

「あれっ、本当だ。もともと二組には運動部で活躍してる人間が多いから……その点、一組ってダークホースなんだよねー……」

こーれーは、不正の匂いがするっ。私の体内に流れる赤い血潮が、闇の気配を訴えているっ。

「人聞きの悪いことをおっしゃらないでいただきたいなー。あっ、僕ですか？　はっはっは、名乗るほどのものじゃないですが生徒会長の」

名乗らなくていいんだってさ。

「生徒会長の西城です！　ハンサムです！　声だけではわからないと思いますがっ、文武両道そのうえ情熱と魅力にあふれた好青年です！　走らせれば疾風迅雷、歌わせれば白薔薇の君、喋らせればエイブラハム・リンカーンと呼ばれる西城です！

あ、申し訳ない。いやあ、マイクを見ると興奮するたちで。しかしだ、不正はないでしょ不正は。不肖二年一組代表選手として申し上げますけど、ま、我々の頭脳プレイに青組がついてこれないとゆーことですよ。はっはっはっ」

「さぁいじょおっ、ここで会ったが百年目っ」

「おお、そういう君は体育委員長の飯塚っ。説明くさいセリフだがどうしてもマイクを気にし

てしまう西城だったっ」

「負けずに説明くさく喋ってやるが俺は二年三組の飯塚だっ。西城、きさまとは総務会のたび、学校行事のたび、クラブ活動のたびにぶつかりあっているライバルだがっ」

「あのなあ、俺は君とぶつかりあっているつもりはないのだが」

「きさまが俺の先行きをことごとく邪魔するのは事実だっ。それも悪辣な手段によってなっ。これまで何度となく辛酸をなめてきた俺だが、いいか、今度という今度はしっぽをつかんだぞ」

「つかむなんて……やらしいな、君は」

「何がいやらしいんだっ!!　いやいや、それがきさまの常套手段。話をそらそうという魂胆だろうが、その手にはのらんっ。

見ろ！　白組の得点をわれわれは詳細に記録してみた。その結果がこれだっ！」

「おおっ」

「これはっ」

「なるほどーっ、そうだったのかあーっ」

「セリフだけじゃなにがなんだかわからないけど、なるほどーっ、奥がふかーい」

「でも字が汚い」

「いいだろう、そんなことは！　どうせ見えないんだからっ」

「こらあっ、みんな一度に喋るなってば、この俺の美声がマイクにはいらないではないか！」
俺のマイクだよ、言っとくけど。やっぱ若い連中はだめだねー、落ち着きがないねー。
えーと解説しよう！　でもめんどくさいから飯塚くんにパスっ。
「つまりだ！　青組の選手が一着をとるレースで、白組はつねに二着と三着を独占している！　そーすると、ちょっと見には一着の青組が十点とってリードしたようだが、白組は二着の七点、三着の四点をとって合計十一点！　結果的に白組が勝つのだ！」
「そりゃ偶然の産物だろう。幸運の女神はやはりハンサムな我らにほほえむだなー」
「しらばっくれるな、西城！　どー見てもこれは、きさまらが事前に青組の走者順を知っていて、それにあわせて走者を配置したものとしか思えぬっ」
「そんなことしたら不正行為ではないか！」
「今更なにを言っているっ」
「ふたりとも、こんなところで因縁の対決をやっていたら下級生がおびえるじゃないか」
「うわあ、びっくりした。君の登場のほうがよっぽど怖いぞ！」
「出たな、黒幕っ。説明くさいが二年一組の里見っ。だまされないぞ、元生徒会副会長のきさまが裏で糸をひいていたにちがいないのだっ」
「黒幕？　誰が？」
「里見くん、君の目は飯塚くんに恐怖を与えているようだが」

「それは誤解だよ。ところで飯塚、さっきから白組と青組の関係について細かい考察を重ねていたようだけど、君の赤組はそろそろ応援合戦の整列にはいっているんじゃないのかな」
「うっ……」
「おお、そういや飯塚くんの組は赤！　だったんだ。最下位！　の赤！　だったのかー、俺はまたてっきり青組だからこそのクレームだと思っていたが。いやあ、失礼、失礼」
「うぬぬぬ……」
「体育委員長のクラスをまちがえるなんて、本当に失礼だな、西城。総務会の連絡を他人任せにしているからだよ」
「里見くん、たしか君は『元』副会長だったはずだが、どーしてそんなに内情に詳しいのだろうか」
「うぬぬぬぬ……こちらを無視して雑談を進めるなっ」
「飯塚先輩っ！　クラブリレー終わりましたよっ！　応援団みんな待ってますよ！　……とセリフひとつだけで消えるのは一年二組の麻生和浩でしたっ。あーもーっ、『イズミ幻戦記』にも出てますっ」
「多忙で大変だなあ、飯塚くん。頑張ってきたまえ」
「我々も本部から見物させてもらうよ。楽しみだね」
「ううっ……やむをえない、よし、勝負は預けた。これで逃げられると思うなよ、西城っ！

皆の者、つづけーっ」

「さらばだ。もう帰ってこないでいいぞー。……そして、やれやれと胸をなでおろす西城であった」

「面白い奴だね、彼は」

「君が言うと全然そういうふうに聞こえんが」

「考えすぎだよ。あとで麻生に感謝しておくんだな。じゃあ俺は来客を待たせてるから、これで」

「これでって、おい、君は何をしにきたんだ？　相変わらず、つれないなー。おお、青組の麻生くんをたらしこんだのはいったいどこの誰であったのか……おや？」

「京平ーっ！　てめえ何やってんだよ、こんなとこでっ！　さっさと出ろ、馬鹿っ！」

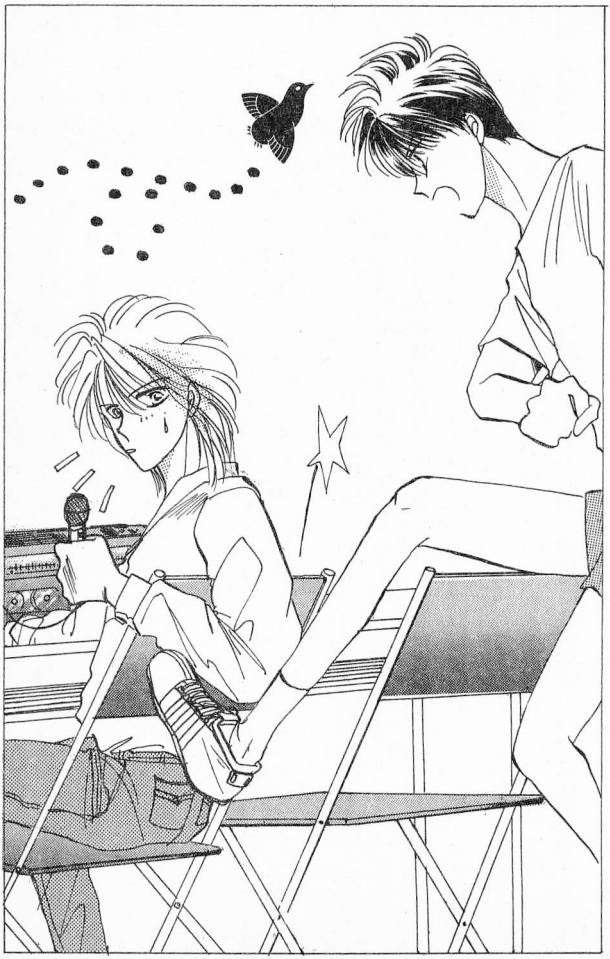
「ま、真砂っ。ご、ごめんっ僕がついていながらっ」

だーっ、なーにをするんだっ。もうあとわずかでこの京平さんが生徒会の不正を暴いていたというのにっ。

「生徒会の不正なんか日常茶飯事だろっ」

「あ、そういえばそっか……」

ちょっと待ちたまえよ、君たち、そこで納得していていいのか。しょせん伝統ある名門校に正義の二文字はないのかっ。ええい腹黒い白組なんぞに負けてなるものか、我らの青組をなん



としてでも勝たせてやろうではないか。立て若人、燃えろ青春、ふりむくな君は美しい、そして私はかっこいい、と、とんとん拍子に盛りあがってこその体育祭だろうが！　こらーっ。

はー……だめですねー。誰も聞いていませんね。あれっ、そういやザザ1号はどこに消えたんだろう。あれーっ……

ザーッ。

……なスタートで弾丸のごとくかっとんだあっ！　おおお、走る走る、びゅわーんと走る青い光の超特急、どこまでいけば気が済むのか、速い、速い、怒濤の大進撃だ！

先頭を行く白組アンカーは白薔薇の貴公子・西城敦！　追うは青組アンカー、ブルーインパルス・早水真砂！　赤組、緑組はそれなりに勝手にやってくれ。

うーむやはり第一走者がバトンタッチ直前にコケたのが尾をひいている青組、どうしても先行する白組との差は、なかなか縮まりませんっ。二百メートルを走る間に、なんとか追いついてほしい、いや追いつけ、追いつかないはずがない、絶対に追いつく！　しかし西城とんでもなく速い！

ここで勝てば青組、逆転優勝っ。負けたらまぬけっ。なんと非情な勝負の世界であろうか。それが男のど根性なのだなっ。

かっとばす西城、その姿はあたかもハーレーダビッドソンだあっ。誰かあいつをとめなさい！　頑張れ真砂、この俺がついてるぞ、コケたら許さんぞ、風と同化し自然の声を聞くのだ、免許皆伝の道は遠いっ。

あーっ、百メートルをまわったところで両者近づいた、近づいた、うおお、ザザ1号、今こそ西城の足ひっかけて倒すのだ。ばかものーっ。

おっ、真砂スパート！　出たっ、出た出たっ、まさに彗星、まさにサラブレッド、もはや優勝はこっちのものか!?　西城ねばる！　西城まだ余裕！　すさまじい競り合い！

ゴールが見えます！　ゴールが見えてまいりました！　こちらの声もかれてまいりました！　もー、どーでもよくなってまいりました！　なんでもいいから走ってろ、真砂っ。ゴールだー、ゴールだー、うおー突っこんだー、果たして勝者は!?　勝者は……

ザーッ。

「ったく、さっきからなにやってんだよ。え？　優亜ちゃんに体育祭の実況中継を送る？」
「あ、ねえねえ真砂くん、俺、マイク持つと人格変わるって本当？　……ザザ太郎、なに暗くなってんの」
「……」
「おい、京平、このテープ本気でお嬢さんに送る気かよー？　正気疑われるぞ、おまえ！」

ザーッ。

（結局、このテープは闇に葬り去られたという話である……）

File 3
ピアノ・ソング

1

オルゴールが欲しかったの。

だからつまり最初は、オルゴール人形が欲しかったの。

どういうわけか私はそのころ、世の中にCDプレーヤーというものがあるなんて知らなかったもんだから（そりゃまあ、生まれてからまだ七年しかたってなかったわけだし。なんといっても私の住んでるところが普通じゃなかったし）、私が眠るまで自動的に歌いつづけてくれる機械っていったらオルゴールしか知らなかったの。

だけどスクリプトAIとかソーラー・サーマルとかニューロ・セラミックスとかセンサー・フュージョン・コントロール・ネットワークとか、そっち方向のことならだいたいわかるのに、オルゴールの作り方ってのはどうもよくわからなかったの。

その一年前にパパと二人で作った『Z・E・H・R・O』はカンペキな出来だったのよね。もう、あの子に加えるべき要素は何もなかった。だからこれ以上ゼロと同じタイプの子を作るつもりもなかったの。

ただ、子守歌を聞きたかっただけで。
そして、気がついたら私たちは出会っていた。それだけ。
いつまでも、どこにも行かないで、ずっと近くで歌っていてくれたら。
X・A・Z・S・A……

2

来てしまったわ。
私、浅見優亜、当年とって十一歳、はっきり言って大天才だけど、とうとう生まれてはじめて一人っきりで『お出かけ』なんぞを決行してしまったわ。
どこかに移動するときは『たくしー』を使えばいいんだってことは大常識だからゼロにしつこく注意されるまでもなかった（この優亜にむかって三回も同じことを言ったわよ、あの子は！　まったくもーっ、心配性にもほどがあるっていうのよ！）けど、問題は何をどうすれば『たくしー』にめぐりあえるかどうかってとこだったのよね。
あ、言い遅れたけど『子供部屋』もとい私の『保護』されてる研究所はカスミガセキとかいう場所にある。科学技術庁とかいう建物の地下を五百メートルくらい降りた位置にあるんだって、ゼロが言ってたからそうなんだろう。（ゼロって頼りになるんだわ、やっぱり……）

まあ、優亜の生活区域は研究所のごく一部のはずだから、研究所そのものはもっとあちこちの土地にまたがって存在するのよね、きっと。でも、優亜は——じゃなかった、あーまたお子様っぽいクセが出ちゃった、やだわ、『私は』だわよ、わ・た・し——うん、私は、私専用の操作室をちょっと改造して緊急脱出用エレベータをこっそり動かせるようにして、それで出てきたから、やっぱりここはカスミガセキだと思うのよ。

だからつまり要するにここはカスミガセキよっ！

「……でもここがカスミガセキだってわかってるからといって、今後に残された問題はあんまし変わらない気がするわ……」

あーあ、優亜ってばお利口さん。可憐なる容姿と弱冠十一歳の年齢に似合わぬ、実に冷静かつ客観的な判断である。

「と、自己を称賛しても、空しいだけだというのにっ」

……これってば、もしかしてヒトリツッコミヒトリボケという現象かもしれないわ。

きれいに舗装された歩道をスーツ姿のおっさんたちが足早に行きすぎてゆく。夕方にテレビのニュース番組で見る映像とよく似てる。……ってことは、あの人たちはおそらく『サラリーマン』なんだろーけど……。

「セイジカとかコウムインとかケイジって可能性も捨てがたいわね」

電話ボックスの中にしゃがみこんで、私はそう呟いた。あ、なんで電話ボックスの中なのか

っていうと、緊急脱出用エレベータの出口がここだからだったりする（床がひらくのよ、ぱかっと。出てくるとき通行人に見られちゃった。あー、恥ずかしかったっ！）。

とにかくここから出なきゃ。

思ったより寒いんだわ。そうよね、もうすぐ十二月だし。

「優亜っ！」

え。

ガラスのドアを押しあけようとして、だけどどこから押したらいいのか今いちわからなくてガタガタやってたら、叱るような、驚いたみたいな、どこかせっぱつまって、そして必死な叫び声が聞こえた。

誰？

ガラスの遠くから。駆けてくる影。

やだ。知らない人……？

長いコートのすそをひるがえして、洗いざらしのジーンズで。すごくまっすぐな、意志の強い目をして。風をきるような走り方をして。

「優亜!?」

息もきらさないで（それはそうだわ、呼吸する必要ないんだし）、そのくせ今にもぶっ倒れそうにショック受けた表情で（睨まなくたっていいじゃないのよっ！）ガラスごしに、優亜の

目の前に、座りこむみたいに両膝ついて。
なんでそんな顔してるの。
知らない人……みたい。違う人かもしれないって、思っちゃうじゃないの。
「び……びっくりさせないでくださいっ！」
電話ボックスに向かって怒鳴らなくたって。
行きすぎるサラリーマンたちがじろじろ見てるのがわかる。
「いきなり一人で護衛もつけずに出てくるなんてっ！　もう少し自分の立場を考えなくちゃ駄目ですよっ！」
ゆ……優亜に指図したわねっ。
だいたい何なのよ、そっちこそ！　少し背が伸びたんじゃないの。痩せたんじゃないの。髪の色調が変わったんじゃないの。そんなセーター着てるとこ初めて見たわよ、誰にもらったのよっ！
「……ザザ」
ああ、優亜のほうこそどうかしてるんだわ。
「優亜？」
心配そうに両目を見開いて訊いてくるのは……。
背なんか伸びるはずない。痩せたりするはずない。いつも優亜と目の高さを合わせるために

両膝をついて、それから話しかけてくるの。ずっと変わらないの。
「なんで知ってるのよ、優亜がここにいること」
ちょっとむくれた感じのセリフになっちゃったのは、別に優亜の——私のせいじゃない。
「ゼロが教えてくれました。間に合ってよかったです」
そんなことだろうと思ったわよっ。
「だからって、呼びもしないのに飛んでこなくたっていいでしょっ。優亜だって、ちゃんと一人で『たくしー』にくらい乗れますっ、失礼よっ！」
「……優亜」
あ、また。
どうしてそこでそんな顔をするの。悲しいのか怒ったのかわからない、つかめない、遠くて不思議な表情になるの。
「優亜」
ザザの声。私の好きな、優しい声。
「何か、あったんですか？　……どうして、一人で出てきたんですか？」
「こんな寒いところでいつまでガラスごしに喋ってるのよっ」
思いっきり話をそらしてやる。まるで私が来たらいけなかったみたいな言い方をするから。
腹が立つ。

それにしてもこのドア強情だわっ。

重たいガラスのドアを、私は力まかせに押しまくる。と、ザザが言った。

「優亜、そっちは壁です。ドアは、こっちの金具がついてるほうなんです」

むか。

3

「……あらら。ようこそお越しで」

もさもさ頭で、今起きたばっかしって様子の京平ばか——じゃなかった、しまった、どうも優亜ってば正直で困るわ——えーと、早水京平氏が私たちを迎えた。なんだ……あの面倒見のいい『真砂おにーさん』はいないんだわ。ガッコウかしら。

「どっ、どうしたんですか、京平さん……!?」

やたら愕然としてザザが尋ねる。何なのよ、その反応は。

「まだ十二時前でしょ!? 一人で起きたんですか!? どこか体の具合でもおかしいんじゃありませんか!?」

「……そーゆーことは自分が何をぶちまかしながら出ていったかを、よーく確認してから言いなさいね」

しらじらと京平氏。

「え？」

よくわからないままザザは早水家の玄関から奥へ進んでいく。勝手知ったるってやつで、優亜もそのあとに続いて——そしたら。

一階の廊下からサンルームに入るところで、なんだか変だなって感じがして、私はふりむいた。この部屋の入り口って、ここだったかしら。

……違うってば。

「うわ……」

ぽっかりと壁をぶち砕いた穴を見つめて、ザザが呟いた。

「きょ……京平さん、改装工事でも始める気なんですか？」

「……だったらよかったなーと思ってはいる今日このごろ」

要するにダイニングの電話で事態を知ったザザは、できるかぎりの最短距離で玄関に向かおうとしたらしくて、その間に犠牲になった壁は計三枚ということだった。ダイニングテーブルの位置から見ると、その破壊工程がまっすぐ見てとれるから凄い。……しかも本人に自覚がないし。

「惰眠を貪っておった京平くんの枕の真下で大音響がとどろいたと思ったら、ごていねいにド

アロック解除アラームまで鳴らして、おまえさん彗星のごとくかっとんでいったんでしょーが」

「……す、すみませんっ……なんだか頭がカッとしちゃってて……」

ザザはひたすら恐縮してる。優亜としても、コメントのしようがないわ、これは。

だって、壁を三枚も破って、アオヤマからカスミガセキまで全速力で走りとおして、そんな凄じい勢いでやってきておいて、そのくせ優亜に会うなり怒鳴りつけたのよ、この子はっ！

「まあまあ、そこでそんなに落ちこまずとも」

ぽんぽん、とザザの肩をたたいて京平ばかが慰める。

「生活には多少の変化が必要ということで。しばらくこのままにしときましょ、この壁は」

「はあ……あの、いいんですか？」

「朝メシ作ってくれたら、真砂くんにも口添えしてしんぜようぞ」

「あああ、本当だっ、こんなの真砂くんに見せたらっ……！」

ひとしきり頭を抱えてたと思ったら、朝ごはん作りますっ、と言いおいてザザはキッチンへ姿を消した。……優亜のこと忘れてるわねっ、あの子はっ!!

「あのクールな黒ずくめ兄ちゃんは、今日はお役御免か？」

テーブルの、私の真向かいの席に腰をおろして、京平がそう訊いてきた。

「ゼロは定期整備に入ってるのよ」

これは嘘。

「なるほど」

意外なくらいあっさりと、京平はそれだけ答える。

……そうだわ、私が今いち京平のこと気に入らないのって、この人のこういう所なのよ。ザザとか真砂おにーさんが相手のときと、優亜が相手のときと、態度がかなり、というより全然、違うみたいなんだものっ。

そうよ、そもそも。

たたき起こされましたって顔してるけど、今の時点でちゃんとまともな服装してるし、この人。まともというか……一応、開襟シャツにジーンズっていう、パジャマ以外のものを着てるし。

前にここで私とゼロが居座ったとき——つまり、ザザが『脱走』したときの——この人っていえば、日中はひたすら寝てて、夕方にボロ布みたいな、くたびれ果てた顔で起きてきて、それで夜になったら一晩中でかけっぱなしという、会話のしようもない生活してたもの。あの頃にくらべたら、今の寝不足状態なんて、まるっきりの問題外だと思うわよ、優亜はっ。

……変わったの？

この人、少し、変わったのかもしれない。

「なんで」

なんで黙ってるのよ。……と言いたくて。
「どうして来たのかって、訊かないの？」
「そりゃ、お嬢が来たいから来たんでしょ」
せっかく話題を出してやったのに、京平ばかは一言で片づける。ばかっ!!
やっぱりダメだわ、『おじさん』とは話が合わないのよ。私はそそくさと椅子をおりて、キッチンへと移動した。
はっ。そういえばザザってば……朝ごはん作るなんて言って……料理なんかできやしないくせにっ……！
「あ、優亜」
フライパン片手に、ザザがふりむいた。
笑顔……？
「優亜もまだ、お昼ごはんは食べてないでしょう？　せっかくだから一緒にしちゃいましょうね。真砂くん直伝のオムレツ作りますから」
ザ、ザ……？
いつからそんな事できるようになったの。
「……ザザ」
「何ですか？」



いつからそんな笑い方するようになったの。
「ねえ、ザザ、少し背が伸びてない？　痩せてない？　優亜に嘘ついたって駄目よっ！」
「……え？」
片手で卵のカラを割ってボールに中身を落とす。すごく簡単に。た……卵なんて優亜は割ったこともないっ。
「どうして僕が？　背が伸びたっていうなら、優亜のほうでしょう？」
マジメな顔でザザが言う。……え、私？
「半年くらいしか経ってないのに……」
コンロのほうに向きなおって、こっちには背を向けて、ザザは続ける。
「優亜はどんどん大きくなる。見るたびに、びっくりしてます。僕はね」
「……」
なんでそんなこと言うの。
だって。後ろ姿。ザザの背中。
違うんだもの。
なんだか違うんだもの。
「そんな話、したくないわっ！」
いきなり、かんしゃくを起こしたみたいに怒鳴りつけてた。ふっ、とザザが見返った。

「そんなもの、優亜は食べたくないわっ！　私はでかけますっ！　ついてきたら許さないから！　絶対に許さないから!!　いいですね、これは命令ですっ!!」

もう、何も考えてられない。思いきり気持ちをたたきつけて、そのまま私はそこを駆け出した——はずだった。

駆け出そうと、した、ら。

「優亜、駄目です」

「ザザっ！　そこをどきなさいっ！　あたしの命令が聞けないのっ!?」

キッチンの出口をふさがれて、思わず優亜は泣きそうになって叫んでる。

「駄目です」

そんな目で見ないでよ……!!

静かなのに穏やかなのに何を考えてるかわかんない悲しそうな苦しそうな切なそうな心を押し潰すような……そんな目をしないでよ！　立ちはだかれたら絶対に絶対に力ずくじゃ通れないことわかってるのに！

「優亜を一人にはできません。優亜を守るのは僕の……」

抑えた調子で言いかけて、ザザはそこで少し黙りこむ。

「……僕の責任ですから」

ぐらっと胸のあたりが煮えた気がした。

ボクノ『セキニン』デスカラ。
アタシノ『メイレイ』ガキケナイノ。
ドウシテ、ヒトリデ、デテキタンデスカ。
ドウシテ、ソンナメヲ、ソンナカオヲスルノ。
わかんない。なんだかわかんないけど腹が立つわ……！
ザザは間違ってない。間違ってない。セキニン？　そんなこと知ってる。優亜だって知ってる。だって優亜がそう教えたんだもの！
だけど。
だって、そんなのってないじゃないの……そんなのって、腹が立つじゃないのっ!!
「嫌いだわっ……」
もう知らないっ。
「ザザなんか嫌いだわっ！　大嫌いよっ!!」

その瞬間。
ふと、ザザが……

笑ったの？

コンニチハ。
ハジメマシテ、ユア。X・A・Z・S・A、ザ・ザ、デス。
ユア。アナタガボクヲ、スキニナルトイイノダケレド。
ボクハ、ズット、アナタノタメニ――

よく、見えなかった。
私が怒鳴りつけて二秒半くらいしてから、だったと思う。
がたん、と鈍い音が床で響いた。やわらかい髪が宙を泳いだ。
目の前で。とても自然に。
まるで糸が切れたみたいに。まるで眠りこむときみたいに。
両膝をついて、そして肩を落下させて、たった今まで普通に動いて喋っていた『ザザ』は
――そのとき、もう何も語らない人形となって私の前に横たわっていた――。

4

それからしばらくのことは、あんまり記憶に残っていない。

結論としては、京平がその場にいてくれてものすごく助かったってことに尽きるらしくて。小柄なくせにＸＡＺＳＡってば重量だけは七十四・二キロもある。優亜一人じゃ持ちあげようもない。

「機関停止」

私が喋ってる。優亜が、そう言っている。

「人間で言ったら心臓停止の状態と同じ。全部の機能がストップして」

「エネルギー不足、とか？」

訊いたのは誰？　京平？

「ＸＡＺＳＡは光充電だもの、関係ないわ」

どこ？

どこで喋ってるの？

「故障なんかじゃないの。壊れてなんかいないの」

ＸＡＺＳＡのことなら全部わかるの。だって私がＸＡＺＳＡを創ったんだから。

あの子のことなら、何もかも知ってる、から。

「だから修理も部品交換もできない……」

やだ。

どうしちゃったの、優亜。

気がついたら周りの景色が変わっていた。
今まで、いったい何を見て喋ってたのかしら、馬鹿。
もうキッチンじゃなかった。私はリビングの床に直接すわりこんでいて、そして。
XA……『ザザ』。
ソファの上。ひどく静かに目を閉じて眠ってる——だって眠ってるとしか見えない——姿。
どうして？
顔をあげたら、すぐ横の椅子にかけて、京平がじっとこっちを見ていた。
「どうして……？」
優亜は口を開いてみる。京平に尋ねてみる。
「ザザ、治せないのよ」
こんなに、すごく平気に声が出る。
「原因もわからないし」
「……うん」
「蓄積データだって、保存できるのは五十時間だけなんだから。だいたい、バックアップが正常に働いてるのかどうかもわからないんだから」
「……うん」

「このままじゃ、まるで死んじゃったみたいだわ」
「そうだね」
一言ずつに、京平が短く応える。
冷たいのかしら。この人、ものすごく冷たいんじゃないのかしら。全然、驚きもせず慌てもしない、いつもどおりの調子でしか話さないで。
だけど、いちばん冷えきってるのは私自身のほうだと思う。
「どうして……？」
ザザ。何を考えたの。とざされた瞼の、ゆるく流れた髪の、その内側に何があるかなら私だって知ってる。けど。
「ザザ、自分を止めてしまったのに……私、どうしてこんなになんでもないのかしら？」
「……」
私が尋ねたら、京平は少しだけ両目を細めた。そして、ぽんぽん、と大きな掌で私の頭を撫でてみせた。
「そんなことはないよ」
低い声。
「さっきからずっと泣いてるよ、お嬢は」
え……？

言われて初めて、私は自分の手を見た。それから手の甲で顔をごしごし拭ってみた。
……こんなの涙じゃないわ。気がつかないで流れてるなんて、そんなの涙なんかじゃないわ。

5

「冗談やめてくれよ」
帰ってくるなりそう呻いた真砂おにーさんは、それでも優亜のためにホットココアを作ってくれた。相変わらずいい人だと思う。
「京平ーっ！」
どたどたと階段を上っておにーさんは二階へ向かう。ちょうど、おにーさんが帰ってくるのと入れ替わるみたいにして、京平は二階の部屋に姿を消してしまったから。
「京平っ！　いったい何なんだよ、あれっ！　おまえ、一緒についてたんだろっ！　なんとか言えっ!!」
ドアを叩く音と、叱りつけるような声。あの人、京平が相手だと遠慮ってものがないんだわ。
巨大サイズのマグカップを抱えて、優亜はテーブルでぼんやりしていた。

バックアップの期限は五十時間。

これまでの蓄積データ――それはつまりザザの『人格』に直結しているわけで――は、それ以上の時間がすぎたら真っ白の、まだ何も経験していない、生まれたばかりの状態に戻ってしまう。

要するに、今までの『ザザ』はいなくなって、別のザザになっちゃうってこと。

もちろん、ザザ本体の機関が停止しちゃっても、別の機関に接続して無理やりエネルギー循環を回復すれば、少なくともデータは守られる。そのためにはザザを研究所に連れもどさなきゃいけないけど……。

でなければ、最後の手段で、切り札を出すってこともある……けど……。

「え、壁？　壁が何なんだよ、知らねえよ、今は関係ないだろ！　わかってて話そらすなよっ、ばかやろうっ!!」

なんだか上はすごいことになってる。

しばらく真砂おにーさんが粘ったけど、とうとう京平は出てこなかったらしい。憤然と――というより、やりきれない様子で、おにーさんは階下へ戻ってきた。

「優亜ちゃん、ごめんね、あいつ駄目だ」

無造作に髪をかきあげながら、まず優亜に謝ったりする。平気そうにしてるけど、本当はイライラしてるのがよくわかる。

それから、何を思ったかおにーさんは再び二階へ上がっていって、そして毛布を一枚かかえておりてきた。……あ。

リビングのソファで眠ってるザザのために。

「ったく……人の意表をつきやがって」

本当にあたりまえの、何も迷ってない手つきで、おにーさんは毛布を広げる。ザザに……かけてやる。

ザザ。機械人間（マシノイド）のＸＡＺＳＡ。熱も冷気も苦にならない、眠らないロボット。

どうかしてる。京平ばかも真砂おにーさんも、どうかしちゃってるとしか思えない。

……でも、そんなの、今さらなんだわ。きっと優亜だってどうかしちゃってるんだわ。

ＸＡＺＳＡ。

優亜が、優亜のためだけに創ったの。

オルゴールが欲しくて。

ザザ……。

ユア。

サビシイカオヲシナイデ。

ボクハ、ゼロノヨウニツヨクハナイケレド……。

ユアハヒトリジャナイ。ボクガヒトリニシナイ。ボクガユアヲカナシミカラマモル。ユア、ボクハアナタノ『トモダチ』ニナルカラ。

イツモイツモ、ユアノシアワセヲカンガエテイル。

嘘つき。

ザザも、そして優亜も。

最初は、優亜がなにもかもを教えてあげなきゃならなかった。それで追いつかなくなったら、今度はゼロが教師になってあの子にもっとたくさんのことを教えたんだわ。子供だった。優亜よりずっと。背丈だけははじめから優亜を追いこしていたけど、ザザは『子供』で『弟』で『生徒』だった。

研究所には大人しかいなくて、そしてゼロはパパの代理みたいなものだったから、『子供』は優亜とザザの二人きりだった。そうしたら、いつの間にか、ザザは優亜の立派な『遊び相手』になっていた。もう、優亜からしてやれることはほとんどなかった。一緒に遊んで、一緒に映画をみて、眠るときには必ずそばについていてくれた。優亜のためになんでもしてくれた。

《優亜、僕はここを離れないから》

ずっと一緒にいる。一人で置いていったりしない。あなたのことを一人にしない。僕はあなたの『友達』だから。

——私が創った、私のための、たった一人のトモダチ。

気がついたら、何かが変わっていた。ザザはオルゴールなんかじゃなかった。

ピアノの音が聞こえる。

それはひとつの曲を弾いているのではなくて、思いついたメロディーのかけらを気まぐれにつなぎあわせたような、そんなピアノ。

誰？

「京平……？」

天井のほうを見上げて、真砂おにーさんが呟いた。

二階の客間にアップライトピアノがあったのは憶えている。でもあの人、ギターを弾く人じゃなかったのかしら。

「京平なの？」

私が尋ねると、真砂おにーさんはこっちを見て、それから頷いてみせた。

「うん、あいつ……この頃ようやく、少しずつだけど、楽器、触るようになってんだよ」

「ギターじゃないの？」

別に、すごく大きな興味があってそんなことを訊いたわけじゃない。
ただ、口を動かす材料が欲しかっただけで。
だけど、私がそう言った瞬間、少しだけおにーさんは悲しそうな、でもそれを抑えつける様子で顔をしかめて、そして椅子にかけた私の顔をのぞきこむように、膝を折ってしゃがみこんでみせた。
「優亜ちゃん……あのさ、これはお願いなんだ」
「え？」
おにーさん。面倒見のいい、優しい人。
……けど、それだけじゃないんだわ。
激しい。とても強い意志。それを伝える表情で。
「ザザをなんとかしてやってくれよ……時間をかけてもいい、金がかかってもいい、ちゃんと治してやってくれ！　でないと京平、また昔に逆戻りしちまうっ!!」
京平が？
昔？　昔って何？
「でも……」
私は首を横に振る。でも、治せない。直せない。ザザは、『壊れて』なんかいないのだもの。
優亜は迷ってる。今、本当はすごく迷っている。

ゼロを呼んで、ザザを研究所へ連れもどしたほうがいい。そして、高圧電流でも何でも、あらゆるショックを与えて、機関を再作動させるよう手を尽くしたほうがいい。それが駄目なら、一から作りなおすしかない。

きっとゼロなら、そんなふうに言うんだわ。

でも、優亜はなぜか……そんなことはやりたくない。どうしてもいやだから！

「……あ」

ピアノの調子が変わった。

はじめはゆっくりと、それからだんだんテンポを速めて、やがてひとつの曲が流れだす。

……なんで。

喉の奥から、よくわからない、熱みたいなものが上ってくる。

京平の馬鹿。なんでこんな曲。

……知っているメロディーだった。

『エリーゼのために』。

『エリーゼ』がいい。でも、エリーゼのためにじゃいやなの。エリーゼじゃないの。優亜のためがいい。

そうわがままを言ったら、ザザは困ったように笑って。

《優亜、これはピアノ曲だから、歌にすると少し違う曲になっちゃいますよ》

――優亜のためならいいの！

きれいな曲だと思ったから。優しくて、なのに情熱的で。

それにザザは、そんじょそこらの楽器にくらべたらずっと優秀だから。

《じゃあ、歌詞は適当につけましょうか。あ、そうだ、優亜、こういうのは？　――優亜はおりこう、かわいい、すてきだ、好きだよ……で、くりかえし。エンドレスリピート》

――ふざけてるわっ!!　メロディーにものってないし！

《優亜のためだから、いいんですよ》

メロディーにのせてひたすら辞書を読んでみたり、その日テレビでみたドラマの台詞をまるまる歌詞にあてはめてみたり、私たちはさんざんくだらない遊びをやっては笑いころげてた。

――ベートーベンに失礼よねっ。違うわ、エリーゼに失礼よっ。

《でも、ベートーベン本人が書いたのは『テレーゼのために』なんでしょう？　それが誰かの読みまちがいで『エリーゼ』になったんだから、今さら『優亜のために』になったからって、たいしたことないと思います、僕は》

子守歌のはずが、そんな談義にまで発展してしまって、そして『お寝みの時間はすぎましたよ』ってゼロに叱られるの。いつもそうだったの。楽しかった。楽しかった。楽しかった……！

私は足音をたてずに二階へ上り、すべすべの廊下をそっと通って、客間のドアの前までたどりつく。

淡々としたメロディーが、さっきから続いている。楽譜のぶんより多くくりかえしている。クライマックスを避けてるみたいに。

京平。

『砂夜子が病気なの、前からちゃんとわかってたんだ』

真砂おにーさんが話してくれた。

『だけど治るはずだった。快方に向かってた。結婚してからは、ますます元気になって、だからまわりはみんな安心してた。……それが一晩で急に悪化した。京平はそのときツアー中で、帰ってこれなくて……』

東京へ戻ってきたときには、もう手遅れだった。

病室にたどりついた京平に、俺は思わず言っちまったんだ。——てめえは砂夜子よりギターのほうが大事だったのか!?

『俺はその一言で、京平を殺したと思う』

それはもう取り消しようのない一言。

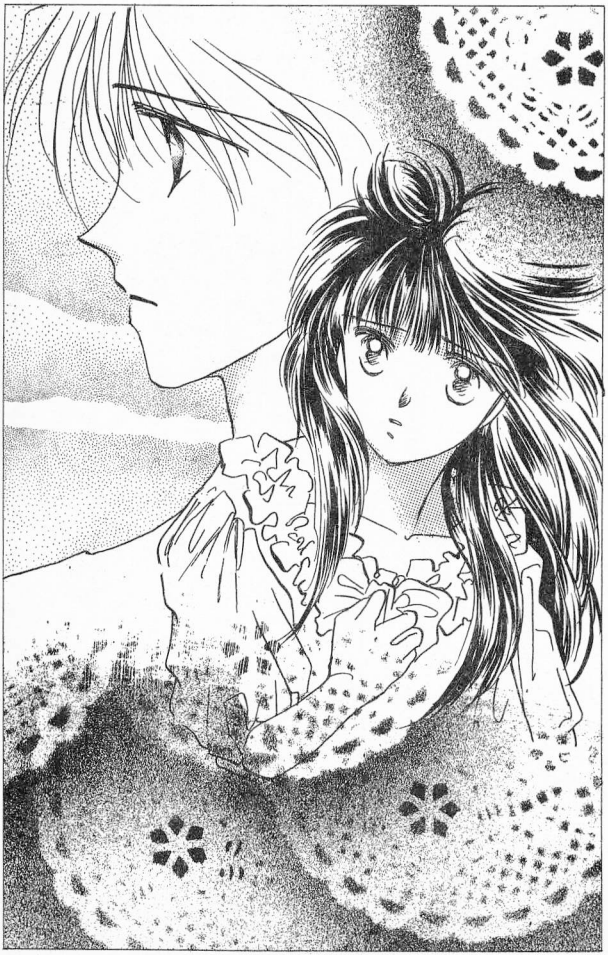
ギターでしか自分を語れない人間からギターを奪い、愛する者を失わせたら、たとえ生きて

いても、呼吸があり心臓が動いていても、そこに魂の存在する余地はない。それは現実の死よりも、さらに残酷な死。

『人間ってのは、たったひとつの言葉で人を殺すことができるんだ』

ユア。ナカナイデ、ユア。ゴメンナサイ。
ゴメンナサイ、ユア。アナタガスキデス。
アナタガスキデス。
ユアダケガ、ダイスキデス。
ダカラボクハ……ユアトオナジ……ニンゲンニ、ナロウトオモッテ……

いつからか笑わなくなった、ザザ。
一緒にいるのに、遠くを見ることが多くなった。話しかけると、嬉しいのか悲しいのかつかめない瞳をして、問われたことにしか答えないようにして。
何がつらいのか、何が不満なのか、ずっと知りたくて、でも優亜からは訊けなかった。……こわくて。
《優亜は、毎日が変わっていく。……そうやって、きっと、いつか大人になるんですね》
——まだ十一じゃないの。やめて。大人になんか別になりたくない。



《三年たてば十四だし、もう三年たてば十七でしょう。それに優亜は賢い人だから、その頃にはもう立派な大人ですね》

その時は、ザザがどうしてそんなことを気にするのかわからなかったけれど、ただ確かにひどく苦しそうに見えて、なんとかしてあげたくて、それでもどうすることもできずにいたら、とうとうあの晩、ザザは研究所から姿を消してしまったのだった。

きっと優亜のことを嫌いになってしまったんだ。

そう思った。泣いて泣いて泣き暮らした。三週間後、見かねたゼロがついに優亜を地上に連れだしてくれた。でも、それより早く、ザザは京平と知り合ってしまっていたんだわ。

曲調が激しくなる。テンポが速くなる。連続する低音が際立つ。

閉ざされた扉のむこう。

揺さぶるような旋律から、すべりおりる音階に変化して……。

え?

ピアノの音が、そこで不意に止まった。

まだ全然……ラストの三歩くらいは手前なのに。不自然な跡切れかた。

京平が出てくる? ドアのまん前に座りこんでいるのは良くないかもしれない。反射的に立ちあがろうとしたら。

「ばーか」
苦笑まじりの、かすかな、そしてどこか震えた呟きが聞こえた。
部屋の中から。京平？　……誰に？
「惚れた女にフラれたくらいで世界じゅう真っ暗にしやがって……。俺は情けないぞ、ばかもの」

ナカナイデ、ユア。

京平も泣いているの？　泣いていたの？　ずっと長い間、泣きつづけていたの!?
涸れてしまった涙のかわりに、どうやって悲しみを外へ吐きだしたらいいか、わからなくなっているの？
優亜がつくった、優亜のためだけの……『人形』……ザザ。
……だけどもう違うんだわ。
《人間になるために》
ザザ。優亜はよくわかってなかった。人間になるってどういう意味か。
京平のところにいることでザザの何が変わるのか、わからずにいた。
だけど——人は変わる。時間の中で、人は変わる。一人ではなくて。誰かを思って、誰かに

思われて、誰かに変えられて、誰かを変える。

たったひとつの出会いで、自分を変えていくことができる。

優亜とザザは……どうやったらふたりを変えられるのかわからなかった。あの小さな子供部屋で。だって、私たちはもう変わりはじめていたのに、それ以上どうしようもなかったんだもの！

「京平！」

優亜は大ばかだわ！

「京平！　聞いてよ！」

床に座りこんだまんま、私は怒鳴った。声がつぶれそうなくらい。

「聞いてよっ……！」

ふりむくのは簡単なのよ。

昔を懐かしむのはいつでもできるのよ。

でも『今』はこわかったの。『今』のザザと『今』の優亜を見るのはこわかったの！　だから言えなかった。だから嘘をついたの。とりかえしのつかない、ザザを殺すことができるほどの、たったひとつの嘘を。

「ザザが優亜から離れていったのは、優亜ともう一度、出会うためだわ！　もう一度だけじゃない、何度も何度も、新しいザザになって新しい優亜に会うためだわ！　ねえ、そうでしょ

う!?」

さよならを通りぬける勇気があれば、もう一度出会える。そういうこと?

「京平ってば!」

泣く、と思う前に涙が溢れていた。ぐらぐらする。頭の芯が痛くなりそうで。

客間のドアが静かに開いた。

「優亜は、ザザが好きだわ」

現れた京平の姿も、かすんでよく見えない。

「ザザが好きだわ! 大好き! いちばん好き!! 責任とか命令とか、そんなんで一緒にいたくない!! そうじゃなくて、優亜のことを好きでいてほしいの! 子供で、普通じゃなくて、ザザを創ったりとか、そういうの関係ない、『優亜』のことを好きでいてほしいの! それくらい大好き!! 昔のザザも、今のザザも、これからのザザもみんな、大好きなの!! 誰よりも大好きでいるのっ……!!」

それは簡単な、簡単すぎる、あたりまえのこと。

だけどきっと遅すぎる——。

こんなこと今ごろ気がついても、もうザザには聞こえてないんだもの。

ふわり。

前髪を、優しい指でかきあげられる。しゃがみこんで京平が。

「お嬢」
軽い呼び方。でも奥底では真剣な響き。
「ガキのたわごとなんかじゃないよ、お嬢が言ってるのは。お嬢はいい子だ。奴が壁ぶちこわしてまで会いにいくだけのことはある。……この京平さんが保証してやる」

6

方法は、あるかもしれない。
あるかもしれない。
「本当は、ザザを研究所に連れて戻らなきゃいけないと思うの」
京平と真砂おにーさんの二人に、優亜は説明する。
「優亜のラボには、ザザのための設備が全部そろえてあるから。でも、一度あそこに戻ったら、今度はいつ地上に出てこられるかわからない。おまけに今度こそザザの脱走がバレちゃうかもしれない。そしたら、下手したらザザは二度とここに来れなくなる。そんなのいやだわ」
「でも、いざとなったらそれもやむをえないだろ」
すかさず真砂おにーさんが言う。
「少なくともザザは、優亜ちゃんとは一緒にいられるんだろ。俺たちだって……完全に死んじ

まうよりは、会えなくても生きてるほうがずっといいっ！　そんなのあたりまえだろ!?」

「忘れちゃうかもしれないの。記憶の保存、五十時間しかきかないんだから。うまくエネルギー循環ができなかったら、仮に新しいザザを作ったにしても、ここで暮らしたことなんか全然おぼえてない、別のザザになっちゃうかもしれない」

「関係ねえよ！　中身がザザなら、また一からやりなおせばすむことじゃないか！」

真砂おにーさんってすごい人だ。気持ちがまっすぐで、すごくいい人だわ。京平が今みたいな京平になれたのも、きっとこの人がいたおかげだと思う。

でも……。

なんでなんだろう。おにーさんは正しいと思う。賛成したいと思う。今すぐにでもここを駆けだして、研究所にいって全部の手段を総動員してザザをなんとかしてやりたいと思う。……なのに、優亜は動けないでいる。

それはやりたくない。

胸の中で、ズキズキする気持ち。——やりたくないの。後悔しそうなの！

なんで!?　ザザをどうしたいの、優亜は!?

「お嬢」

黙ってた京平が、ふと口をひらいた。

「さっきちゃんと訊かなかったけど。お嬢は本当は、何か用があってここに来たんじゃないの

か？」

あ。

……それはそうなの。大切な、特別なことなの。だからゼロに頼みこんで、今度だけは優亜が一人で来たの。（そのくせあの子、しっかりザザに連絡とって優亜の先まわりをしたけど）ひとつだけ、ザザに訊きたいことがあって。

「……だって」

だって、ザザが人間になりたいって言うから。

「優亜のほうも、ザザが出ていってから、いろいろ考えたんだもの。ザザを人間にしてあげたかったんだもの！　――せめて、せめて機械じゃなくて、有機生体機械とかだったら？　合金セラミックの骨格じゃなくて、合成強化カルシウムだったら？　蓄電バッテリーじゃなくて人造心臓と人工血液と変成細胞組織だったら？　そういう身体に変えてあげたら、そうしたらザザは『人間』になれるのかって……少なくとも『人間』に近づけるんじゃないかって……」

目の前の二人が、二人とも、驚いたようにこっちを見た。

「半年かけたから」

優亜の舌は勝手に動く。

「……身体はあるの。もう、用意できてるの。あとはデータを移すだけなの。でも、ザザはどうしたいのか、優亜はまだ聞いてない……」

そう。これが『切り札』。
ザザの願いが、もし、そんなことだけで叶うなら。
「でも違うわ！」
優亜は首を横に振る。何度も。
「それは違うっ！　……あたしはザザを変えたくないの!!　ザザの目がさめたとき、それがもう違うザザだなんて、そんなのいやっ!!」
「優亜ちゃん、だけどっ……」
真砂おにーさんが口をはさもうとする。それを遮って優亜は叫ぶ。
「だって！」
だってあたしはまだ。
「優亜はまだザザに謝ってないんだもの！　ごめんなさいって、今のザザに言ってないんだもの!!　それっきりなんてひどい！　ひどすぎるっ……」
ひどすぎる。
ごめんなさい。
傷つけてごめんなさい。
後悔の理由がやっとわかった。……そして、それがもう遅すぎるってことも。

ゼロを呼ぶしかないんだわ。

服の袖についてる呼び出しボタンを押せば、ここまでなら、たぶん十五分くらいで来てくれる。

ゼロが来たら、まずゼロのバッテリーに機関を直結してザザを起こしてみよう。それが駄目だったら、ラボに戻って精密スキャンにかけてみよう。直しようがないことがわかったら……その時は新しいボディを作動させる。そして、まず何よりも先にごめんなさいを言おう。たとえ相手がどんなザザでも。

ザザ。

優亜はソファに近づく。

眠りつづける大切な……『大好きな人』。

スリーピング・ビューティなら王子様がやってきて起こしてくれるんだけど。

王子様のほうが、お姫様の一言だけで眠りにおちちゃう話なんて聞いたこともないわよ。優亜は情けないわよ、ザザ。

最後に笑ったように見えたのは……それしか、もう笑うことくらいしかできなかったから？

今は、何の表情もなくて、ただおちついた横顔。上等の陶器みたいにきれいで、静かで、冷たくて。

ザザ。優亜は、ザザが機械でできているとか、一緒に育ったとか、そういうこと関係なく、

『ザザ』のことを好きだと思うわ。

たとえ違う出会い方をしても、それがどんなザザでも、そのたびに好きになる。……恋をする。

もちろん、今の、目の前にいる、動かなくなってしまったザザのことも。

優亜の黒い髪が、ザザの白い頬に落ちかかる。

ザザ。あたしたちって奇妙な関係で、この世界で使われるどんな言葉でそれをあらわせばいいのか優亜は知らないのよ。

だから、つまらない言葉を使うわ。笑っちゃうような、ドラマの中みたいな言葉を使うわ。今だけ。

「愛しているから……ずっと待ってるから」

帰ってきて。

ザザのやわらかい髪に自分の頬を押しあてて、私は祈ったんだと思う。祈り、だったと思う。一瞬だけど、とても永い時間。

——もう駄目。悲しみの塊に潰される。

大急ぎでザザから離れて、私はその部屋を走り出た。ゼロ。ゼロ、早く来て。早く連れていってしまって。

外に出たい。ザザのいないところ。

もうここにはいたくない。

「！」

京平か真砂おにーさんかどっちかが、何か呼びかけたのはわかってた。

「門まで行くだけっ……ゼロを待つだけよっ」

それだけ。優亜はいなくなったりしない。

叫びかえして、重いドアを押しあけて、通路を走って、下へおりるエレベータにとびこむ。

エレベータの扉がしまると同時に、私は床に座りこんで、もう何度目だかわからないけど声をあげて泣きだしていた。

7

ずしん。

いきなり、鈍く床が揺れた。

何？

地震？

空っぽになった頭で、優亜はぼんやりと考える。それから、上を見て気がつく。

……停まったんだ。エレベータが。

停まった階を示すランプは五階と六階の中間に光ってる。何なの？　故障？
非常ボタンを押したりとか、しなきゃならないのかしら。
放っておきたい。
そのうち誰かが気がつく。ゼロが助けにくる。なんでもいい。どうでも。
ずっと座って、とじこもっていたい。

ぎし。
ぎしぎしぎし。
いやな音が唸りはじめた。やだ。どうして？
壁が小刻みに震えてる。
ロープが……エレベータを動かすワイヤーロープが、どうかしたのかもしれない。万一、切れたりしたら——六階の高さから箱ごと落ちたら……助からないんじゃないかしら。死ぬんじゃないかしら、やっぱり。
死んでしまったら。
優亜が死んでしまったら、ザザとなんて、もう出会いようがないじゃないのっ！
「……誰か」
面倒くさがってる場合じゃなかった。私はパネルに並んだボタンの中でいちばん上にある、

真っ赤に塗られた非常ボタンにとびつく。

え?

手が届かない!?

ど……どういう設計なの、ここは！　子供をなめてるとしか思えないわ！　エレベータに乗るのは身長百三十センチ以上の人だけだとでもいうのっ!!　責任者を出しなさいっ!!

工具を持っていればよかった。こんなパネル外して、中を分解してやりたい。非常回線をひっぱりだして、ちょっと細工すればそれですむのに。

こんなのってないわ。

「誰かっ！　聞こえないのっ!?」

階の途中ってことは、扉の向こうは壁でふさがれてる。箱ごととじこめられてる。

「ゼロっ！　ゼロってば!!」

こんなのってないわ！

金属の軋(きし)みがだんだん大きくなる。近づいてきているみたいで。

上から。

ゼロは呼んだばかりよ。まだ着きやしないわよ。どうするの。どうするの、優亜。

なんでこんなに激しく音が響くの。これからどうなるの!?

ふっ、と電灯が消えた。電源まで切れたんだわ。

暗いところはそんなに怖くない。狭いとこもそれなりに慣れている。
けど、死ぬのだけは嫌だから！
「ゼロ!!」
手さぐりで壁をつたう。鉄の感触。
たすけて。
「……ＸＡ」
夢のような遠くで、自分の声が呟くのを聞く。
「ＸＡ・Ｚ・Ｓ……」
闇（やみ）。死の闇。生まれる前の闇。
オトウサン、オカアサン、ユアハチャントミツケタワ。
ユアハヒトリジャナイ。ユアハヒトリニナラナイ。アノヒトハワタシヲカナシミカラマモル。ダカラユアハイキテイクノ。
だから優亜は生きていくの。あの人のため。あの人のためだけに！
「Ａ……ＺＳＡ　ザ、ザ!!」
「優亜!!」

なにもかもが静止した。夢よりも幻めいて奇跡よりも胸ふるわせる、たったひとつの声。
天井の板が大きくはがされ、真っ暗なエレベータの中で、私は眩しい光を見た。
青白い光。内側から光を放つ、たったひとつの人影。
まるで星が舞いおりたみたいだった。狭い空間には光だけが満ちあふれた。
私は何も言わなかった。ただ天井にあけられた穴からふりそそぐ光を見上げていた。やがてその穴から身をすべりこませて人型の光が床に着地した。それでも、そこに言葉は存在しなかった。……必要なかった。
ほら。
また出会えたわ。
ほんの短い間に、でも私、また少し変わったわ。自信がある。断言できる。
まっすぐに私を見つめる二つの瞳。光を帯びて。激しくて、揺るがずに、優しくて、深い。
透かすことなんかできない。不可解。まさに分析不可能。
だから、ますます近づきたくなる。きっと永遠に。
「優亜……」
呼ばれる。その声で呼ばれる。
光りかがやく、その腕がさしのべられる。
目の高さを合わせるために、その膝を床について。

そして静かにザザは微笑を浮かべる。——ザザが笑う。
「ごめんなさい、優亜」
「ばかっ……！」
それは優亜が言うのよ。先に言われたら言えない。
とびこんだ私の身体をザザの両腕がうけとめて、しっかりと抱きしめた。幻じゃない、本当のザザが。
温かい身体。電圧を上げているんだわ。ボディライトを点けるために。
「ザザ。ひどいこと言ったの。あれは嘘をついたの。ごめんね。ごめんなさい」
「違うんです。僕がうまく本当の気持ちを喋れなくて。優亜を見たら、あんまり嬉しくて何を話せばいいかわからなくなってしまって……それで自分がイヤになって拗ねてただけなんです」
「ばかみたいだわ」
「ええ、なんだか、どんどんばかになっていくみたいです、僕は」
「……ねえ、どうして目がさめたの？　自然に治ったの？」
「まさか」
喉の奥のほうで、ザザがかすかに笑った。
「優亜、決まってるでしょう。あたりまえでしょう。優亜の声が聞こえたから、優亜があの時

『待ってる』って言ってくれたから、僕はもう必死になって優亜を追っかけてきただけなんです。……だから……実はね、あんまり焦っていたものだから……あの、聞いて怒らないでくださいね」

「何？　――また何かやったの？」

「……エレベータ、壊しちゃって」

は？

エレベータが、何？

「……ザザ。それって、もちろん、今、天井に穴あけたってこと、じゃ、なくて……」

「それもありますけど……あの、その前に操作系統のほうが」

「ばっ……ばかばかばかっ!!」

こーの一子一はーっ！　救援の使者みたいな顔して、実は諸悪の根源やってんじゃないのよっ！

「だ、だって……近道しようと思ってエレベータの扉こじあけたんですけど、まさかその一基がまだ動いてて、それに優亜が乗ってるなんて、あの……とっさに、そこまで頭がまわらなくて……」

「怒りはしないわよ、優亜は！　別に怒っちゃいないわよっ！　ただ単に、少しばかり絶望的にすさまじく呆れはててるだけだわっ!!」



「はは……こんなイカレた機械人間（マシノイド）って、きっと僕くらいですよね」
ばーか。そこで妙に嬉（うれ）しそうに笑ってんじゃないわよ。
「そうよ」
イカレてる。イカレきってる。こんなのサギじゃないの。製作者としてのプライドなんてズタズタにしてくれて。
けど、あたりまえなんだわ。ばかばかしいくらいに、そんなの当然なのよ。
そしたら、せいぜい幸せになってやるくらいしかないじゃないの。
だから、温かい肩に額（ひたい）をおしつけて、こんな風に言いきかせてやるわ。
「ザザみたいなばかには、優亜くらいの天才少女がお似合いなのよ。よく憶（おぼ）えておきなさいよ。肝（きも）に銘（めい）じておくのよ、いい？」

9

「終わりよければすべてよしと言いますが……」
おそろしく複雑な様子で、ゼロはそれしか言わなかった。結局、最初の壁三枚に加えてドア一枚とエレベータ一基を再起不能にしておいて、その状況を『良い』と表現しちゃっていいものか、非常に良心的に悩（なや）んでいるんだと思う。

「でも真砂おにーさんは、ザザが治るんだったら金がかかってもいいって言ってたのよ」
「人の言葉を都合よく解釈してはいけません」
「……だからって弁償のべの字も言い出さなかったじゃないの、ゼロは」
「当然です。あれはザザのやったことですから、ザザが自らの働きで償えばいいんです。因果応報、自業自得というものですね」
さすがに徹底してるわ、ゼロって。
大騒ぎしたけど、終わってみると、表面的には何も変わらなかった。
優亜はこうして地下に戻ってきたし、ザザは相変わらず早水家の居候におさまっている。
新しい——より人間らしい——身体については、ザザはあっさり笑って、
「僕にはまだ早いでしょう」
の一言でかたづけてしまった。まわりの人間たちが拍子ぬけするくらいに。
「ねえ、ゼロ。ゼロはどう思う？　人間のカラダってザザにとって全然、無意味なものだったりするのかしら」
もちろん、ゼロ自身は、優亜が半年前に今のプロジェクトを進めはじめた時点から、しつこいくらいに『私の分は不要ですから。くれぐれも余計な気をおこさないように』と念を押している。……ゼロって、人間のことはあまり好きじゃないのかも。
「無意味だったら、『まだ』などという言葉は使いませんよ、優亜様」

あら。

ザザのことを馬鹿だ馬鹿だって言いまくるゼロのことだから、また一刀両断にしてもおかしくなかったんだけど。

「物事には段階というものがあります。『外側』がいくら人間的でも、『内側』が確立していなければ、それはあくまで擬似人間にすぎません。ザザにはそのことがわかっているんでしょう」

「……そういうものかしら」

「それに、お嬢様、私たちはあなたに創られた自分自身に誇りをもっていますからね」

そう言って、めずらしくゼロは笑ったようだった。

「だから、いつか来る『その時』までは、ザザからザザをとりあげるべきではないと思います」

……いつか来る、その時までは。

そうね。優亜も信じようと思う。信じて待とうと思う。優亜は優亜にできる精一杯のことをして。

そうして、私たちはいつか最高の出会い方をするんだわ。

人は生きていける。誰だってきっと、生きていくことができる。
たったひとつの、そしていくつもの愛のために。

あとがき

はい、あとがきのお時間です。

半年ぶりのコバルト文庫新刊は、ようやく一冊にまとまってくれた『ＸＡＺＳＡ』でございます。

知ってる人はすごくよく知ってる『ＸＡＺＳＡ』ですが、知らない人は知らないだろうから（当たり前だ）説明いたしましょう。これは私が隔月刊「Ｃｏｂａｌｔ」昨年四月号に読みきりとして発表して、その後、八月号、十月号、十二月号の三回にわたって連載した作品を一冊に収録したものでございます。

今回、単行本化にあたって前に書いた原稿をまた全部見直したんですが、なんか恥ずかしいですね……文章がぜんぜん違う！　特に私はこの一年間（いや、いまだに継続中だが）文章ががらがら変わりまくりで、それが一冊の本に全部入っちゃうのは……ううううう恥ずかしいっやだなあやだなあっ。

でも手直しはしなかった……というか、できなかった。今の私から見れば、半年前の私や一年前の私はとんでもない未熟者でしかないんですが、雑誌に発表された時点で「彼ら」は勝手に命をもってしまって、それはもう今の私にだってどうしようもないんです。

思えば、この本に入ってる作品では初めてのことばっかりだった。六十枚なんて枚数で読みきり書かせてもらったのも初めて（それまで三十枚が最高だった）だし、三回連載も初めてで。あ、連載は連載だけど、正式には「シリーズ連作」なんだよね。「Ｃｏｂａｌｔ」は隔月刊だからあんまり続きものにならないようにね、という条件があって、ちょうど私も短編連作がやりたかったから、結局一人称が毎回ちがうものになりました。

初めてのこと、書いたことないものばっかりで、いつも大変だったような気がするけど、大変だと思う以上にやりたい放題やってるからなあ……。

いい人たちを書くことができてよかったなあ、と今は思います。ＸＡＺＳＡの登場人物たちはみんな大好きです。彼らを「書いた」というより「書かせてもらった」という気がします。極上の役者さんと一緒に仕事をした映画監督なら、こんな気分なのかなあ。（いやでもどっちかっつーとカメラマンじゃないかな、私の仕事は。撮影監督。脚本・監督・主演は何をかくそう京平（きょうへい）さんである）

私が書いている他のどの作品とも違うことが、ＸＡＺＳＡにはあります。さてそれは何でしょう？　ふふふふふ、クイズだ。

〈File・O〉

えー、これがその読みきりです。収録されてる話の中で、この京平さんがいちばんかっこいいですね……やばいな。あたしゃ京平さんがかっこいいとゆーことを忘れてたよ。とほほほ、申し訳ない。この人の一人称は書きやすいし、好きです。

いつだったか、夜中に銀座、日本橋、東京、丸の内あたりを歩きまわったことがあるんですが、銀座なんて昼間は気取った街なのに、夜はいそべ焼きの屋台とか出てて、フラメンコを踊るお姉さんのパンチラにおじさんたちが拍手してたりして、下手っくそなパントマイムを必死にやってるお兄さんがいたりして、すごく面白かったです。高級車ばっかりバーッと停まってる通りがあるかと思えば、ほんっとに誰もいない無人地帯もあるし。すぐそこまで真っ暗だったのに、いきなりキラキラの建物が現れたりするし。

新宿や原宿あたりで歌ってようが踊ってようがパフォーマンスやってようが、そんなの当たり前の風景だと思えるんだけど、銀座だと妙に違和感があって、変に面白くて、なんか目が向いてしまう。それって私だけかな。

六本木も好きですね。変なんだよ、あそこって（この言い方はなんか誤解を招きそうだが）。実際には、私が遊びに行くのはいつも新宿方面です。どーせお子様だもん。

〈File・1〉

新連載スタート、とかいっていきなりこの話から読んだら、まずたいていの人は瞳ちゃんが主役だと思うだろう。……すみません。

音楽は、好きです。好きというか、水や食べ物と同じで、摂取していなければ生きていけないもののひとつです。

私は小説を書くのが好きで、小説という表現手段が好きで、白い紙に黒い活字しか残らないこの世界が好きで、それで小説を書いているわけですが、小説にまつわる数多い制約のなかでいちばん大きいのは、活字には音がつかないこと！　だと思うなあ。活字には、色も匂いも絵も鉛筆のかすれかたも、そして音も、何も関係ない。

でも制約ってのは本当は嘘なんです。とっくにたくさんの人が言ってることだけど、それは無限の可能性なんです。

音楽が聞こえてくる小説が書けたら最高だよなあ。これはその遠大な野望に向けての、小さな第一歩。それにしてもアイドル業界はいまだにつまんないぞー。おまけにロック業界まで元気がない。バンドブームって本当にブームだったのか、疑問だ。

〈File・2〉

いや、得意ワザもたまにはいいかなと思って（笑）。

読みきりのころから真砂くんは不思議とまわりに人気がありまして、しかし私自身はいまひとつ真砂ってわからん奴だなーと思っていたので、じゃあメインにしてみようかと安易に（笑）もってきたのがこの話。でも面白かったですねー。弘明くんのお陰だ。真砂くんはとんでもなくおいしい奴であることがこれで判明した。

しかしこれ、Cobaltの発売日が九月十八日で、それに合わせて「十月になったら体育祭」というセリフが入ってるんだけど、実は謎がひとつあるんですっ。やばいなーと思ってたら案の定「祥英の衣替えっていつなんでしょうか」というお手紙が届いてしまった。偉いぞ、よく気づいた。ガクラン着てるんだよね、この人たち……九月なんてまだ暑いさかりなのに……。

きっと祥英の衣替えは九月十五日だ。やっぱり進学校はこのへんが一味違うぜっ。ふはははっ。

で、立川にある私立祥英高校、という舞台を使うのはこれが初めてではありません。皆様お察しのとおり！　ハイスクール・オーラバスターのほうで活躍なさっている沈着冷静参謀型術

者さん（仮名）の母校として『迷える羊に愛の手を』のときにしっかり書いております。憶えていてくれてありがとうございます。

できたら体育祭のほうまで話をひっぱりたかったんだけど、枚数的に無理だったんで、今回おまけを書き下ろしてみました。おまけってことで羽目がぶっとんだのか……思いっきり遊んでますね……我ながらボーゼン。まあいっかー、おまけだしーとか言って……反省の色はないのか！

やってみたかったんです。すまん。真砂くん、怪我は完治してたのかなー。

（ちなみに生徒会の連中がグルになって不正をはたらいていたかどうかは、いちおう謎ってことになってますがー……なんたってあの面子のやることですから、真相は推して知るべし。どこかの誰かさんが「ああ、どうして僕だけ青組になってしまったんだろうっ。先輩たちと一緒がよかったのに……」と落とした肩に、ぽんと手をおいて誰かさんが「気にするようなことじゃないよ。ところで……」なーんてこともあったかもしれないがこれ以上は書けませんっ。どうせ日常茶飯事なんだし……って、それじゃ全然フォローになってない……）

〈Ｆｉｌｅ・３〉

甘いっ！　私が今まで書いたなかで一、二を争う甘いロマンス（どひゃーっ）だと思いま

す。これが雑誌に出た直後、前田さんと榎木さんが異口同音に「今回のは甘かったよおーっ」とお電話くださったことを私は忘れられない……ありがとうございます。普段あんまりきちんと言えませんが、いつも感謝しております。

しかしこれは、私が今まで書いたなかで一、二を争う難産であったことも否めない。ものすごく時間かかりました。なにせ、それまで早弾きギターばりばりの高速ヘヴィメタルを書いてた奴が、おもむろにピアノをとりだしバラードを書くようなものである。（この比喩はかなり正しいと我ながら思うっ）

やっぱりＸＡＺＳＡの要はこの話ですね。実は今回の事件とかはまだまだザザにとっての第一関門にすぎないんじゃないかと、私は思います。それはザザ次第なのかもしれないけど……。

ザザのことはまだまだ書きたりない。ザザは私にとってスルメみたいな奴です。書けば書くほど、変化していく。これからもどう変わっていくのか、すごく気になる。若木未生は『人間じゃない存在』が好きみたいで、人工生命体の関係もけっこうたくさん書いていますが、人間になりたいなんて言いだして作者を困らせる奴はおまえだけだよっ。

そういえばこれを書くにあたって、ピアノ曲のＣＤを何枚か買いこんだんですが、どの『エリーゼ』もサラッとお洒落に弾いてる感じで、京平さんのような弾き方をしてくれる人はいませんでした。残念。そりゃ確かにお洒落な曲だけど。ええ、単に私がベートーベンの曲を思い

っきり暗いニュアンスで聴くのが好きなだけですってば……。

あ、あと、ザザと優亜は知らなかったようですが、『エリーゼ』のメロディーを使った歌はたくさんあります。それがベートーベンに失礼だとは、別に私は思わない……が、しかしザザみたいな発想でラブソングに使われたらやっぱり失礼かもしれない。やだなあ。誰かこの二人をなんとかしてくれっ。

ということで、この本はおしまいです。よかったら二冊目も手にとってやってください。現在、Ｃｏｂａｌｔで第二期分の連載をやってる最中だったりするんです。三回連載だからもうすぐ終わるけど……。

ここでクイズの答え。私の書く他の作品とＸＡＺＳＡの違いは……まあいろいろありますが……いちばん大きいこと。

それは、『終わり』がないってことです。

他のどの作品も完結に向かって進んでいるんだけど、ＸＡＺＳＡだけは違うんです。

二冊目を出したあと、多分しばらく「彼ら」を書くことはないだろうし、ひとつひとつの物語は確実に「終わって」いくし、時間は流れるし、人は変わっていくし、でも私はきっとまた「彼ら」を書くだろうと思うんです。

ザザには迷惑かもね。こんな作者だけど書かせてくれ、頼む。（笑）

田村純子さんには、いちばん最初の読みきりの時点から、ずーっとイラストを担当してもらってます。新人発掘とかには縁のない私が、なぜかデビュー作から惚れこんでしまったのが田村さんなんです。でも単行本までこぎつけるとは、あの読みきりのときはお互いに思ってなかったよね、田村さん。夢がまたひとつ叶って嬉しいです。

（そういや田村さんの初コミックスも出たばっかり。ダブルでめでたいっ。白泉社花とゆめコミックスだよっ）

締め切りのたびに迷惑かけちゃってごめんなさい。ありがとうございますっ。これからもよろしくお願いします。

さて、この本が出るのは六月。そしてラインナップを見ると、おやっ七月に『エクサール騎士団2』が入っているぞ！　本気か!?　本当に出るのか!?

はっきり言って状況は余談を、じゃなかった予断を許さない。二か月連続で皆さんにお会いできるかどうかは、若木の右腕にかかっているのだった！

はたして結果はいかに。来月、そのことについてじっくりお話ししたいものであります。おいおいどーすんだよ。

それじゃそろそろ一仕事してくるぜっ。ではまたっ。

若木未生

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座、Ａ型。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ 前・後編』『エクサール騎士団１』などがある。



XAZSA——ザザ—— ver.1

COBALT-SERIES

1992年６月10日　第１刷発行
1993年11月20日　第４刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230)６２６８(編集)
電話　東京(3230)６３９３(販売)
(3230)６０８０(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1992
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611646-4 C0193

コバルト文庫
〈好評発売中〉



私はレア、多元界の
因果力(エール)を制御する者―。
アクション・ファンタジー!

エクサール



若木未生

来生(きすぎ)あきら、14歳。彼女の真の姿は、異次元の〈琅月界(ろうげつかい)〉からやってきた巫女(エクサール)なのだ…。

コバルト文庫

〈好評発売中〉

天使はうまく踊れない

高一生の亮介には、見えないはずのものが見える厄介な力がある。ところが、最近奇妙な奴らが出現して…。



セイレーンの聖母

十九郎が狙われた!?　とてつもない妖力をもつ女を敵にまわして、総帥の斎加忍はある作戦を。

十字架の少女

夏休み、亮介たちは諒の妹・彩を迎えて、軽井沢で合宿をはじめた。悲惨な過去をもつ彼女は。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活、妖の者に闘いを挑む希沙良と十九郎…オムニバス形式でおくる初の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う髪切り事件が続発した。事件に妖の者の気配を感じた亮介たちは、ある作戦を…。

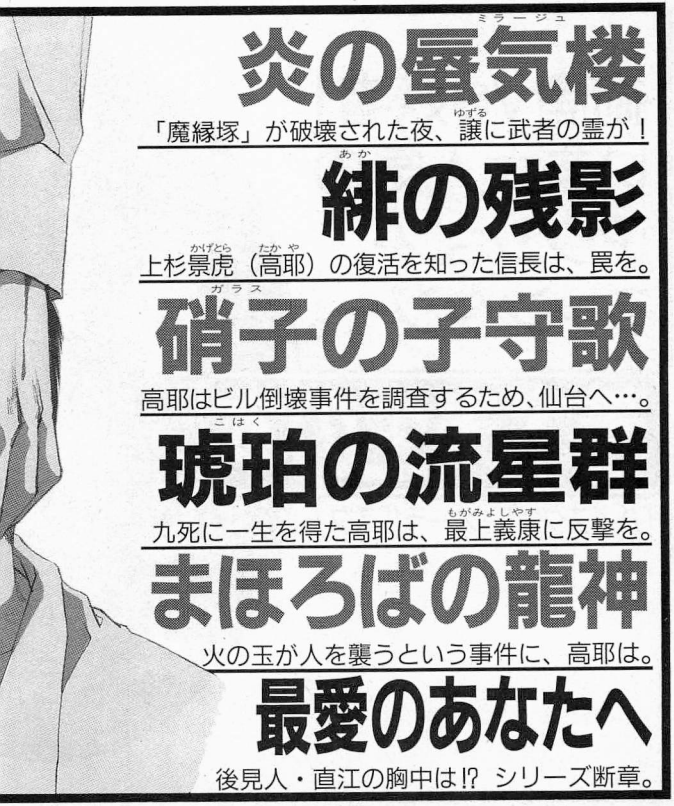
術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。



若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」

コバルト文庫
〈好評発売中〉



炎の蜃気楼（ミラージュ）

「魔縁塚」が破壊された夜、譲（ゆずる）に武者の霊が！

緋（あか）の残影

上杉景虎（かげとら）（高耶（たかや））の復活を知った信長は、罠を。

硝子（ガラス）の子守歌

高耶はビル倒壊事件を調査するため、仙台へ…。

琥珀（こはく）の流星群

九死に一生を得た高耶は、最上義康（もがみよしやす）に反撃を。

まほろばの龍神

火の玉が人を襲うという事件に、高耶は。

最愛のあなたへ

後見人・直江の胸中は!? シリーズ断章。

戦国時代が
現代に復活！
迫力の人気
ファンタジー。

桑原水菜の本

「炎の蜃気楼（ミラージュ）」シリーズ



コバルト文庫

〈好評発売中〉



真の名の使命を思いだせ！

東方の魔女

高校1年の翔（かける）は、叔父とふたり暮らし。ところが突然、魚のような怪物に襲われ、異世界へ。

失われた王家の姫の血を守れ。

地龍の遺産

ミズベ国の平和をとりもどした王子リダーロイス（翔）は、恩を受けた地龍とある約束をするが…。

リダーロイスが、再び地球界へ。

扉を待つ姫

行方不明の姉・フロルメイ王女を見つけだすため、地球界へ戻ってきたリダーロイスの運命は。

ミズベ国に
くり広げられる
迫力の冒険
ファンタジー。



榎木洋子の本

「リダーロイス」
シリーズ

コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

［コバルト］

Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。